

福岡市埋蔵文化財調査報告書第583集

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ

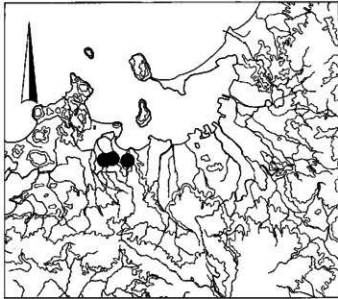
飯氏遺跡第6次調査
飯氏引地遺跡第1次調査
徳永A遺跡第4次調査
青木遺跡第3次調査

1998

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第583集

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ



1998

福岡市教育委員会



第2図 飯氏遺跡第6次第1地点遠景(東から)



第3図 飯氏遺跡第6次第3地点、同4地点(西から)



第4図 飯氏遺跡第6次第2地点土層
北壁土層(西から)



第5図 飯氏遺跡第6次第3地点
南壁土層(北から)



第6図 飯氏遺跡第6次第4地点
北壁(遺構865)土層(南から)



第7図 飯氏遺跡第6次第4地点
北壁(遺構864, 877)土層
(東から)



第8図 徳永A遺跡第4次調査区全景（南東から）



第9図 青木遺跡第3次調査区全景（北から）

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と歴史が残されています。その中でも糸島平野と今宿平野には大陸との交流の痕跡をとどめる遺跡が多く存在しています。これらの遺跡を保護し、未来へ伝えていくのは行政に課された責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大の結果、その一部が失われつつあるのもまた事実です。

福岡市教育委員会は、開発にともなうやむを得ず失われていく遺跡については事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

本書は一般国道202号及び一般国道497号改築工事の伴う西区の飯氏遺跡・飯氏引地遺跡・徳永A遺跡・青木遺跡の発掘調査の成果について報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

1998年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 町田 英俊

はじめに

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成7年度及び8年度に、建設省九州地方建設局福岡国道事務所から委託を受け実施した、国道202号線今宿バイパス建設用地内における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、教育委員会埋蔵文化財課がおこなった。以下に調査地点と、各担当者とを示す。

平成7年度

飯氏遺跡（6次調査）

杉山富雄

飯氏引地遺跡（1次調査）

杉山富雄

徳永A遺跡（4次調査）

屋山 洋

平成8年度

青木遺跡（3次調査）

屋山 洋

調査現場においては、加えて瀧本正志、長家伸、大塚紀宣の協力を得た。

3. 整理本報告書作成は各担当が当たったが、加えて山崎純男の協力を得た。

本文目次

I. 国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概要 ～平成7年度及び8年度～	1
1. 今宿バイパス関係の発掘調査について	3
福岡県教育委員会による調査	3
福岡市教育委員会による調査	3
2. 平成7年度の調査	3
試掘調査	3
本調査	3
3. 平成8年度の調査	3
試掘調査	3
本調査	3
II. 飯氏遺跡第6次調査	5
1. 飯氏地区における発掘調査	7
1) 飯氏地区における調査の経過	7
2) 飯氏地区における調査の方法	7
2. 飯氏遺跡第6次調査1区調査報告	7
1) 飯氏6次1区の調査	7
飯氏遺跡の地形	7
調査区	7
2) 飯氏6次1区調査の成果	14
掘立柱建物	14
掘立柱建物20	14
掘立柱建物30	14
掘立柱建物40	15
掘立柱建物50	15
掘立柱建物60	16
掘立柱建物70	16
掘立柱建物80	17
掘立柱建物90	17
掘立柱建物100	19
掘立柱建物110	19
掘立柱建物120	20
掘立柱建物130	21
掘立柱建物140	21
掘立柱建物150	22
掘立柱建物160	22
掘立柱建物659	23
掘立柱建物660	25
掘立柱建物661	25
掘立柱建物662	25
掘立柱建物663	27

掘立柱建物664	27
掘立柱建物729	28
掘立柱建物914	28
掘立柱建物915	30
掘立柱建物916	30
掘立柱建物917	31
掘立柱建物918	31
掘立柱建物920	31
竪穴住居	32
竪穴住居692	32
埴甕・土器埋置	33
遺構393	33
埴甕549	33
埴甕691	33
土壌	35
土壌10	35
土壌11	35
土壌558	35
溝	36
溝233	36
溝579	37
溝634・635・640・642	37
溝655	37
飯氏6次地点出土縄文時代遺物	38
3. 飯氏遺跡第6次調査第2地点	39
1) 飯氏遺跡第6次第2地点の調査概要	39
確認調査	39
調査の概要	39
2) 飯氏遺跡第6次第2地点の調査成果	39
溝387	41
遺構391	41
遺構400	46
4. 飯氏遺跡第6次調査第3地点	47
1) 飯氏遺跡第6次第3地点の調査概要	47
調査区の位置と地形	47
調査の概要	47
2) 飯氏第6次第2地点の調査成果	47
竪穴住居	53
竪穴住居774	53
竪穴住居775	54
竪穴住居787	56
竪穴住居810	58
甕813	60

堅穴住居811	60
堅穴住居832	61
堅穴住居863	61
堅穴住居919	62
竈814	62
甕棺墓	66
甕棺墓767	66
甕棺墓762	67
甕棺墓764	68
甕棺墓765	69
甕棺墓766	70
甕棺墓773	71
甕棺墓809	73
甕棺墓815	74
甕棺墓817	75
甕棺墓828	77
土壌760	78
土壌788	78
遺構800	79
遺構807	80
土壌808	80
溝791	81
溝870	81
飯氏6次3地点採集遺物	82
5. 飯氏遺跡第6次調査第4地点	83
1) 飯氏6次第4地点の調査概要	83
調査区的位置と地形	83
確認調査	83
調査の概要	83
2) 飯氏6次第4地点の調査成果	83
溝673・674	87
遺構665	91
遺構677	92
遺構684	92
III. 飯氏引地遺跡第1次調査	93
6. 飯氏遺跡第6次調査第5地点	95
1) 調査の概要	95
2) 調査の成果	95
谷688	95
7. 飯氏遺跡第6次第6地点	98
1) 調査の概要	98
2) 調査の成果	98
溝737・754	98

包含層738	98
IV 徳永A遺跡第4次調査	101
1. 遺跡の立地と環境	103
2. これまでの調査	103
3. 調査の概要	106
4. 遺構と遺物	106
1) 竪穴住居	106
SC003	106
SC007	106
SC008	106
SC011	110
2) 掘立柱建物	110
SB01	110
SB03	110
SB04	110
SB04	110
3) 溝	110
SD004	110
SD006	110
SD009	112
SD012	112
SD013	112
4) その他の遺構と遺物	113
SX010	113
SX014	113
5. 小結	116
V. 青木遺跡第3次調査	123
1. 調査の組織	125
2. 遺跡の立地と環境	125
3. 調査の概要	125
4. 遺構と遺物	126
1) 掘立柱建物	126
SB01	126
SB02	126
SB03	127
2) 上坑	127
SK002	127
SK003	127
SK004	127
3) 溝	127
SD001・005	127
SD006	127
5. 小結	128

目 次

第1図	遺跡位置図	
第2図	飯氏遺跡第6次第1地点遠景(東から)	
第3図	飯氏遺跡第6次第3地点, 同4地点(西から)	
第4図	飯氏遺跡第6次第2地点土層 北壁土層(西から)	
第5図	飯氏遺跡第6次第3地点 南壁土層(北から)	
第6図	飯氏遺跡第6次第4地点 北壁(遺構665)土層(南から)	
第7図	飯氏遺跡第6次第4地点 北壁(遺構665, 677)土層(東から)	
第8図	徳永A遺跡第4次調査区全景(南東から)	
第9図	青木遺跡第3次調査区全景(東から)	
第10図	調査遺跡位置図(1/25,000)	4
第11図	飯氏地区遺跡調査区的位置(1/5,000)	8
第12図	飯氏遺跡調査区(1/1,000)	9
第13図	飯氏引地遺跡調査区(1/1,000)	10
第14図	飯氏遺跡第6次第1地点遺跡調査区遠景(東から)	11
第15図	飯氏遺跡第6次第1地点遺跡西半区全景(東から)	11
第16図	飯氏遺跡第6次第1地点遺跡西半西端区全景(東から)	12
第17図	飯氏遺跡第6次第1地点遺跡東半区全景(東から)	12
第18図	飯氏遺跡第6次第1地点遺跡東半北辺区全景(東から)	13
第19図	飯氏遺跡第6次第1地点遺跡東半北端区全景(東から)	13
第20図	掘立柱建物20実測図(1/60)	14
第21図	掘立柱建物30実測図(1/60)	14
第22図	掘立柱建物30柱穴出土遺物実測図(1/3)	14
第23図	掘立柱建物40実測図(1/60)	15
第24図	掘立柱建物40柱穴出土遺物実測図(1/3)	15
第25図	掘立柱建物50実測図(1/60)	15
第26図	掘立柱建物50柱穴出土遺物実測図(1/3)	16
第27図	掘立柱建物60実測図(1/60)	16
第28図	掘立柱建物70実測図(1/60)	16
第29図	掘立柱建物80実測図(1/60)	17
第30図	掘立柱建物90実測図(1/60)	17
第31図	掘立柱建物90柱穴出土遺物実測図(1/3)	17
第32図	掘立柱建物60(東から)	18
第33図	掘立柱建物70(北から)	18
第34図	掘立柱建物80(北から)	18
第35図	掘立柱建物100実測図	19
第36図	掘立柱建物110実測図	19
第37図	掘立柱建物110柱穴出土遺物実測図	19
第38図	掘立柱建物110・120(東から)	20
第39図	掘立柱建物120実測図(1/60)	20
第40図	掘立柱建物120柱穴出土遺物実測図(1/3)	20

第41図	掘立柱建物130実測図 (1/60).....	21
第42図	掘立柱建物130柱穴出土遺物実測図 (1/3).....	21
第43図	掘立柱建物140実測図 (1/60).....	21
第44図	掘立柱建物140柱穴出土遺物実測図 (1/3).....	21
第45図	掘立柱建物150実測図 (1/60).....	22
第46図	掘立柱建物160実測図 (1/60).....	22
第47図	掘立柱建物160柱穴出土遺物実測図 (1/3).....	22
第48図	掘立柱建物659実測図 (1/60).....	23
第49図	柱穴524実測図 (1/20).....	23
第50図	掘立柱建物659柱穴出土遺物実測図 (1/3).....	23
第51図	掘立柱建物659柱穴出土遺物.....	23
第52図	掘立柱建物150柱穴出土遺物実測図 (1/3).....	24
第53図	掘立柱建物130・140・150 (東から).....	24
第54図	掘立柱建物130・140・150 (北から).....	24
第55図	掘立柱建物660実測図 (1/60).....	25
第56図	掘立柱建物661実測図 (1/60).....	25
第57図	掘立柱建物662実測図 (1/60).....	25
第58図	柱穴524 (北から).....	26
第59図	掘立柱建物660 (南から).....	26
第60図	掘立柱建物662 (東から).....	26
第61図	掘立柱建物663実測図 (1/60).....	27
第62図	掘立柱建物664実測図 (1/60).....	27
第63図	掘立柱建物664柱穴出土遺物実測図 (1/3).....	27
第64図	掘立柱建物729実測図 (1/60).....	28
第65図	掘立柱建物914実測図 (1/60).....	28
第66図	掘立柱建物914柱穴出土遺物実測図 (1/3).....	28
第67図	掘立柱建物663 (北から).....	29
第68図	掘立柱建物664 (南から).....	29
第69図	掘立柱建物729 (南から).....	29
第70図	掘立柱建物915実測図 (1/60).....	30
第71図	掘立柱建物916実測図 (1/60).....	30
第72図	掘立柱建物917実測図 (1/60).....	30
第73図	掘立柱建物918実測図 (1/60).....	31
第74図	掘立柱建物920実測図 (1/60).....	31
第75図	竪穴住居692実測図 (1/60).....	32
第76図	竪穴住居692出土遺物実測図 (1/4).....	32
第77図	竪穴住居692 (東から).....	32
第78図	土器埋置393実測図 (1/20).....	33
第79図	土器埋置549実測図 (1/10).....	33
第80図	深鉢549実測図 (1/4).....	33
第81図	土器埋置691実測図 (1/10).....	33
第82図	壺棺墓393実測図 (1/20).....	34
第83図	土器埋置549 (北から).....	34

第84図	土器埋置393 (北から).....	34
第85図	土壌10 (1/30).....	35
第86図	土壌11 (1/30).....	35
第87図	土壌558実測図 (1/30).....	35
第88図	土壌558出土遺物実測図 (1/4).....	36
第89図	土壌558 (東から).....	36
第90図	溝233実測図 (1/80).....	36
第91図	溝579実測図 (1/80).....	37
第92図	溝233出土遺物実測図 (1/3).....	37
第93図	溝634・635・640・642 (北から).....	37
第94図	溝655 (東から).....	37
第95図	飯氏遺跡第6次地点出土縄文時代遺物 (1/2.1/4).....	38
第96図	飯氏遺跡第6次第2地点西半調査区全景 (西から).....	39
第97図	飯氏遺跡第6次第2地点全体遺構実測図 (1/200).....	40
第98図	飯氏遺跡第6次第2地点北壁土層実測図 (1/100).....	40
第99図	飯氏遺跡第6次第2地点西半区北壁土層 (南から).....	41
第100図	溝387実測図 (1/80).....	41
第101図	遺構391実測図 (1/80).....	41
第102図	飯氏遺跡第6次第2地点東半調査区全景 (東から).....	42
第103図	飯氏遺跡第6次第2地点東半区北壁土層 (西から).....	42
第104図	遺構400遺物上部遺物出土状況 (南から).....	43
第105図	遺構400発掘後の状況 (北から).....	43
第106図	遺構400出土遺物実測図1 (1/4).....	44
第107図	遺構400出土遺物実測図2 (1/4).....	45
第108図	遺構400出土遺物実測図3 (1/2).....	46
第109図	飯氏遺跡第6次第3地点西半調査区全景 (西から).....	47
第110図	飯氏遺跡第6次第3地点西半調査区全景 (東から).....	48
第111図	飯氏遺跡第6次第3地点西半調査区西端部全景 (東から).....	48
第112図	飯氏遺跡第6次第3地点東半調査区全景 (西から).....	49
第113図	飯氏遺跡第6次第3地点東半調査区東端部全景 (東から).....	49
第114図	飯氏遺跡第6次第3地点東半調査区西半部全景 (東から).....	50
第115図	1 飯氏遺跡第6次第3地点南壁土層 (北から) 2 北壁土層 (南から).....	50
第116図	飯氏遺跡第6次第3地点全体遺構実測図 (1/200).....	51
第117図	竪穴住居774実測図 (1/60).....	53
第118図	竪穴住居774遺物出土状況 (東から).....	53
第119図	竪穴住居774出土遺物実測図 (1/3).....	54
第120図	竪穴住居774実測図 (1/60).....	54
第121図	竪穴住居774出土遺物実測図1 (1/3).....	54
第122図	竪穴住居774出土遺物実測図2 (1/3).....	55
第123図	竪穴住居774出土遺物.....	55
第124図	竪穴住居787実測図 (1/60).....	55
第125図	竪穴住居787出土遺物実測図 (1/3).....	56
第126図	竪穴住居787 (東から).....	57

第127図	竪穴住居810 (東から)	57
第128図	竈813(竪穴住居810内) (東から)	57
第129図	竪穴住居787出土遺物	58
第130図	竪穴住居810実測図 (1/60)	58
第131図	竈813実測図 (1/30)	58
第132図	竪穴住居810出土遺物実測図 (1/3)	59
第133図	竪穴住居810出土遺物	59
第134図	竪穴住居811実測図 (1/60)	60
第135図	竪穴住居811出土遺物実測図 (1/3)	60
第136図	竪穴住居832実測図 (1/60)	61
第137図	竪穴住居863実測図 (1/60)	61
第138図	竪穴住居863出土遺物実測図 (1/3)	62
第139図	竪穴住居919実測図 (1/60)	62
第140図	竈814実測図 (1/30)	63
第141図	竈814(竪穴住居919内) (東から)	63
第142図	竪穴住居919出土遺物実測図 1 (1/3)	63
第143図	竪穴住居919出土遺物実測図 2 (1/3)	64
第144図	竪穴住居919出土遺物	64
第145図	竪穴住居832 (北から)	65
第146図	竪穴住居863 (北から)	65
第147図	竪穴住居919 (東から)	65
第148図	甕棺墓767実測図 (1/20)	66
第149図	甕棺墓767 (南から)	66
第150図	甕棺1123実測図 (1/6)	66
第151図	甕棺1123	66
第152図	飯氏遺跡第6次第3地点西半調査区甕棺墓出土状況 (東から)	67
第153図	甕棺墓762実測図 (1/20)	67
第154図	甕棺1044実測図 (1/6)	67
第155図	甕棺墓762 (西から)	68
第156図	甕棺762	68
第157図	甕棺墓764実測図 (1/20)	68
第158図	甕棺墓764 (南から)	68
第159図	甕棺1031・1469実測図 (1/6)	69
第160図	甕棺1031・1469	69
第161図	甕棺墓765実測図 (1/20)	69
第162図	甕棺墓765 (南から)	69
第163図	甕棺1121実測図 (1/6)	70
第164図	甕棺1121	70
第165図	甕棺墓766実測図 (1/20)	70
第166図	甕棺墓766 (西から)	70
第167図	甕棺1475・1476実測図 (1/6)	71
第168図	甕棺1475・1476	71
第169図	甕棺墓773実測図 (1/20)	71

第170図	甕棺1039実測図 (1/8)	72
第171図	甕棺墓773 (北から)	72
第172図	甕棺1039	72
第173図	甕棺墓809実測図 (1/20)	73
第174図	甕棺1117・1118	73
第175図	甕棺1117・1118 実測図 (1/6)	73
第176図	甕棺墓809 (西から)	74
第177図	甕棺墓815実測図 (1/20)	74
第178図	甕棺1151実測図 (1/6)	74
第179図	甕棺墓815 (西から)	75
第180図	甕棺1151	75
第181図	甕棺墓817実測図 (1/20)	75
第182図	甕棺1127・1128	75
第183図	甕棺墓817	76
第184図	甕棺1127・1128実測図 (1/6)	76
第185図	甕棺墓828実測図 (1/20)	77
第186図	甕棺1176実測図 (1/6)	77
第187図	甕棺墓828 (南から)	77
第188図	甕棺1176	77
第189図	土壇760実測図 (1/30)	78
第190図	土壇760 (南から)	78
第191図	遺構788 (西から)	78
第192図	遺構788実測図 (1/30)	79
第193図	遺構800実測図 (1/20)	79
第194図	遺構800出土遺物実測図 (1/3)	79
第195図	遺構807実測図 (1/20)	79
第196図	遺構807 (北から)	80
第197図	遺構807出土遺物実測図 (1/3)	80
第198図	土壇808実測図 (1/30)	80
第199図	土壇808出土遺物実測図 (1/3)	81
第200図	土壇808出土遺物実測図 (1/3)	81
第201図	溝791実測図 (1/80)	81
第202図	溝870実測図 (1/80)	82
第203図	遺構870 (北から)	82
第204図	飯氏遺跡第6次第3地点採集遺物実測図 (1/4)	82
第205図	飯氏遺跡第6次第4地点調査区北壁土層実測図 (1/80)	83
第206図	飯氏遺跡第6次第4地点全体遺構実測図 (1/200)	84
第207図	飯氏遺跡第6次第4地点全景 (西から)	85
第208図	飯氏遺跡第6次第4地点南端部 (北から)	85
第209図	溝673・674 (西から)	86
第210図	遺構665 (西から)	86
第211図	溝673・674実測図 (1/80)	87
第212図	溝674土層断面 (北から)	87

第213図	遺構665実測図 (1/80)	88
第214図	遺構665出土遺物実測図 1 (1/3)	89
第215図	遺構665出土遺物実測図 2 (1/3)	90
第216図	遺構665出土遺物	90
第217図	遺構667・684出土遺物実測図 (1/3)	91
第218図	飯氏引地遺跡第1次第1地点出土遺物実測図 (1/3, 1/4)	95
第219図	飯氏引地遺跡第1次第1地点全体遺構実測図 (1/200)	96
第220図	飯氏引地遺跡第1次第1地点全景 (東から)	97
第221図	飯氏引地遺跡第1次第1地点全景 (北から)	97
第222図	遺構754・737遺構実測図 (1/60)	98
第223図	飯氏引地遺跡第1次第2地点出土遺物実測図 (1/3, 1/2)	98
第224図	飯氏引地遺跡第1次第2地点全体遺構実測図 (1/200)	99
第225図	飯氏引地遺跡第1次第2地点全景 (東から)	100
第226図	飯氏引地遺跡第1次第2地点全景 (北から)	100
第227図	調査区周辺図 (1/4, 000)	104
第228図	調査区位置図 (1/1, 000)	105
第229図	調査区全体図 (1/200)	107
第230図	SC003・SC008実測図 (1/60)	108
第231図	SC007・SC011実測図 (1/30・1/60)	109
第232図	掘立柱建物実測図 1 (1/60)	111
第233図	掘立柱建物実測図 2 (1/60)	112
第234図	SX014土層実測図 (1/40)	113
第235図	遺物実測図 1 (1/3・1/1)	114
第236図	遺物実測図 2 (1/3・2/3・1/1)	115
第237図	1 調査区全体図 (南東から) 2 SC003 (北東から)	117
第238図	1 SC007 (東から) 2 SC007竈 (南東から)	118
第239図	1 SC008 (南東から) 2 SC011 (東から)	119
第240図	1 SB01 (東から) 2 SB01 (東から)	120
第241図	1 SB02 (北東から) 2 SB03 (東から)	121
第242図	1 SX014土層 (北東から) 2 SX014土層 (東から)	122
第243図	調査区周辺位置図 (1/2000・1/8000)	126
第244図	調査区全体図 (1/200)	127
第245図	遺構・遺物実測図 (1/80・1/40・1/20・1/3)	128
第246図	1 I区全体図 (東から) 2 II区全体図 (西から)	129
第247図	1 SK002土層 (西から) 2 SK002 (南から)	130
第248図	1 SK004 (西から) 2 SD005土層 (東から)	131
付図 1	飯氏遺跡第6次第1地点全体遺構実測図 (1/200)	
付図 2	飯氏遺跡第6次第1地点中央部遺構実測図 (1/100)	

I. 国道202号線今宿道路関係埋蔵文化財調査概要
～平成7年度及び8年度～

1. 国道202号線今宿バイパス関係の発掘調査について

福岡県教育委員会による調査

本線部分の調査経緯は、既刊の関係報告書で詳述されており、今回は略記に止める（福岡市教育委員会 1993）。国道202号線バイパス建設に先立つ記録保存のための埋蔵文化財発掘調査は、昭和43年度から昭和57年度まで、福岡県教育委員会によって実施された。この間、西区拾六町から同飯氏の区間において調査がおこなわれ、『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』として第1集（1970年）から第5集（1977年）として報告されている。

福岡市教育委員会による調査

昭和61年度以降は、バイパス建設用地内の埋蔵文化財は福岡市教育委員会が取り扱うこととなった。対象地は、本調査の完了していない西区大塚地区以西である。調査は、同年の大塚遺跡に始まり、道路本体部分については、平成3年度で調査を完了した。調査成果は、福岡市埋蔵文化財調査報告書『国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』としてⅠ（1993年）からⅥ（1995年）を刊行している。

2. 平成7年度の調査

平成6年に至り、飯氏地区でバイパスと合流していた今宿道路が東へ延伸する計画が具体化することとなった。これにともない道路用地の拡幅が必要となったため、工事を計画した建設省九州地方建設局福岡工事事務所と埋蔵文化財課とで新たな工事部分について、埋蔵文化財の取扱を協議し、隣接地での調査成果および試掘調査によりその判断を行うこととした。

試掘調査 今回計画工事が拡幅ということで、地点毎に分離し、その用地幅の狭いことから、試掘調査の対象地は限定された。このほか、踏査により確認した地点もある。事前審査班のほかに、担当者が加わり、西区高崎地区（高崎古墳群）、同飯氏地区（飯氏引地遺跡）、徳永地区（徳永A遺跡）についておこなった。

高崎地区は、既に造成が行われていた。丘陵の斜面部が残るのみで遺構、遺物の出土はみられなかった。飯氏地区は、用地買収未了地が含まれていたため、一部を残した試掘調査となった。1地点について本調査が必要となった。この他に、隣接する道路本体部分で本調査を実施した飯氏遺跡の各地点、徳永A遺跡の1地点については本調査の対象地とし、一部については調査着手後に確認を行った。飯氏地区については、飯氏引地遺跡第1次調査、徳永A遺跡については第4次調査として今回報告する。

本調査 平成7年度の本調査は、飯氏地区を先行して、平成7年11月1日、調査に着手した。さらに、徳永A遺跡の対象地についても工事の工程から早急な着手を要望されたので、担当1名を加え、平成8年2月5日、本調査に着手した。飯氏地区については、調査中範囲の確認も併せておこない、飯氏遺跡について東側の調査対象範囲を確定した。また飯氏引地遺跡については、新たに予定の地点を離れた1地点に調査区を設定することとなった。以上3遺跡について今回報告する。

3. 平成8年度の調査

試掘調査 試掘調査は、前年の継続として徳永A遺跡の1地点、及び青木遺跡の1地点について実施した。徳永A遺跡について、谷部から遺物の出土があったが、用地が狭小で本調査は不可能であり、結果として青木遺跡の1地点が本調査が必要となった。

本調査 上記の結果を受けて、平成8年9月26日から調査を開始した。青木遺跡第3次調査として今回報告する。

A 羅氏遺跡第 6 次調査地点
B 羅氏刀洗遺跡第 1 次調査地点
C 羅氏 A 遺跡第 4 次調査地点
D 青木遺跡第 3 次調査地点

- | | | | | | |
|--------------|---------------|----------|--------------|--------------|--------------|
| 1 元塚古墳 | 8 牛久保古墳群 1 号 | 15 个塚遺跡群 | 22 鹿山古墳群 | 29 神岡古墳群 1 号 | 36 神岡古墳群 |
| 2 牛久保古墳群 2 号 | 9 牛久保古墳群 2 号 | 16 个塚遺跡群 | 23 鹿山古墳群 2 号 | 30 神岡古墳群 2 号 | 37 神岡古墳群 2 号 |
| 3 牛久保古墳群 3 号 | 10 牛久保古墳群 3 号 | 17 个塚遺跡群 | 24 鹿山古墳群 3 号 | 31 神岡古墳群 3 号 | 38 神岡古墳群 3 号 |
| 4 牛久保古墳群 4 号 | 11 牛久保古墳群 4 号 | 18 个塚遺跡群 | 25 鹿山古墳群 4 号 | 32 神岡古墳群 4 号 | 39 神岡古墳群 4 号 |
| 5 牛久保古墳群 5 号 | 12 牛久保古墳群 5 号 | 19 个塚遺跡群 | 26 鹿山古墳群 5 号 | 33 神岡古墳群 5 号 | 40 神岡古墳群 5 号 |
| 6 牛久保古墳群 6 号 | 13 牛久保古墳群 6 号 | 20 个塚遺跡群 | 27 鹿山古墳群 6 号 | 34 神岡古墳群 6 号 | 41 神岡古墳群 6 号 |
| 7 牛久保古墳群 7 号 | 14 牛久保古墳群 7 号 | 21 个塚遺跡群 | 28 鹿山古墳群 7 号 | 35 神岡古墳群 7 号 | 42 神岡古墳群 7 号 |



II. 飯氏遺跡第6次調査

遺跡調査番号	9535	遺跡略号	IJ-6		
調査地地籍	福岡市西区大字飯氏地内	分布地図番号	120		
開発面積	3,600m ²	調査対象面積	3,600m ²	調査面積	2,516m ²
調査期間	1995年11月1日～1996年3月28日				

1. 飯氏地区における発掘調査

1) 飯氏地区における調査の経過

飯氏地区とする区域で今回調査対象となった埋蔵文化財包蔵地は、飯氏遺跡、飯氏引地遺跡である。発掘調査は、平成7年11月1日現場作業に着手した。前章で触れたように、用地の拉幅部に対するものとなったことで、調査区は、国道202号線パイパスと周囲の耕作地とに挟まれ狭長なものとなり、加えて現道等により区切られ、複数に分けて設定せざるを得なくなった。結果として、飯氏遺跡について4地点、飯氏引地遺跡は、試掘により地点を設定した結果2地点に別れた調査となった。調査地点は、6地点が延長240mにわたり、幅40mの細長い用地の両辺に沿い分散しかたちでの調査となった。このことで、廃土の処理、機械の取り回し等に大きな不便を生じ、多数地点が分散している条件なども加わって、調査が終了したのは、平成8年3月28日である。実調査面積は、飯氏遺跡については2,516㎡、飯氏引地遺跡については376㎡となる。

2) 飯氏地区における調査の方法

表土は機力により除去した。

記録の基準は、道路に沿いに建設省により既設の多角点に求め、その平面座標値をもとに、各調査区に基準の格子を割りつけ、標高をもとに各調査区に基準点を設置した。平面上の基準の格子は、座標値の100mを単位に方形に大区画を、調査対象地を含む範囲に設定しこれに2桁の番号を付した。その中を10m単位に中区画に100区分し、その大区画南西隅から東、北の順で2桁の番号で表わした。

報告中では、各調査地点と上記区画により位置を表示する。飯氏地区の調査においては、2遺跡に跨がる調査となったが、両遺跡は相接した位置にあり、実際調査に当たっても工程的には同一の流れのなかの調査となり、記録等は一連のものとして取り扱わざるをえない部分が生じた。その為、調査時には飯氏遺跡第6次調査1～4地点を、それぞれ1～4地点、飯氏引地遺跡第1次調査の1、2地点をそれぞれ5、6地点として記録、注記を行っている。このうち、資料はすべて埋蔵文化財センターへ収蔵することとなるが、それに際して整理を行いたい。ただ、出土遺構、遺物を含めた各記録には、飯氏地区全体で1系統の順番号を付しており、その点で混乱を生じることはない。

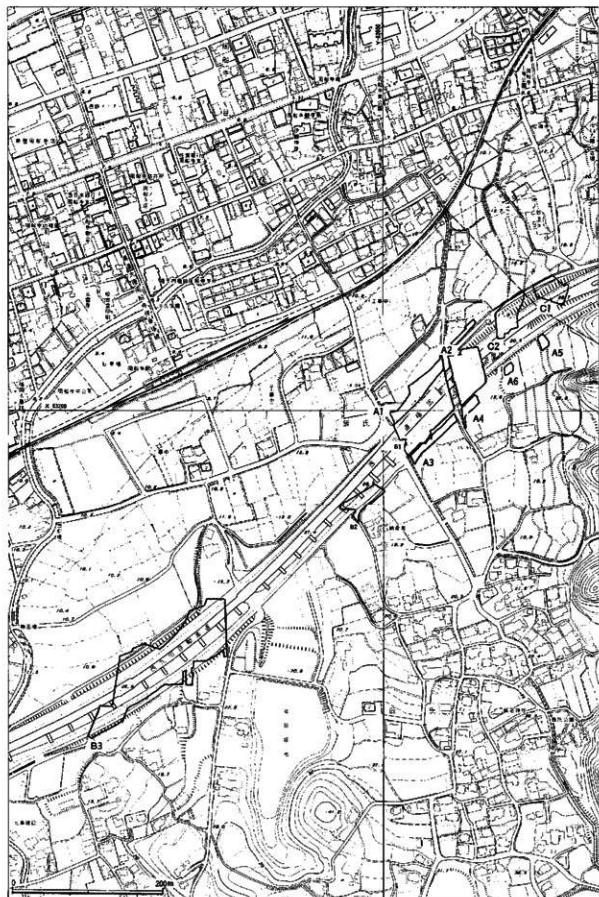
2. 飯氏遺跡第6次調査1区調査報告

1) 飯氏6次1区の調査

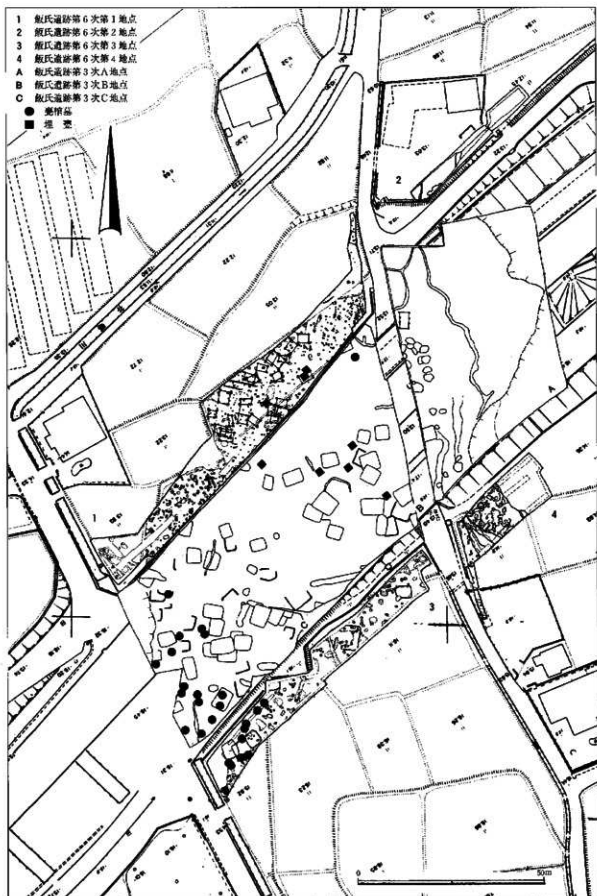
飯氏遺跡の地形 飯氏遺跡は、地形上からは高祖山山麓地の一分を含み、その裾に発達した砂礫台地（低位段丘）、土石流扇状地さらに沖積扇状平野までを含む遺跡である。国道202号線今宿パイパスは、そのうちの末端部付近の砂礫台地、土石流扇状地部分を横断するように走っている。従って、今回調査区もそういった地形面での調査となり、遺構検出面は、粗砂層、粘土層となっている部分が多い。

調査区 発掘調査区は、幅10mを前後し、長さ110m程の広さとなり、これを機械の取りまわし、廃土の処理を考えて、4区分しての調査となった。遺構は、柱穴と確認できなかった小穴も含むと、調査区の全体に分布しており、遺物出土等で記録に残したもので約600基を数える。遺物は、遺構の各部分で分別して記録したものを含めて、840余件となっている。

以下、遺構種別毎に出土資料を報告する。



第11回 飯氏地区通路開全区の位置 (1/5,000)



第12图 汉氏道路调查区 (1/1,000)



第13图 殷氏引地道跡調査区 (1/1,000)



第14回 飯氏道路第6次第1地点道路調査区道景（東から）



第15回 飯氏道路第6次第1地点道路西半区全景（東から）



第16图 飯氏遺跡第6次第1地点遺跡西半西端区全景(東から)



第17图 飯氏遺跡第6次第1地点遺跡東半区全景(東から)



第18図 船氏遺跡第6次第1地点遺跡東平北辺区全景(東から)



第19図 船氏遺跡第6次第1地点遺跡東平北辺区全景(東から)

2) 飯氏6次1区調査の成果

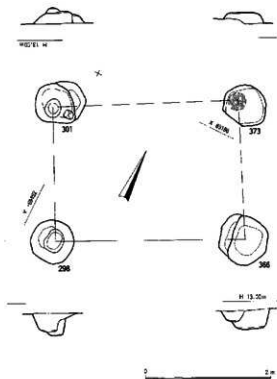
掘立柱建物

1区のみで確認した。27棟を復原できたが、多くが1×1間の構造で、若干の疑問点が残る復原も含まれる。

掘立柱建物20

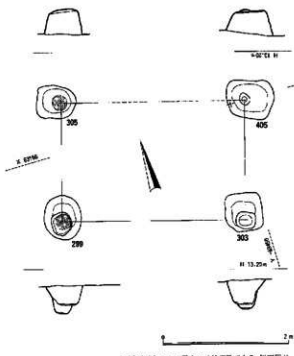
14-65区に位置する。1×1間の構造を復原できる建物である。平面形は長方形を呈し、長軸方向の規模は、柱穴305-405、299-303間で2.9m、短軸方向での規模は柱穴305-299、405-303間で1.9mを測る。柱穴は楕円形状、又は長方形、矩形状で、0.6~0.7m程の軸長を測る。

出土遺物 遺物は、各柱穴埋土中から散漫に少量が出土している。弥生土器が主で、後期の細片資料のほか中期の資料を含んでいる。



第21図 掘立柱建物30実測図 (1/60)

とも弥生土器が殆どで、後期の資料を主とするほか中期の資料を含んでいる。黒曜石製の剥片・細片が各柱穴から出土している。1518は小破片の資料で、器表は荒れている。塔形土器であろうか。1519は、下半部の資料で、器表の荒れが著しい。

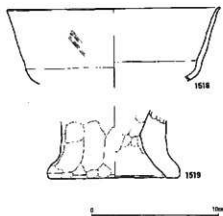


※平面図中A1で示すのは柱基礎である。以下同じ。
第20図 掘立柱建物20実測図 (1/60)

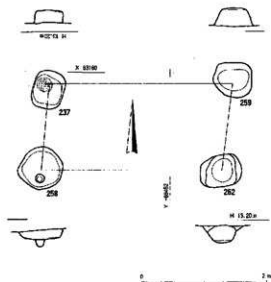
掘立柱建物30

14-65区に位置する。1×1間の構造を復原できる建物である。平面形は長方形を呈し、長軸方向の規模は、柱穴301-373、298-366間で3.0m、短軸方向での規模は柱穴301-298、373-366間で2.2mを測る。柱穴は373では柱痕跡が、298、301では底面に柱圧痕が残る。平面形は円形状、又は隅丸形状で径、辺長が0.6~0.7m程を測る。深さは0.2~0.3m程である。

出土遺物 遺物は、各柱穴埋土中から出土している。柱穴366、298は比較的上出量が多い。各柱穴



第22図 掘立柱建物30柱穴出土遺物実測図 (1/3)



第23図 竪立柱建物40実測図 (1/60)

中から散漫に出土した。柱穴259から、やや多い遺物が出土した。弥生土器細片が殆どであるが、柱穴259からは上師器資料が出土した。碗1521は、浅黄褐色を呈す。1520は高坏脚部である。灰白色を呈し、器表の荒れが著しい。また、柱穴から黒曜石製の細片、剥片が複数出土している。

竪立柱建物50

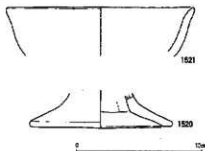
14-65区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は不整な矩形を呈す。長軸方向と短軸方向の長さの差が小さい。長軸方向では柱穴248-289間が3.0m、254-293間で3.4m、短軸方向では柱穴248-254間が2.5m、289-293間で2.8mを測る。柱穴の平面形は長軸方向にほぼ並んだ、隅丸長方形を呈す。深さは0.3m程を測る。

出土遺物 各柱穴とも、遺物出土量が多い。出土遺物の殆どは細片の土器資料のなかに小破片の資料が混じる。深鉢1522は、外面に煤状の付着物が残る。口縁直下は口縁に沿う方向の撫で調整が施される。口縁部径16.2cmを測る。甕1524は小

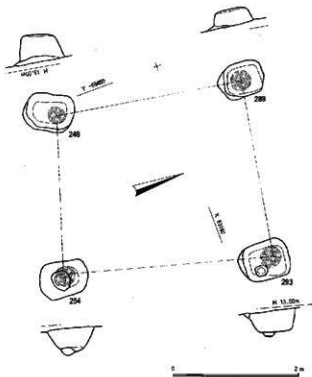
竪立柱建物40

14-55区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は平行四辺形状を呈し、長軸方向の規模は、柱穴237-259間、258-262間で3.0m、短軸方向での規模は柱穴237-258間、259-262間で1.3mを測り、他と比べて極端に幅の狭い例である。柱穴は平面形が不整な隅丸長方形、円形状を呈し、径或いは長さが0.6~0.7m程の規模である。柱穴の深さは現状で0.2~0.3m程を測る。

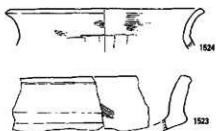
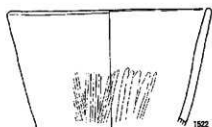
出土遺物 遺物は柱穴259以外は、極少量が埋土



第24図 竪立柱建物40柱穴出土遺物実測図 (1/3)

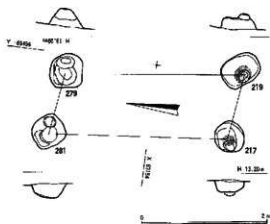


第25図 竪立柱建物50実測図 (1/60)



第26図 掘立柱建物50柱穴出土遺物実測図 (1/3)

破片の資料である。口縁部の内外面に刷毛目調整痕が残されている。1523は二重口縁壺の口縁部細片資料である。器壁は厚く、器表はにぶい黄橙色を呈す。



第27図 掘立柱建物60実測図 (1/60)

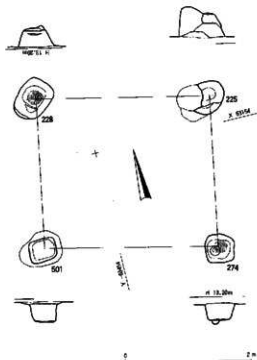
0.6m程の規模で、深さは0.2mを測る。

出土遺物 各柱穴埋土中から少量が散漫に出土した。細片の土器資料が殆どを占める。弥生土器に中期から後期の資料があるほかに、晩期とみられる粗製の縄文土器破片資料がそれぞれの柱穴から出土している。また、黒曜石製の觚片・細片も少量だが出土している。

掘立柱建物70

14-55区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は長方形を呈す。長軸方向では柱穴228-225間が2.9m、501-274間が2.8m、短軸方向では柱穴228-501、225-274間ともに2.4mを測る。柱穴の平面形は、軸方向は揃わないが、隅丸の方形、長方形を呈し、その長さ0.5mないし0.6mを測る。深さは0.3mである。

出土遺物 細片の土器資料が少量出土した。弥生土器のほか縄文土器が出土している。

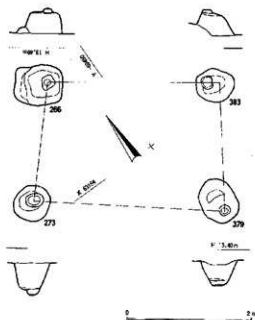


第28図 掘立柱建物70実測図 (1/60)

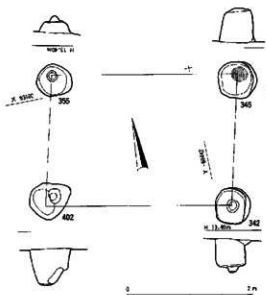
掘立柱建物80

14-55区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は長方形を呈す。長軸方向では柱穴266-383間が2.8m、273-379間で3.1m、短軸方向では柱穴266-273間が1.9m、383-379間で2.0mを測る。柱穴の平面形は、円形状のほか、軸方向は揃わないが、隅丸の長方形、楕円形状を呈し、その径、長さは0.6ないし0.7mを測る。また深さは0.4mを測る。3基の柱穴には柱圧痕かとみえる浅い窪みを底面で確認することができた。

出土遺物 いずれの柱穴からも遺物が出土しているが、とくに柱穴273からは多量の遺物が出土した。各柱穴出土遺物の殆どは細片の土器資



第29図 掘立柱建物80実測図 (1/60)



第30図 掘立柱建物90実測図 (1/60)

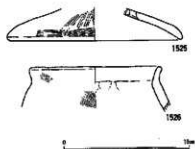
が生じている。

出土遺物 各柱穴から遺物が出土したが、大部分は細片の土器資料で、他と同様弥生時代中期、後期の資料が多くを占めている。ある。第31図に示すうち、土師器高坏1525は柱穴402出土資料である。脚部の小破片で、橙色を呈す。器表は荒れが著しい。無形壺1526は、口縁部小破片資料である。

料で、弥生時代中期から後期にかけてのものがあるが、中に少量の縄文土器が混じる。浅鉢の細片資料が含まれる。柱穴379からは、古墳時代前期の堯細片が出土した。

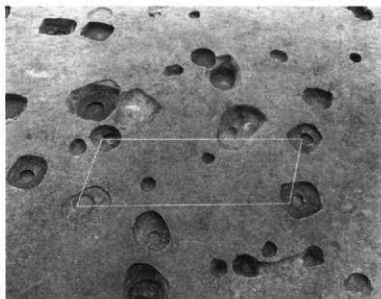
掘立柱建物90

14-54区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は長方形を呈す。長軸方向では柱穴355-345間が2.9m、402-342間で3.0m、短軸方向では柱穴355-402、345-342でともに2.1mを測る。柱穴の平面形は、不整な円形状を呈し、深さは幅があり、柱穴355で0.2m、402で0.6m、345で0.6m、342では0.4mをそれぞれ測る。342、355では底面に浅い窪み

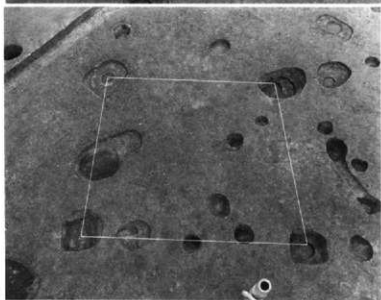


第31図 掘立柱建物90柱穴出土遺物実測図 (1/3)

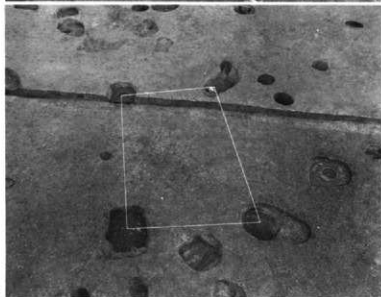
第32図 掘立柱建物60(東から)



第33図 掘立柱建物70(北から)



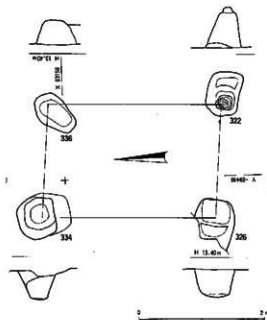
第34図 掘立柱建物80(北から)



掘立柱建物100

14-54区に位置する。柱穴1基を調査区外に推定すると1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は長方形を呈す。長軸方向では柱穴353-344（柱痕跡-柱圧痕）間が2.8m、短軸方向では柱穴253-384が2.0mを測る。柱穴の平面形は、不整ではあるが隅丸長方形状呈す。また、確認面付近では漏斗状に開く断面形のように見える点他にも類例があるあり方である。柱穴の長さ0.5乃至0.4m程であるが、上記漏斗状に広がる部分をとると、柱穴384では長さ0.7m程の規模となる。

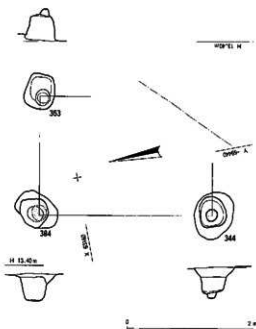
出土遺物 いずれの柱穴からも遺物が出土している。柱穴344からは比較的多量の遺物が出土したほかは、



第36図 掘立柱建物110実測図

柱穴は建物中心に向かい放射状に軸を取っているようにも観察される。径、長さは0.7mを前後する。深さは0.4～0.6mと幅が大きい。柱穴322、326は中位に段があり、特徴的である。。

出土遺物 いずれの柱穴からも遺物が出土している。柱穴336以外は比較的多量の遺物の出土があった。遺物は殆どが細片の土器資料であるなかに少量の小破片資料が混じる。弥生土器は、中期壺・蓋、後期壺等の資料を確認できた。極少量の土師器が混じって出土した。図示する土師器1528は埴形土器とみえる細片の資料、1527は器

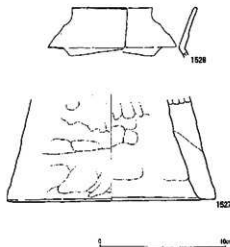


第35図 掘立柱建物100実測図

少量の出土である。何れも細片の土器資料であり、それと判るものには、弥生時代中期から後期にかけての資料が含まれている。

掘立柱建物110

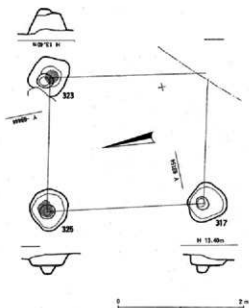
14-54区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は、南北方向に長軸をとる長方形を呈す。柱穴402-322間、334-326間が2.8m、柱穴402-334間、322-326間が1.8mを測る。柱穴の平面形は、不整な長方形、不整な円形状を呈す。各



第37図 掘立柱建物110柱穴出土遺物実測図



第38図 掘立柱建物110・120(東から)



第39図 掘立柱建物120実測図 (1/60)

台下半部の資料である。

掘立柱建物120

14-54区に位置する。調査区壁に接して、浅い攪乱と重複した位置に1基の柱穴を推定して1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は、南北方向に長軸をとる長方形を呈す。柱穴325-317間が2.59m、柱穴323-325間は2.08mを測る。柱穴の平面形は、不整形な方形、円形状を呈す。径、長さは0.6mを前後する。柱穴底面の深さは0.1~0.3mと幅がある。何れの柱穴底面にも柱圧痕かと思われる窪みがある。



第40図 掘立柱建物120柱穴出土遺物実測図 (1/3)

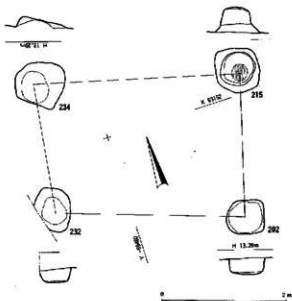
出土遺物 いずれの柱穴からも遺物が出土した。柱穴325、317からは比較的多量に出土した。遺物は細片から

小破片の弥生土器であり、中期から後期までの資料が含まれている。

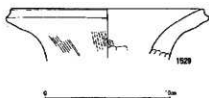
掘立柱建物130

14-55区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は、東西方向に長軸をとる歪な長方形形状を呈す。柱穴234-215間は3.3m、232-202間が3.1m、柱穴234-232間は2.1m、215-202間が2.3mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な隅丸方形、円形状を呈す。径、長さは0.6mを前後する。柱穴215は上半部が漏斗状に開く。深さは0.2~0.4mと幅があり、かつ底面の高さに差がある。

出土遺物 柱穴232以外の柱穴から遺物が出土し

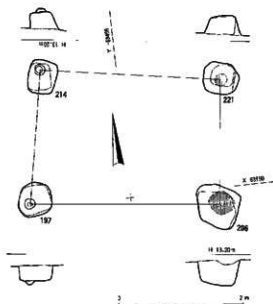


第41図 掘立柱建物130実測図 (1/60)



第42図 掘立柱建物130柱穴出土遺物実測図 (1/3)

た。柱穴232から比較的多く出土した以外は少量の出土である。遺物は殆どが細片の土器資料である。弥生土器が大半である。また、晩期の縄文土器が、各柱穴から少量ながら混じって出土している。粗製深鉢底部資料がある。弥生土器は器台1529を指示することができる。口縁部小破片の資料で、灰黄褐色を呈す。



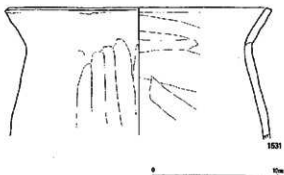
第43図 掘立柱建物140実測図 (1/60)

は柱圧痕かと思われる浅い窪みが認められる。

出土遺物 何れの柱穴からも遺物が出土した。細片の弥生土器資料がほとんどであるが、晩期の縄

掘立柱建物140

14-55区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物で、建物150・160と重なる。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形形状を呈す。柱穴214-221間は2.9m、197-206間が3.1m、柱穴214-197間は2.0m、221-206間が2.0mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な隅丸長方形、円形状を呈す。径、長さは0.5m乃至0.6mである。深さは0.3mを前後する。柱穴214・197底面に



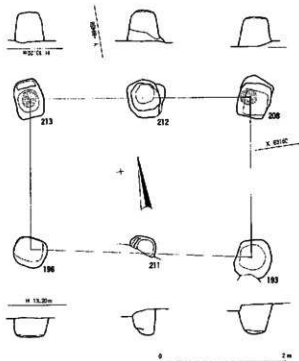
第44図 掘立柱建物140柱穴出土遺物実測図 (1/3)

文土器が、少量混じって出土した。壺1531を図示できる。明褐色を呈し、外面には煤状の付着物が残る。

掘立柱建物150

14-55区に位置する。1×2間を復元できる建物で、建物140・150と重なる。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形を呈す。桁行は、柱穴213-212間では1.8m、212-208 1.74m、柱穴196-211間で1.8m、211-193間が1.7mを、梁行は、柱穴213-196で2.4m、208-193が2.4mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な隅丸長方形を呈す。長さは0.5m乃至0.6mである。深さは0.5mを前後する。柱穴196では、確認面付近で中央部から土器の破片が圧潰した状態で出土しており、柱の抜き取り等がおこなわれた可能性を残している。

出土遺物 何れの柱穴からも遺物が出土した。柱穴196では上述のような出土状態であったほかは、

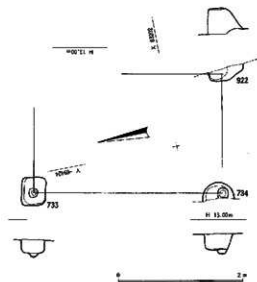


第45図 掘立柱建物150実測図 (1/50)

少量の遺物が埋土中から散逸して出土している。細片の土器資料が殆どであるが、その中で中期から後期にかけての弥生土器のほかに縄文土器の出土割合が目立って大きい。いずれも粗製の土器で深鉢底部と判る資料も含まれる。

掘立柱建物160

他の掘立柱建物とは離れて、東半北端の調査区で検出した。24-02区に位置する。柱穴1基を調査区外に推定すると1×1間の構造を復元できる建物である。建物軸を南北方向にとり、平面形は長方形を呈す。長軸方向では柱穴733-734間が3.0m、短軸方向は柱穴922-734が2.9mを測る。柱穴の平面形は、隅丸長方形、円形を呈す。柱穴の長さ、径は0.5m程であり、その深さは0.2乃至0.3mとなる。柱



第46図 掘立柱建物160実測図 (1/60)

穴の軸は、建物軸に直交している。また、柱穴底面の位置に高低がある。柱穴733、734の底面には柱圧痕かと思われる浅い窪みがある。

出土遺物 柱穴733、734からそれぞれ少量の遺物が出土した。柱穴734から以下に図示する小破片の土器資料が出土したほかは、細片の土器、剥片等である。弥生土器壺1532は柱穴734から出土し



第47図 掘立柱建物160柱穴出土遺物実測図 (1/3)

た。口縁部の資料で、胎土に小礫、褐色粒を含み、器表の荒れが著しく、調整は不明である。にぶい橙色を呈す。

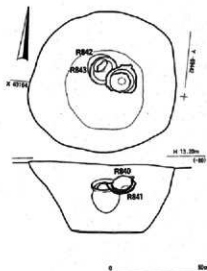
獨立柱建物659

14-64区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物で、建物660と柱穴が重複する。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形を呈す。柱穴368-526間は

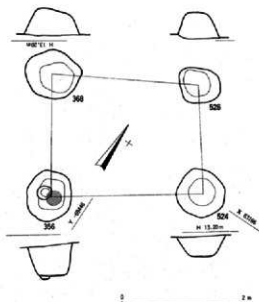
2.4m、356-524間が2.5m、柱穴368-356間は2.0m、526-524間が1.8mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な隅丸長方形、円形状を呈す。径、

長さは0.7~0.9mと幅があり、かつ規模が大きい。深さは0.3~0.5mで、底面の高さが一定しない。

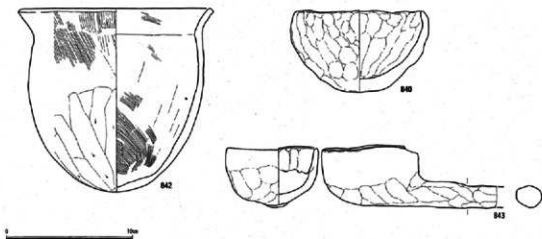
出土遺物 何れの柱穴からも比較的多量の遺物が出土した。細片の弥生土器資料が殆どを占める。晩期の縄文土器資料も混じる。柱穴524の埋土中位から、土器が一括投棄されたような状態で出土した。以下に図示する。甕842は完形の資料である。器表は



第49図 柱穴324実測図 (1/20)



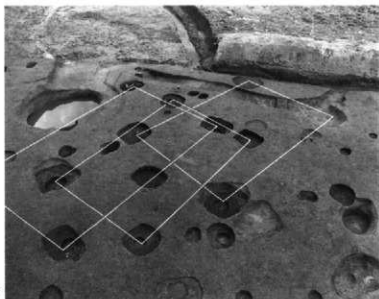
第48図 獨立柱建物659実測図 (1/60)



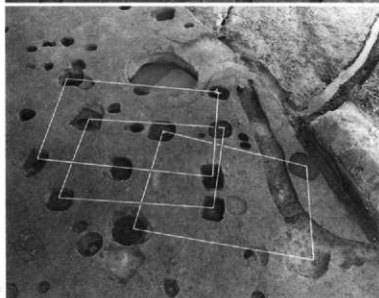
第50図 獨立柱建物659柱穴出土遺物実測図 (1/3)



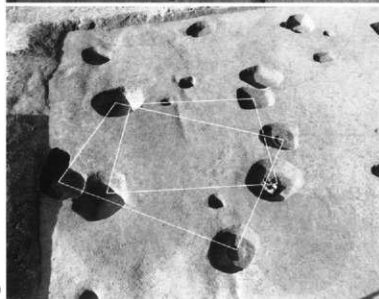
第51図 獨立柱建物659柱穴出土遺物



第52図 掘立柱建物150柱穴出土遺物実測図 (1/3)



第53図 掘立柱建物130-140-150 (東から)

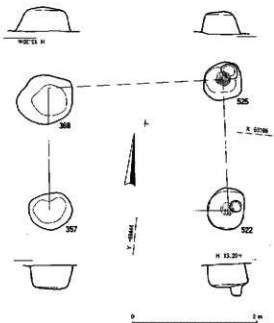


第54図 掘立柱建物130-140-150 (北から)

やや荒れ、体部外面下半部に笕削り調整が施されている。胎土に粗粒砂、褐色の粒子を含み鈍い橙色を呈す。碗840は、口縁部の一部を各資料である。器表の遺存は良好で、外面は整形時のままで亀裂が残る。胎土に粗粒砂を含み、暗灰黄色を呈す。杓子形の土器843は、柄端部を欠失している。柄部には指圧痕が残る。胎土に粗粒砂、褐色土粒を含み、器表はにぶい黄橙色を呈す。

掘立柱建物660

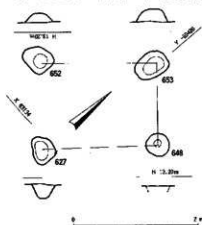
14-64区に位置する。上述のように建物659と重複する。調査時には柱穴の重複関係を確認することはできなかった。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形を呈す。柱穴368-525間は2.8m、357-522間が2.9m、柱穴368-357間は1.9m、525-522間が2.1mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な円形を呈す。径は0.6mを前後する。深さは0.4m程であり、建物659



第55図 掘立柱建物660実測図 (1/60)

と異なり底面の高さが一定であるといえる。

出土遺物 柱穴357以外からは比較的多量の遺物が出土した。遺物は殆どか細片の土器資料である。中期から後期にかけての弥生土器で、中期甕棺の口縁部細片がある。



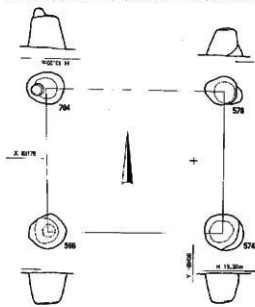
第56図 掘立柱建物661実測図 (1/60)

653-648間が1.3mをそれぞれ測り、他と比べ小規模である。柱穴の平面形は、不整な楕円形状を呈す。径、長径は0.4乃至0.5mである。深さは0.2m程となる。

出土遺物 柱穴653以外から遺物が出土した。全て細片の、中期から後期にかけての弥生土器である。

掘立柱建物662

14-64区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形を呈す。柱穴704-578間は2.9m、566-574間が2.8m、柱穴704-566間は2.3m、578-574間が2.3mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な円形状を呈す。径は0.4乃至0.5m、



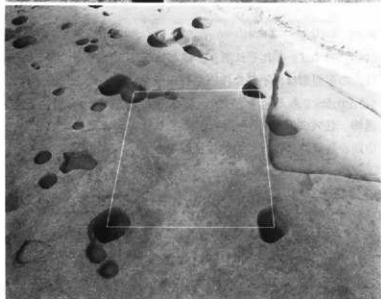
第57図 掘立柱建物662実測図 (1/60)



第58図 柱穴524 (北から)



第59図 掘立柱建物660 (南から)



第60図 掘立柱建物662 (東から)

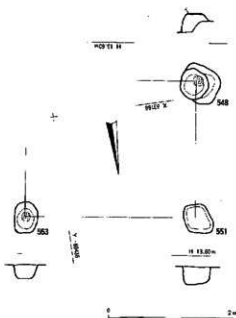
深さは0.5m程となる。

出土遺物 柱穴653以外から遺物が出土した。全て細片の土器資料である。弥生土器のほかは不明確である。

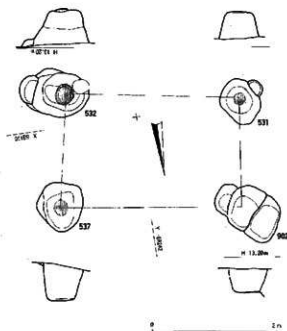
掘立柱建物663

14-73区に位置する。現水田暗渠と重複した位置に1基の柱穴を推定して1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形状を呈す。柱穴553-551間が2.8m、柱穴548-551間は2.2mを測る。柱穴の平面形は、不整な長方形状、円形状を呈す。径、長さは0.5mを前後する。柱穴底面の深さは0.2~0.3m程であり、柱穴底面の高さには大きな差はない。

出土遺物 いずれの柱穴からも少量の遺物が埋土から散漫に出土した。遺物は細片の土器資料が大部分である。時期の判然とする資料は極少ない。すべて弥生土器である。



第61図 掘立柱建物663実測図 (1/60)



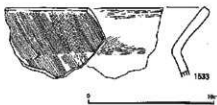
第62図 掘立柱建物664実測図 (1/60)

掘立柱建物 664

14-74区に位置する。柱穴902が、建物916-917の柱穴とそれぞれ重複する。調査時、掘り下げの時点では柱穴902と903との前後関係は不明確で、完掘した時点での判断となった。建物916の柱穴903とは重複して新しく、建物917の柱穴721とは重複して古い。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形状を呈す。柱穴532-531間が2.9m、537-902間が2.9m、柱穴532-537、531-902間ともに1.9mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な楕円形状を呈す。長径は0.7mを前後する。柱穴底面の深さは0.4~0.6m程であるが、柱穴底面の高低差は小さい。

出土遺物 いずれの柱穴からも遺物が埋土から出土した。柱穴902については、調査時、重複した柱穴出土遺物と分別ができなかった。遺物は細片

の土器資料が大部分で小破片の資料、剥片類が混じる。土器は、何れも弥生時代のもので、中期から後期にかけてのものである。壘1533を図示することができる。口縁部細片の資料である。胎土に砂粒を含み、口縁部の内外面に刷毛目調整を残している。内面の器表は荒れている。にぶい黄棕色を呈す。

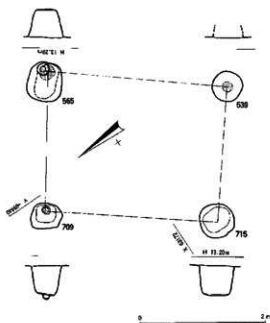


第63図 掘立柱建物664柱穴出土遺物実測図 (1/3)

独立柱建物729

14-74区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。平面形は、南北方向に長軸をとる長方形形状を呈す。柱穴709が建物915の柱穴708と重複しそれぞれ古い。柱穴565-539間が2.9m、709-715間が2.8m、柱穴565-709間、539-715間は2.2mを、それぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な隅丸長方形形状、円形状を呈す。長径、径は0.5～0.6m程である。柱穴底面の深さは0.4m程である。柱穴底面高低差は小さい。柱穴の軸方向は、建物の長短の軸方向に沿っている。

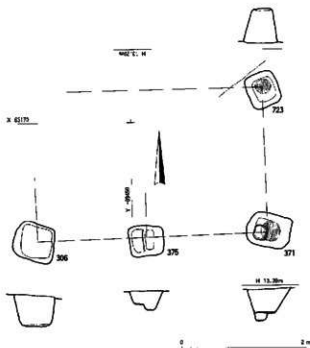
出土遺物 いずれの柱穴の埋土中から遺物が少量散漫に出土した。何れも細片の土器資料でそれと判る資料では弥生時代後期に属するものが殆どで、古墳時代に属する可能性のある細片が極少数あるが、判然としない。図示できる資料はない。



第64図 独立柱建物729実測図 (1/60)

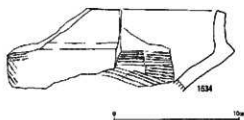
独立柱建物914

14-64区に位置する。調査区外に柱穴2基を推定して1×2間を復元できる建物で、建物918と重なる。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形形状を呈す。桁方向は、柱穴306-375間では1.8m、375-371で1.9m、梁方向は柱穴723-371間で2.3mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、隅丸長方形形状を呈す。長さは0.5～0.7mである。深さは四隅の柱穴は0.5m程であるが、桁行中央の柱穴のみ浅く0.3mの深さである。このこともあり、柱穴底面は最大で0.3mの高低差がある。また、柱穴長軸は建物南辺側では、建物長軸の方向に沿った配列となっている。

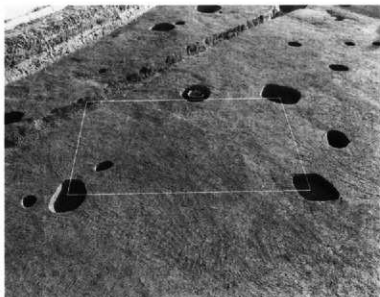


第65図 独立柱建物914実測図 (1/60)

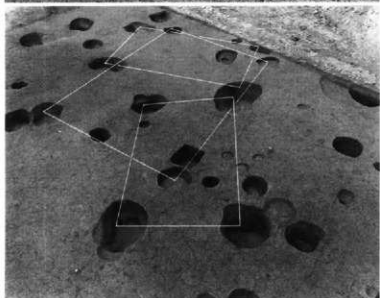
出土遺物 何れの柱穴からも遺物が出土した。柱穴375を除いて比較的多量に出土している。何れも殆どが細片であるなかに小破片がまじる土器資料である。弥生時代中期から後期に属する資料が殆どである。図示するのは二重口縁壺の口縁部細片資料である。器表はやや荒れて、にぶい黄橙色を呈す。



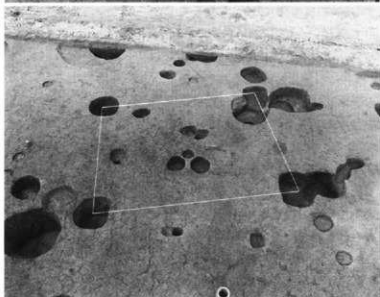
第66図 独立柱建物914柱穴出土遺物実測図 (1/3)



第67図 掘立柱建物663 (北から)



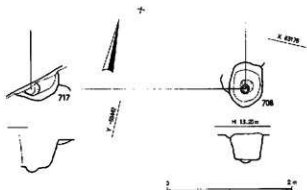
第68図 掘立柱建物664 (南から)



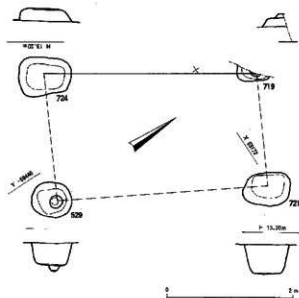
第69図 掘立柱建物729 (南から)

掘立柱建物915

14-74区に位置する。柱穴は2基のみを確認しているが、調査区外に2基の柱穴を推定して1×1間の構造とする建物である。平面形は、東西方向に長軸をとる長方形となる。柱穴717-708間が3.5mを測る。柱穴の平面形は、全体の判る柱穴は708のみであるが、不整な楕円形状を呈す。長径は0.7mである。現状の深さは0.4、0.5m、柱穴底面の高さにはやや差がある。底面の中央に柱圧痕かと思われる浅い窪み



第70回 掘立柱建物915実測図 (1/60)



第71回 掘立柱建物916実測図 (1/60)

してそれより新しい、また柱穴529は、後述する建物917の柱穴923と重複してそれよりも新しい。柱穴724-719間で3.4m、529-721間は3.4m、柱穴724-529間で2.0m、719-721間は1.9mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、隅丸長方形または楕円形状を呈する。長さ、長径は0.6~0.8mの間にある。柱穴現状の深さは0.1~0.4mの幅がある。柱穴底面の高低差も顕著である。

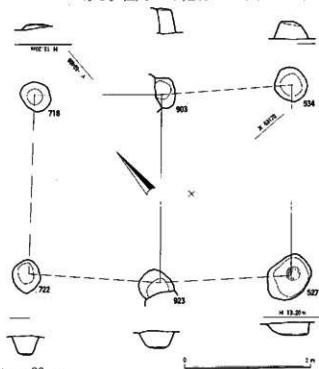
出土遺物 何れの柱穴からも遺物が出土している。重複して内容が不明確な柱穴721を除き少量が埋土中から散漫に出土している。何れも土器の細片資料で、中期以降の弥生土器である。

が残る。

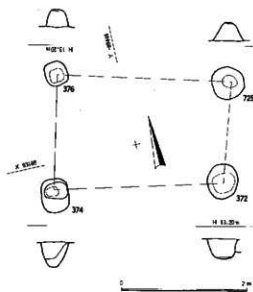
出土遺物 柱穴からは遺物が出土している。柱穴708からは比較的多量の遺物が出土した。遺物は極少量の剥片類が出土したほかは全て土器資料である。殆どが細片の資料であり、弥生時代後期と判る資料のほかに土師器かと思われる高坏脚部細片の資料がある。

掘立柱建物 916

14-74区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。長軸を北東-南西方向にとり、平面で長方形を呈す建物である。柱穴721が建物664の柱穴902と重複



第72回 掘立柱建物917実測図 (1/60)



第73図 掘立柱建物917実測図 (1/60)

掘立柱建物 917

14-74区に位置する。1×2間の構造を復元できる建物である。建物917は、北西-南東方向に長軸をとり、平面で長方形を呈す建物である。柱穴903が建物664柱穴902と重複しそれよりも古い。この部分での重複関係をもとにすると、結果として建物917-建物664-建物916の順に古いことになる。長軸方向では、柱穴718-903間で2.0m、903-534 2.1m、柱穴722-923間、923-527間が共に2.1m、短軸方向は、柱穴718-722間が2.9m、903-923 3.0m、534-527 3.1mを、それぞれ測る。柱穴の平面形は、円形または楕円形状を呈する。径、長径は0.5~0.8mの間にある。柱穴現状の深さは0.2~0.4mの幅がある。柱穴底面の高低差が顕著である。

出土遺物 重複して、出土位置の不明な2基を除いたほかから遺物が出土している。柱穴527からの出土量が比

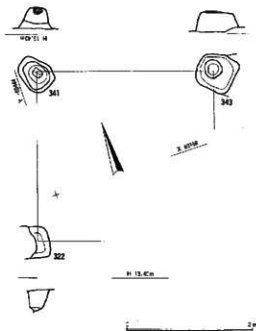
較的多かったほかは、少量の出土である。何れも細片の土器資料で、中期・後期の弥生土器である。

掘立柱建物 918

14-74区に位置する。1×1間の構造を復元できる建物である。長軸は東西方向で、平面形は長方形を呈す建物である。柱穴376-725間で2.8m、374-372間は2.7m、柱穴376-374間で1.8m、725-372間は1.6mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、円形または楕円形状を呈する。径、長径は0.5乃至0.6m程である。柱穴現状の深さは0.3乃至0.4mである。柱穴底面の高さは西側柱穴の底面が東側のそれよりもかなり低い位置にある。

掘立柱建物 920

14-54区に位置する。3次地点調査区側に1基を推定して1×1間の構造を復元できる建物である。長軸は東西方向で、平面形は矩形に近い長方形を呈す建物である。柱穴376-725間で2.9m、341-322間は2.7mをそれぞれ測る。柱穴の平面形は、不整な隅丸長方形を呈する。柱穴の規模は、長さ0.4~0.6m程である。柱穴現状の深さは0.3乃至0.4mである。柱穴底面の高低差は小さい。柱穴341には柱根が遺存していた。また、柱穴341は上部が漏斗状に開く。柱穴343底面では柱圧痕かと考えられる浅い窪みが検出された。



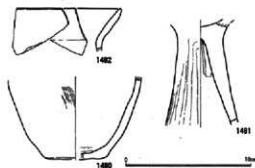
第74図 掘立柱建物920実測図 (1/60)

竪穴住居

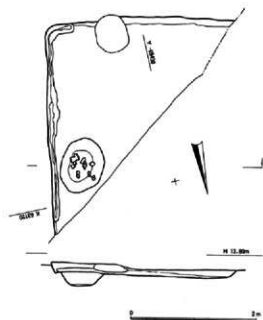
竪穴住居692

1 地点で出土の竪穴住居は本遺構のみである。14-73区に位置する。半ば以上が開田により失われている。これと一部調査区外となっているため、平面規模は不明である。覆土は黒褐色砂質土である。深さ0.1m程が遺存する。壁溝が一部に観察される。東壁に沿い土壌693を検出した。

出土遺物 住居覆土からは細片の弥生土器を極少量出土したのみであるが、土壌693からは図示す

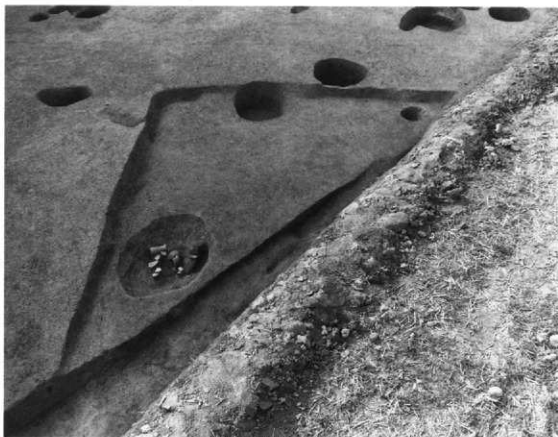


第76図 竪穴住居692出土遺物実測図 (1/4)



第75図 竪穴住居692実測図 (1/60)

るような遺物が出土した。1482は甕口縁部細片で、淡黄色を呈す。693は壺底部で暗灰黄色を呈す。1481は高坏でにぶい黄橙色を呈す。



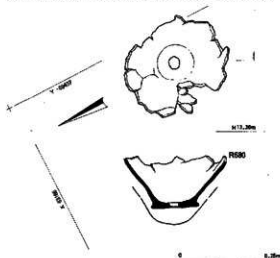
第77図 竪穴住居692 (東から)

埋藏・土器埋置 14-64区、14-63区に分布する。

遺構 393

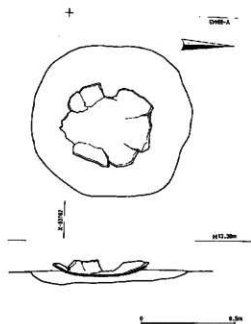
14-64区に位置する。土器を据えた遺構の下底部のみが遺存している。掘型は不明確。土器も体部の一部のみが遺存する。

出土遺物 土器は、細片となり接合もできない。出土時の状態、全体の形状を推測できない。胎土に粗粒砂を多量に含み、内外面とも灰白色を呈す。弥生



第79図 土器埋置549実測図 (1/10)

土器であろうか。



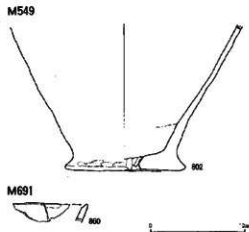
第78図 土器埋置393実測図 (1/20)

埋藏 549

14-63区に位置する。縄文時代晩期の、深鉢を正立させて埋置する遺構で、下部のみが遺存している。

土器の検出により確認した遺構で、掘型は不明確である。底部での観察からすると土器形状に合わせた断面形状をなすものとみえる。

出土遺物 埋置されていた802は、粗製の深鉢で、底部近くの資料である。底部は外底面からの加撃により穿孔されている。胎土に粗粒砂を含み、にぶい黄橙色を呈す。外面には指押さえの圧痕が残り、使用によるものか内面の荒れが著しい。

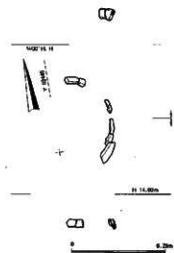


第80図 深鉢549実測図 (1/4)

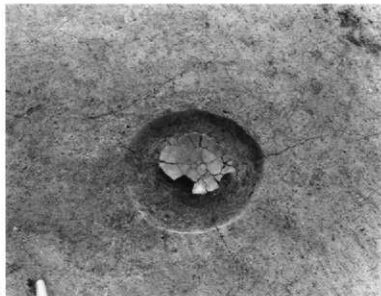
埋藏 691

14-63区に位置する。縄文時代晩期の深鉢を倒立させて埋置する遺構で、椀下部のみが遺存している。掘型は不明瞭で、土器口縁部の検出でそれと判った。

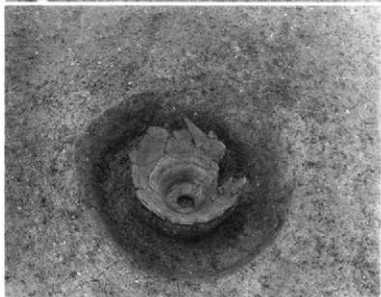
出土遺物 深鉢860は、口縁部の一部のみが遺存する資料で、口径等は復原できない。胎土に粗砂を含み、細孔が顕著に見られる。にぶい黄橙色を呈す。



第81図 土器埋置691実測図 (1/10)



第82图 姜柏墓393实测图 (1/20)



第83图 深斜549 (北小5)



第84图 土器埋置393 (北小6)

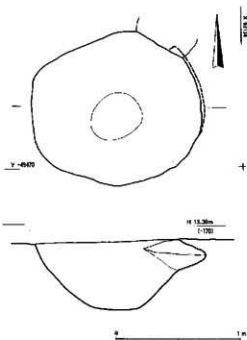
土壌

1地点の全体に散漫に分布している。

土壌 10

14-37区に位置する。平面形は不整な円形状を呈す。湧水のため底部の調査が行なえず、完掘に至らなかった。断面は全体として逆台形状を呈すが、中で深く抉れ、覆土は、地山のシルト塊が混じる黒褐色粘質土で、壁際では粘土、砂のレンズ状の互層がみられることから湛水した状態で自然に埋没していったことが判る。

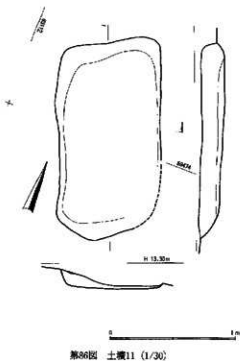
出土遺物 覆土中から散漫に少量が出土した。中期・後期の弥生土器破片資料のほか、古墳時代前期の土師器甕口縁部細片の出土が含まれている。



第85図 土壌10 (1/30)

土壌 11

14-27区に位置する。長さ1.5m、幅0.8mの不整な隅丸長方形の遺構で、横断面では浅い逆台形状を呈し、深さ0.2m程が遺存している。



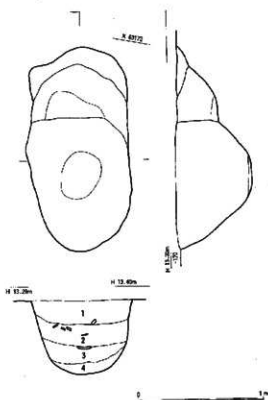
第86図 土壌11 (1/30)

出土遺物 遺物は縄文土器深鉢体部の細片が出土したのみである。

土壌 558

14-63区に位置する。平面形が楕円形状を呈し、長さ1.6m、幅1.8m程の規模である。横断面形は深い鉢状を呈し、現状で深さ0.6mが遺存している。

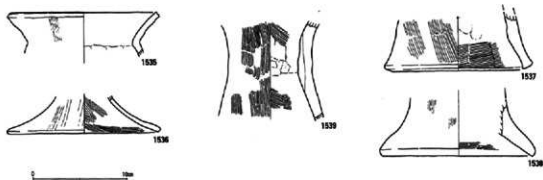
覆土は、1層：黒褐色粗粒砂泥り粘質土 (Hue 7.5YR3/1)、2層：黒褐色粗粒砂泥りで軟質の粘質土 (Hue 10YR3/1)、3



第87図 土壌558実測図 (1/30)

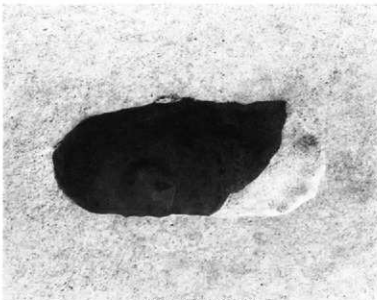
層：黒色軟質粘土(Hue 10YR2/1)、4層黄灰色砂(Hue 2.5YR6/1)と分層できる。

遺物は覆土中位から遺構底面の傾斜に沿って流れ込んだような状態で2層を中心とした位置から出土した。



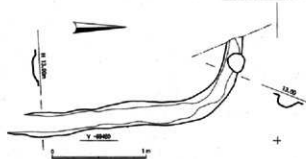
第88図 土壘558出土遺物実測図(1/4)

出土遺物 総量でコンテナ1/4程の分量が出土した。弥生土器の細片、小破片の資料で、中期以降後期までの資料を含んでいる。1535は、堇口緑部小破片資料で、口唇部に刷毛目調整後、撫で調整を行なう。口縁端部までの外面に煤状の付着物が残る。器表は灰白色を呈し、荒れている。1536は、高坏脚部小破片の資料である。外面には据縁に直交する方向に宛磨き調整をおこなう。胎土は夾雑物が少なく、精良である。浅黄橙色を呈す。1537～1539は器台各部の資



第89図 土壘558 (取から)

料である。1539は上下部を欠く資料である。胎土に礫を含み、器表はにぶい橙色を呈す。1537は基部の資料で、胎土に粗粒砂を含み、灰白色を呈す。1538は基部の資料で、器表の荒れが著しい。刷毛目調整後、撫で調整を行なっている。胎土は精良で、器表はにぶい橙色を呈す。



第90図 溝233実測図(1/80)

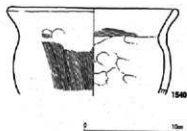
溝 溝 233

14-56区から46区に続く遺構である。断面形は、浅い逆台形状で、深さ0.1～0.2m程が遺存している。覆土は黒褐色粘質土である。遺物は覆土中から散漫に出土した。土師器甕細片があるが、混じて縄文土器、剣片類の出土が顕著である。縄文土器には多孔質の胎土の粗製深鉢のほかに精製の浅鉢の資料も含まれている。

溝 579

14-73から83区に位置する。長さ5mを検出した。平面では不整形な形状を呈し、幅は0.2m、深さは0.1m程の規模である。

出土遺物 覆土中から、少量の遺物が出土した。殆どが細片の土器資料である。広口壺1540を



第92図 溝233出土遺物実測図 (1/3)

溝 634-635-640-642

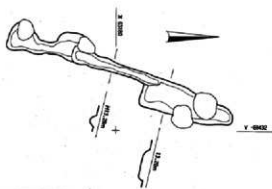
14-82区に位置する。隣接3次地点方向へ延びる。635、640、642とする溝と重複している。流路を変えながら流れる小河川のような流れを考えることができよう。溝634、635、640は断面が逆台形状を呈し、深さは0.1m程である。溝642は浅い皿状の断面形を呈す。これらは、いずれも覆土が黒褐色粘質土である。

出土遺物 各溝から比較的多量の遺物が出土し殆どが細片あるいは小破片の弥生土器資料である。溝640、642からは混じって土師器が出土した。

溝 655

14-82区に位置する。平面では蛇行し、不整形な形状を呈す。幅は、0.2~0.4mの間にある。断面形は逆台形状で、0.2m程で、底面に流水による抉れなどが残る。

出土遺物 覆土中から少量が出土した。何れも細片の土器資料であり、弥生時代中期から後期までの資料を含んでいる。



第91図 溝579実測図 (1/80)

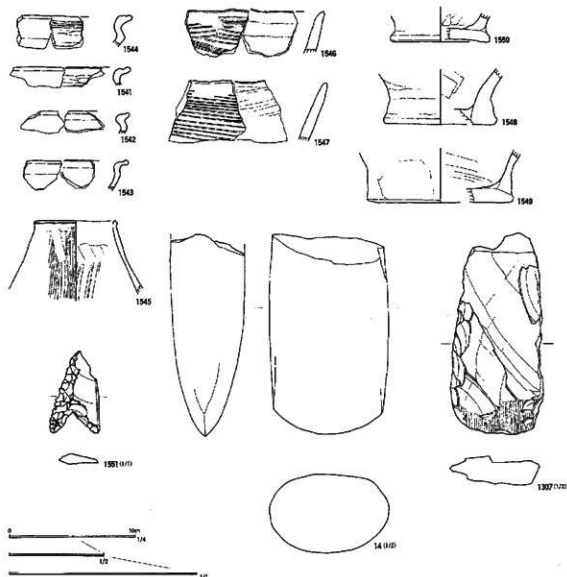
が細片の土器資料である。広口壺1540を図示することができる。上半部の小破片資料で、胎土に粗砂を含み、外面は褐灰色、内面は橙色を呈す。



第93図 溝634-635-640-642 (北から)



第94図 溝655 (東から)



第95図 飯氏遺跡第6次地点出土縄文時代遺物 (1/2, 1/4)

飯氏6次地点出土縄文時代遺物

縄文時代の遺構としては上述の埋甕を調査したのみであるが、調査中、縄文時代遺物の出土があった。遺物は1、3地点から出土した、1地点では中央部、3地点では西半部から出土した。前者からの出土量が多い。1地点14-54、64区では一部黒褐色粘質土が分布してここから縄文土器が出土した。そこで54区の一部で深掘りにより確認を行なったが、遺物等の出土はなかった。埋甕が下底部のみの遺存であることを考えると、過去にかなりの程度の削平が行なわれており、上記黒褐色粘土部分は、遺構の残滓の可能性がのこる。

ここで、今回調査により出土した縄文時代の遺物を集成して図示する。

1544・1541・1542・1543は、浅鉢である。口唇部は外反して水平に開き、上面に1沈線が施される。1544の下半部の外面には煤状の付着物が残る。1546・1547は、粗製深鉢である。1550・1548・1549は粗製深鉢底部である。1548・1549の胎土には孔隙が顕著である。1545は小形の甕である。胎土は精良で、外面は黒色を呈す。外面に寛磨き調整をおこなう。石器では、剥片鎌1551、磨製石斧14、打製石斧1307を示すことができる。また、図示しないが石匙の出土があった。

3. 飯氏遺跡第6次調査第2地点

1) 飯氏遺跡第6次第2地点の調査概要

確認調査 第1地点の東に接して設けた。飯氏遺跡と、飯氏連町遺跡との間を画す谷部にを含む地形に位置する。調査着手に先立ち、トレンチによる試掘調査を行った。現状の地形が旧地形を反映して、用地東側で谷の岸を示す段落ちとなることが分かった。このうち、谷に段落ちする部分とそれに近い谷部中で弥生土器が集中出土することを確認し、これの出土範囲で調査区の東限とした。これより東は、遺物の出土はほとんどなく、谷は青灰色粘土で埋まっている。

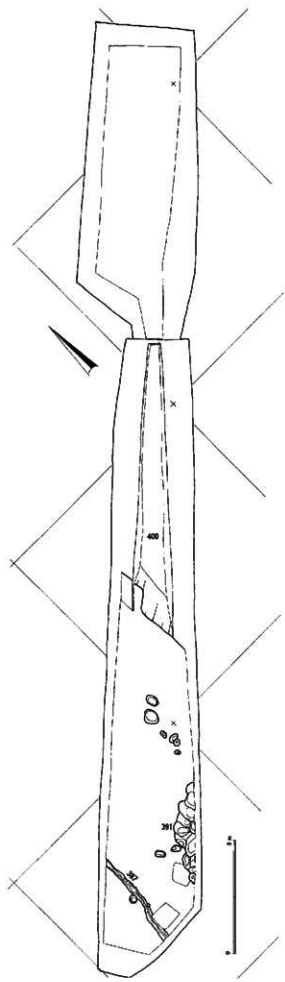
調査の概要 発掘調査は、廃土処理の問題から東西の2区に分け、西半区から調査に着手した。調査区の東1/3程は、上述谷部に相当し、西側は、1地点に続く段丘面である。谷に向かいやや傾斜をもつ。続けて設けた東半区は、谷部の調査となった。谷は段丘面から1m程の深さがあり、調査区の範囲内では、底面が平坦である。

2) 飯氏遺跡第6次第2地点の調査成果

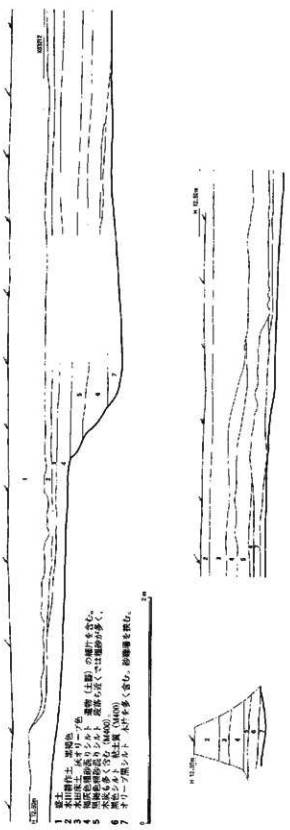
谷部の土器集中を遺構400としたほか、段丘面上で遺構の出土があった。報告する遺構の他は、若干の小穴を検出したのみである。その密度はごく小さい。柱穴とできる遺構はない。表土下には遺物包含層が部分的に薄く残る。以下、個別遺構を報告する。



第96図 飯氏遺跡第6次第2地点西半調査区全景（西から）



第97図 飯氏遺跡第6地第2地全体遺構実測図 (1/200)



- 1 土
- 2 木田層粘土 築地盤
- 3 木田層土 成オリーブ風
- 4 層状成層砂りシラト 遺物(土製)の層状を含む。
- 5 木田層成層砂りシラト 炭灰から成る層状が多く、
- 6 黒色の砂りシラト(砂) 土質層(MAPO)
- 7 オリーブ風シラト 木片を多く含む。砂層を採む。

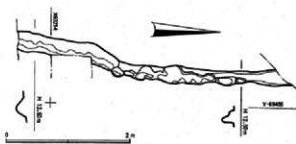
第98図 飯氏遺跡第6地第2地点北壁上層実測図 (1/100)



第99図 飯氏遺跡第6次第2地点西半区北壁土層（南から）

溝 387

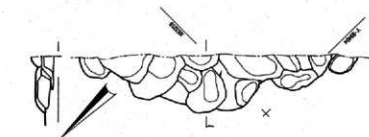
23-15区に位置する。南北方向に走る幅0.3m程の溝である。断面形は、部分的に深いV字形を呈し、深い位置で0.2m程を測る。底面の東側に沿い小穴状の窪みが連続している。水流による抉れであろうか。覆土は暗褐色硬質の粘質土である。3次調査で検出した溝7につながるものか。遺物の出土はなかった。



第100図 溝387実測図 (1/80)

遺構 391

23-15区に位置する。調査区内では長さ4.5m、幅1.0m程の範囲を検出した。平面形は不整形な形状で、小穴が密集、複合したような状態を示している。個別遺構としてとらえる事はできない。底面は著しく凹凸がある。深さは0.3m程を測る。



第101図 遺構391実測図 (1/80)

出土遺物 少量の細片の土器が覆土中から少量出土した。古墳時代



第102図 飯氏遺跡第6次第2地点東平調査区全景（東から）



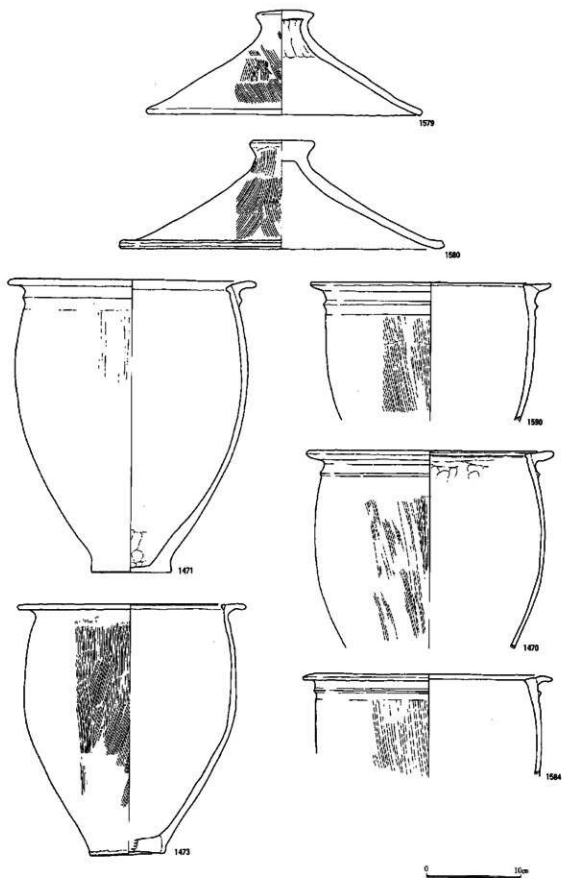
第103図 飯氏遺跡第6次第2地点東平区北壁土層（西から）



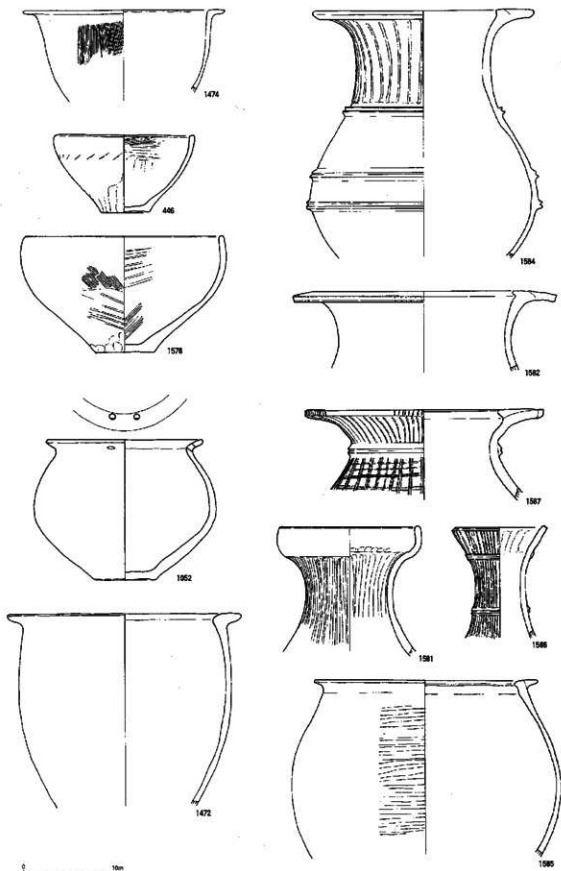
第104図 遺構400遺物上部遺物出土状況 (南から)



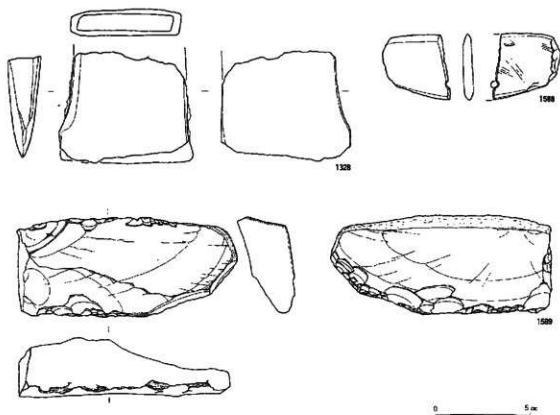
第105図 遺構400完掘後の状況 (北から)



第106图 遼陽400川土遺物実測図1 (1/4)



第107图 遼陽400出土遺物実測図2 (1/4)



第108図 遺構400出土遺物実測図3 (1/2)

の土師器底部資料が含まれる。

遺構 400

23-26区を中心とする位置にある。先述したように、土器が集中出土した事からこの部分を一括する。調査区土層断面図に示すように、大きく3層にまたがった範囲から遺物が出土する。段落ちに沿った部分が、より大きな破片を含んで遺物が集中し、ほぼ6層の分布範囲に一致して多くが出土した。

出土遺物 遺物は総量でコンテナ10箱程の分量が出土した。破片の資料のなかに1個体が圧潰した資料も含まれる。土器は弥生時代中期とできるもので、甕を主として、壺のほかは鉢、蓋、器台等が含まれる。他に石製工具、鉄斧が出土した。以下に、出土遺物の一部を第116図～118図に示す。

蓋は、数例の出土があった。大形の1579、1580は何れも小破片の資料である。甕は、全体を復元できる1471、1475のほかは、上下部を接合できる資料はない。口縁部下に突帯がつく資料とつかない資料(1423)とがある。474は深鉢上半部である。鉢には、完形の446、1578がある。ともに内面に赤色顔料が残っている。壺(446・1472・1474・1552・1578・1581・1582・1584～1587)は、無頸壺1552が、略完形の資料であるほかは、すべて上半部資料である。広口壺1584は、最突帯以下の外面で赤色顔料上に黒色顔料を塗布された形跡がある。この部分、赤色顔料は垂れた状態となって、全体に塗布されていない。鑄造鉄斧1328は、上半部を欠く資料である。錆が著しく詳細は不明である。刃縁を復原すると、刃渡り6.9cm程となる。袋部の横断面は、長方形状を呈す。石製品は、叩石が出土した他に以下のような資料が出土した。1588は、石包丁の破片資料である。石材は粘板岩であろうか。1589は、剥片の薄い側の間縁部を使用した工具である。複数資料が出土している。

3. 飯氏遺跡第6次調査第3地点

1) 飯氏遺跡第6次第3地点の調査概要

調査区の位置と地形 1地点とはバイパス本線を間に対面する位置に設けた。長さ約85m、幅約10m範囲での調査である。1地点と同じような地形だが、標高は、16m程の位置にあり、1地点よりは、2.5m程高い位置にある。遺構確認面は、現耕作土下に0.6-0.8m程の厚さで黒褐色土があり、それを除去した位置となる。この層は、東側で厚い。これと地形全体が、中央から東側で東方の谷に向かい緩く傾斜していることから、調査面は西側で標高15mであるのに対して調査区東端部では標高14m程の位置となる。調査面は1地点とは異なり、全体に粗砂層の広がりとなっている。

調査の概要 本地点では、調査は、廃土処理の制約から、東西に2分割する工程となった。先ず西半区から着手した。西側に寄って甕棺墓、竪穴住居を検出した。以上のほかに、土塊、小穴等を検出したが、建物を復原できるような柱穴は確認できなかった。これは、東半区も同様である。東半区は、東側の谷に向かい緩く傾斜する面となっている。そのほかに竪穴住居を検出したが、西半区のように密集、重複するものではない。また、形状も異なる。1地点に繋がる遺構として、確認のみに終わったが、溝がある。

2) 飯氏第6次第2地点の調査成果

以下、各遺構について述べる。



第109図 飯氏遺跡第6次第3地点西半調査区全景（西から）



第110図 飯氏遺跡第6次第3地点西平調査区全景（東から）



第111図 飯氏遺跡第6次第3地点西平調査区西端部全景（東から）



第112図 飯氏遺跡第6次第3地点東半調査区全景（西から）



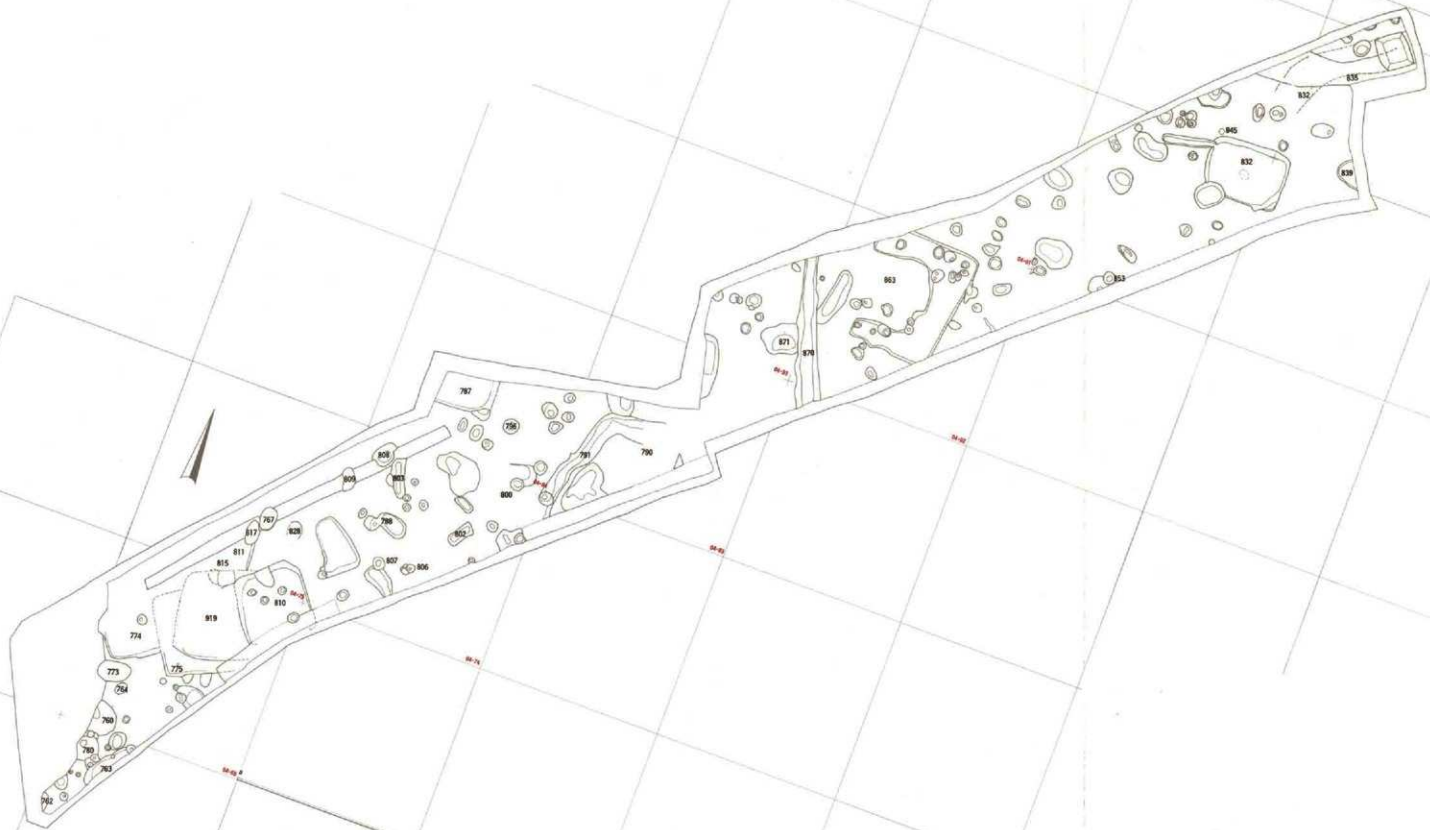
第113図 飯氏遺跡第6次第3地点東半調査区東端部全景（東から）



第114図 飯氏遺跡第6次第3地点東半調査区西半部全景（東から）



第115図 1 飯氏遺跡第6次第3地点南壁土層（北から）2 北壁土層（南から）



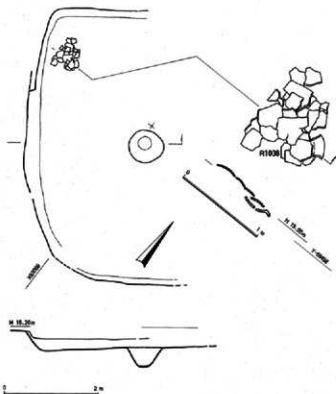
竪穴住居

西半区では、遺物の出土高さ等から、遺構が地山上の黒褐色土を掘り込んでいると考えられたのでそこでの遺構検出を試みたが、判然としなかった。トレンチで部分的に先行掘り下げなどをおこなったが把握できず、結局、調査区全体を、地山黄褐色粗砂層まで掘り下げた調査面での調査となった。このため、本来遺存していた状態で遺構を把握することができなかった。竪穴住居はまた、密集して相互に重複していたため、先後関係を現場では把握できず、整理の過程で確認訂正した例がある。このように図上復原例も含めて西半区では5基の住居を確認した。東半区では分散した3基の竪穴住居を検出調査した。

竪穴住居 774

04-65区に位置する。竪穴住居775と重複し、それよりも古い。調査時は、西・南・東壁のそれぞれ一部を確認できた遺構である。床面とする中央の小穴を確認しているが、両者の関係は判らない。これよりほかに住居床範囲では遺構を確認できていない。覆土は、ほか遺構同様、粗砂混りの黒褐色土である。

出土遺物 コンテナ1/2程の分量



第117図 竪穴住居774実測図 (1/60)

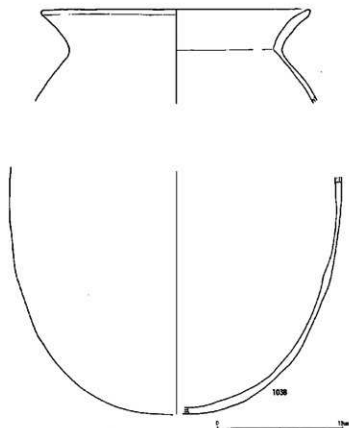


第118図 竪穴住居774遺物出土状況 (東から)

が出土した。殆どが細片の土器資料であるが、土師器1038が覆土中位から圧潰した状態で出土している。

出土土器では、量的には弥生土器が最も多い。これに土師器のほか少量の須恵器が加わる。

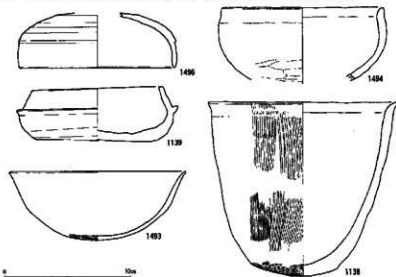
甕1038は、1個体の資料であるが、中央部が細片化しており、相互の接合ができない。全体に遺存状態が不良である。頸部以下の内面の全面に篋削り調整を行なっている。胎土には粗砂を含み、器表は黄褐色を呈す。



第119図 竪穴住居774出土遺物実測図 (1/3)

両者の遺物が混じっている。重複の関係から竪穴住居919に帰属する資料がかなりの割合を占めるものと考えられる。このほかに住居南西部分の壁際から個別別資料が出土している。第129・130図に図示する。

遺物の大半は、弥生時代中期から後期にかけての土器片であるが、古墳時代の遺物が出土する。須恵器は蓋坏(1496・1139)

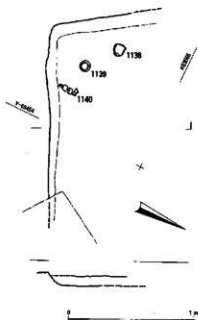


第121図 竪穴住居775出土遺物実測図 1 (1/3)

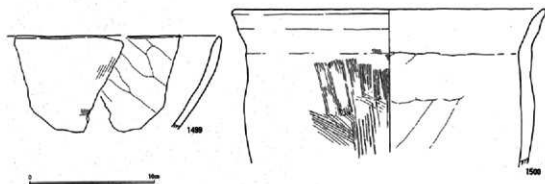
竪穴住居 775

04-65区に位置する。竪穴住居919と重複し、それよりも古く、竪穴住居811との関係は不明確である。南壁と西壁の一部を確認している。掘型に相当する範囲の床面では、関連する遺構は検出できなかった。深さ0.2mを測る。

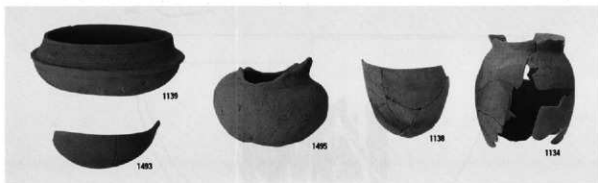
出土遺物 竪穴住居919との重複関係が不明なまま調査したので、



第120図 竪穴住居774実測図 (1/60)

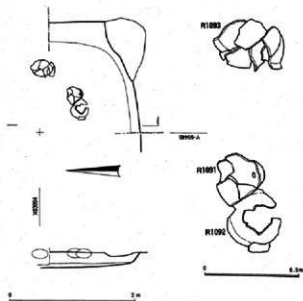


第122図 壑穴住居775出土遺物実測図 2 (1/3)

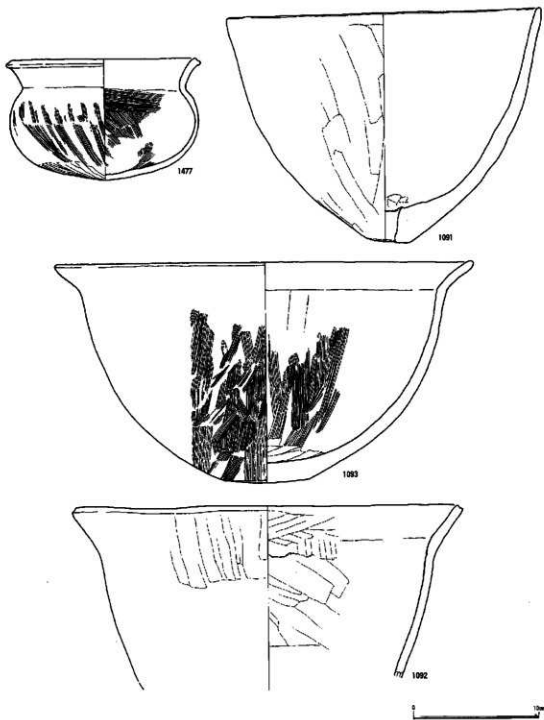


第123図 壑穴住居774出土遺物

のほか、甕の体部細片がある。土師器は甕(1138・1500)、碗(1493・1494)、鉢(1499)、小形丸底の壺(1495)のほかには把手のみの資料(1497・1498)がある。須恵器坏蓋1496は、小破片の資料であるが、坏身1139は、完存し、受部に焼成時の蓋の融着痕跡が残る。土師器甕1138は、1/2程が遺存する。口唇下の内面全体に剝削り調整を行なう。底面は刷毛目調整により面を成している。内面の荒れが著しい。甕1500は小破片の資料である。胎土に夾雑物が比較的小さい。にぶい橙色を呈す。碗1493は、砂質の胎土で、内外面を撫で調整に丁寧な撫で調整によっている。橙色を呈す。1494は1/4の破片資料で、胎土に粗砂を含み、器表は橙色を呈す。鉢1499は口縁部の細片資料である。内面は強い撫で調整を施している。器表は橙色を呈す。小形丸底の壺は全体に指押さえ痕が残る。胎土に粗砂を含み、器表面は浅黄褐色を呈す。把手1497は全体に指押さえ痕が残る。胎土に細かな砂粒を含み、器表面は明黄褐色を呈す。把手1498も全体に指押さえ痕が残る。胎土には粗砂を多く含む。体部への接着は、柄によりおこなっている。



第124図 壑穴住居787実測図 (1/60)



第125区 竪穴住居787出土遺物実測図 (1/3)

竪穴住居 787

東半調査区04-84区に位置する。調査区の隅にかかる。平面形は隅丸の方形状を呈すように見取れるが、調査した部分だけからでは判断が難しい。壁は緩く立ち上がり、深さは現状で0.2mを測る。覆土は黒褐色の粗砂混り土で、全体に一様で分層はできない。覆土の中位、調査面の高さで完形あるいはそれに近い土器が圧潰した状態で出土した(1091~1093)ほかに、覆土中からコンテナ1/4程の分量の遺物が出土した。



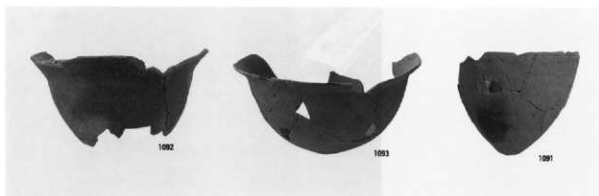
第126回 竪穴住居787 (東から)



第127回 竪穴住居810 (東から)

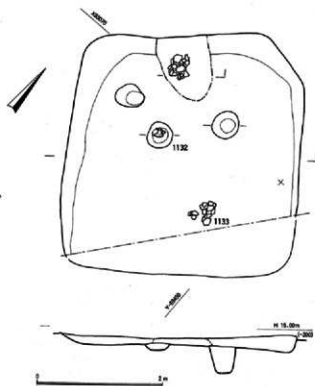


第128回 竪穴住居810内 (東から)

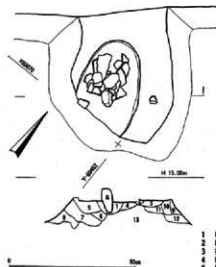


第129図 竪穴住居787出土遺物

出土遺物 上記資料のほかに、細片～小破片の土器資料がある。弥生時代後期から、古墳時代にかかる資料である。小形の広口壺1477は、1/2程が遺存している。胎土は精良で、口縁部の内外面に回転を利用した捺で調整を行なう。器表面はぶい橙色を呈す。甑1091は、上半部の1/2を欠く。外面の一部は篋削り調整状の痕跡が残る。押しつけてやや平坦にした尖底状の底部に1孔を外面から穿っている。胎土には礫を含む。器表面は明褐色を呈す。鉢1093は胎土に細礫を含み、やや脆い。器表面は橙色を呈す。内底面に篋削り調整をおこなう。口縁部の内面に火撥ね状の痕跡が残る。鉢1092は底部を欠く1/2程の資料である。胎土には小礫を含み、器表面は明褐色を呈す。内外面とも刷毛目調整状の調整痕が残る。



第130図 竪穴住居810実測図 (1/60)

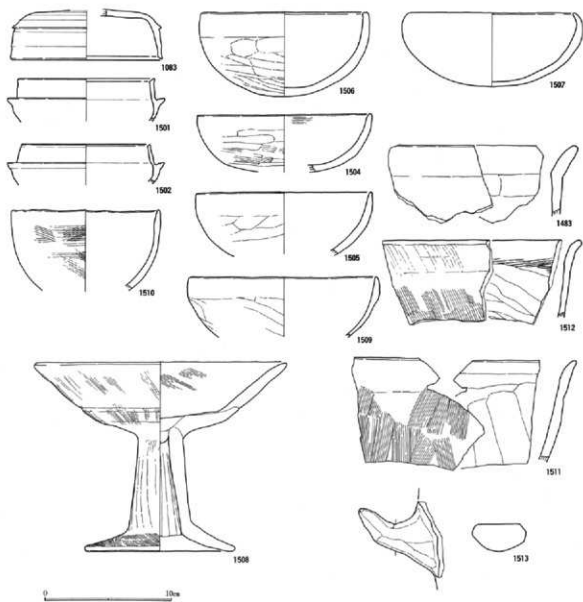


第131図 竪813実測図 (1/30)

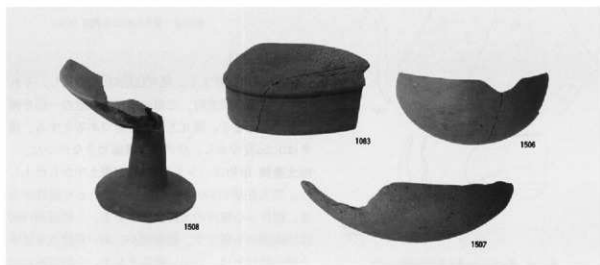
竪穴住居 810

西半調査区04-65区に位置する。竈をもつ住居で、竪穴住居919と重複し、それよりも新しい。西半区で密集重複する一連の竪穴住居のうちでもっとも新しい住居である。一部をトレンチにより掘り下げてしまっているが、平面形は不整な隅丸方形形状を呈す。竈を通る軸で3.9mを推定できる。直交する方向では3.7mを測る。壁の高さは、0.3mを測る。覆土は、全体に一樣

- | | |
|----------------------------|-----------------|
| 1 暗褐色土 白色粗砂、焼土ブロックを多く含む。 | 8 暗褐色土 灰白色砂を含む。 |
| 2 暗赤褐色土 焼部の内面壁、熱により変質している。 | 9 灰褐色土 |
| 3 褐色土 粘土質を含む。白色砂を含む。薄か? | 10 暗赤褐色土 |
| 4 暗褐色土 灰白色砂を含む。焼土ブロックを含む。 | 11 白褐色土 |
| 5 暗褐色土 粗砂を含む。 | 12 暗褐色土質土 |
| 6 暗褐色土 灰白色砂を含む。 | 13 灰白色シルト |
| 7 暗褐色土 | |



第132图 整穴住居810出土遺物実測図 (1/3)

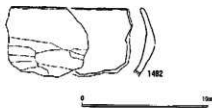
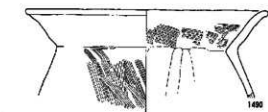


第133图 整穴住居810出土遺物

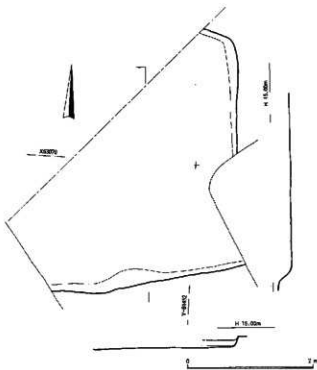
な黒褐色の粗砂混り土である。柱穴は不明である。

竈813 住居北側壁中央に設けられている。燃焼部に圧潰した状態で細片となった土器が残されている。中央に支脚として、20cmほどの長さの礫が立てられている。上部の構造は削平されて不明である。

出土遺物 遺物は、覆土中からコンテナ2箱程が出土したほかに、覆土中位から圧潰したような状態で1個体の土器が出土している。細片～小破片の土器片資料が主である。古墳時代資料が半ば以上を占める。須恵器は、蓋坏(1501～1503)がある。土師器には、碗(1504～1507・1509・1510)、甕(1483・1511・1512)、高坏(1508)のほか把手(1512)を図示できる。須恵器坏蓋1503は1/3が遺存する。坏身1501は、小破片の資料で、受部に焼成時の蓋の融着痕跡が残る。1502も小破片資料である。碗には深さにより2種ある。1506・1510が深い器形の資料である。1506は、1/3が遺存する破片資料である。胎土には粗砂を含み、内面には丁寧な撫で調整を施す。器表面は橙色を呈す。1510は1/4程が遺存する。内面には丁寧な撫で調整を施す。1504は内面に軽い磨き調整を施す。1509は、胎土に僅かに粗砂を含み、器表面は橙色を呈す。1507は、1/4の資料で、胎土に砂粒を顕著に含む。蓋は何れも口縁部細片の資料である。1511の胎土には小礫を含む。1512の胎土は砂粒を少量含み、器表面は明赤褐色を呈す。両者とも口縁直下の内面まで鈍削り調整が及ぶ。高坏1508は、甕前面の小穴から出土した。脚部は絞り込んだ痕跡が明瞭である。坏部の下半以下の器表面は被熱の痕跡が明瞭である。



第135図 竈穴住居811出土遺物実測図(1/3)



第134図 竈穴住居R11実測図(1/60)

竈穴住居 811

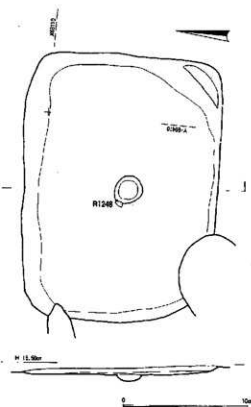
04-65区に位置する。竈穴住居919と重複し、それよりも古い。調査時、北側の隅部と東壁の一部を確認したに止まる。隅九方形の住居であるとする。深さは0.2m程である。柱穴等は確認できなかった。

出土遺物 遺物はコンテナ1/3程が覆土中から出土した。竈穴住居919の遺物が混じっている可能性がある。細片～小破片の土器資料である。土師器甕1490は口縁部の小破片で、器表面がにぶい黄褐色を呈す。土師器甕1491は、にぶい橙色を呈す。土師器碗1492

は内面に丁寧な燕で調整を施す。

竪穴住居 832

14-01区に位置する。平面形が隅丸の長方形状を呈す。長さ4.4m、幅2.9m程の規模である。深さは、0.1mが遺存する。住居中央の床面に炉が設けられている。径0.5m程の地床炉で、断面は皿状を呈す。炉の縁の床面から砥石が出土したほかは、極少量の遺物が覆土中から散漫に出土した。古墳時代前期の土師器かと思われる細片の土器が出土している。

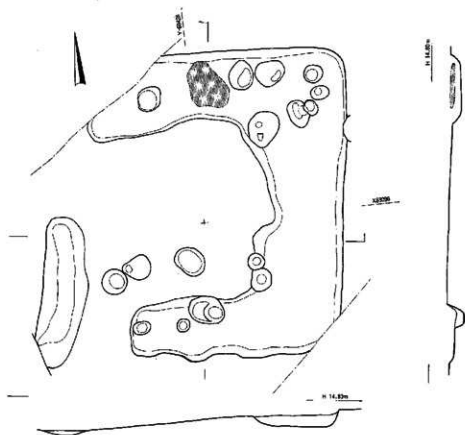


第136図 竪穴住居832実測図 (1/60)

竪穴住居 863

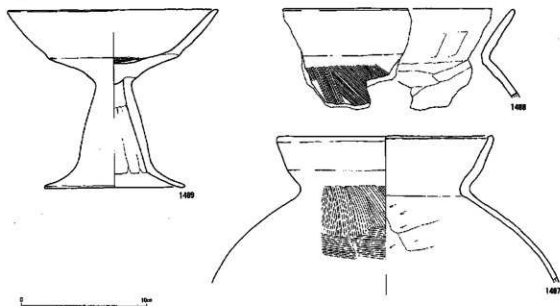
04-92区に位置する。掘型のみが遺存するものと考えた。これを復原すると、1辺6.6m程の方形の竪穴住居となる。北壁の中央に焼土が残る。

出土遺物 コンテナ1/3程の遺物が出土した。



第137図 竪穴住居863実測図 (1/60)

土師器高坏1489は、胎土に粗砂を含み、器表面にはぶい橙色を呈す。土師器甕のうち、1488は口縁部細片の資料である。胎土は精良である。1487は胎土に粗砂を含む。器表面は灰白色を呈す。何れも口縁部直下の内面まで鋭削り調整が及ぶ。

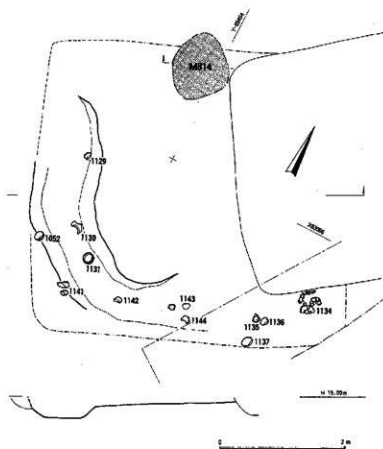


第138図 竪穴住居863出土遺物実測図 (1/3)

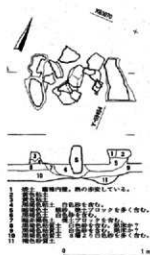
竪穴住居 919

04-65区に位置する。調査時は、竈814と西側の掘型底面を確認したのみであった。整理段階で、竈の位置関係から検討した結果、新たに設定した遺構である。竪穴住居810と重複しそれよりも古く、竪穴住居775よりも新しい。また、調査中、住居南壁に近い覆土中に粘土の広がりを確認しており、これも本住居に伴うものとできる。掘型の底面で0.3m程の深さがあったことが判る。

竈 814 住居北壁に設けられている。上部は削平されて残っていない。燃焼部に破片となった土器が残されている。中央には支脚として20cm程の長さの礫が立てられている。



第139図 竪穴住居919実測図 (1/60)



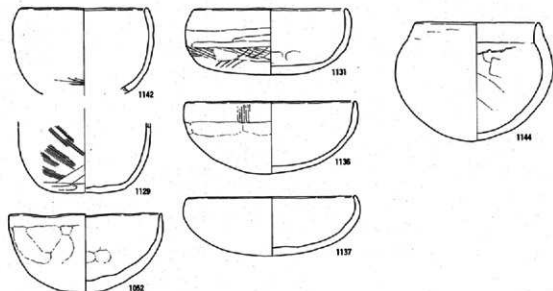
第140図 甕814実測図 (1/30)

煤状の付着物が斑に残っている。1144は、小形の壺状を呈し、胎土には粗砂を含み、器表面は橙色を呈す。最大径部以下の外面に煤状の付着物が残る。甕1484は1/3ほどの破片資料で、胎土はやや粗く、器表面は橙色を呈す。1485は、上半部の1/4程の資料である。器表面は橙色を呈す。1486は、口縁部で1/3が遺存する資料である。胎土に粗砂を含む。1130は上半部で1/3が遺存する資料である。器表

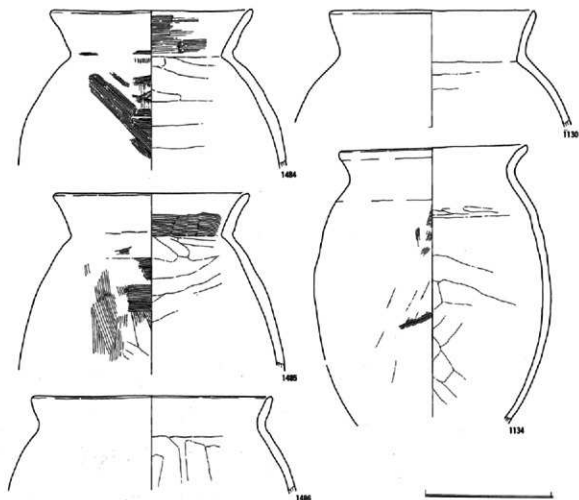
出土遺物 遺物は上述したような事情で、確実に本遺構に伴うものとしては、南壁に沿って出土し、個体別に取り上げた資料のほかは、甕814出土資料を示すことができるのみである。図示する資料はすべて土師器である。碗(1129・1131・1136・1137・1142・1144)と甕(1130・1134・1484～1486)とがある。このうち、甕1484～1486が甕814焼焼部からの出土である。土師器碗1142は胎土に粗砂を僅かに含み、器表面はにぶい橙色を呈す。1129は深い器形で器表面は橙色を呈す。1052は口縁部の一部を欠く資料で器表面は橙色を呈す。1136は外面に火撥ね状の剝落があり、器表面は橙色を呈す。1137は内外面共に丁寧な撫で調整が施され、外面には



第141図 甕814(竪穴住居919内)(裏から)



第142図 竪穴住居919出土遺物実測図1 (1/3)



第143図 壑穴住居919出土遺物実測図2 (1/3)



第144図 壑穴住居919出土遺物

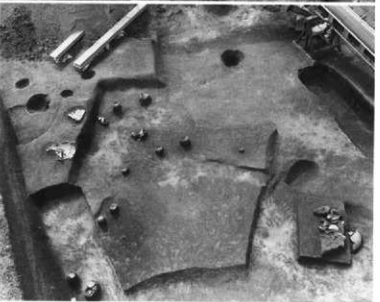
面は橙色を呈す。1134は底部近くを欠く資料である。圧潰した状態で出土した。器表面は橙色を呈す。他と異なり、鋭削り調整が口縁部直下まで及ばない。



第145図 竪穴住居832 (北ホ6)



第146図 竪穴住居863 (北ホ6)



第147図 竪穴住居919 (東ホ6)

甕棺墓

縄文時代の遺構も含めてここで報告する。

甕棺墓 767 04-75区に位置する。縄文時代晩期の遺構である。弥生時代甕棺墓より浅い位置で出土した。主軸は北9°西方向である。壺口縁を斜め上方に向けて埋置されている。掘型は不明確で、やや潰れた状態で出土した。底部を欠いている。

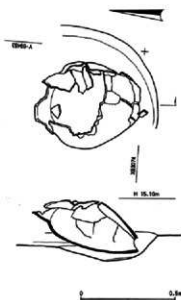
出土遺物 甕棺1123は、上半部の1/3を欠く。胎土は砂粒が混じるが細かい土である。器表面は浅黄橙色を呈す。内面の全体



第149図 甕棺墓767 (南から)

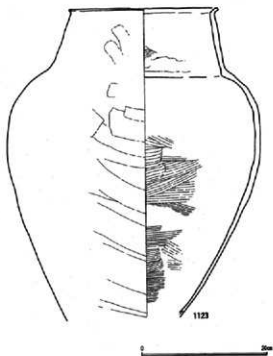


第151図 甕棺1123



第148図 甕棺墓767実測図 (1/20)

を刷毛目調整後、上半部に塗で調整を加えている。体部の外面は、成形時のままであるのか、粘土粒が浮いて付着した状態にある。底部は、他所で打ち欠いたものか破片も無い。



第150図 甕棺1123実測図 (1/6)

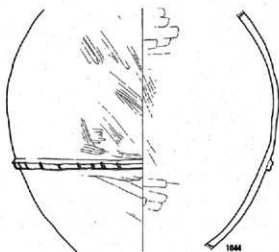


第152図 瀬氏遺跡第6次第3地点西半調査区甕棺墓出土状況(東から)

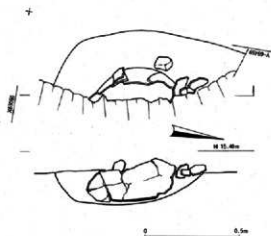
以下、弥生時代の甕棺墓を報告する。

甕棺墓 762

04-55区に位置する。水路工事、水田の耕作により、遺存するのは下半部の片側のみである。推定される



第154図 甕棺1044実測図 (1/6)



第153図 甕棺墓762実測図 (1/20)

主軸は北 9° 西となる。略水平に埋置されているように見える。単棺の甕棺墓であり、本地点の他に遅れて弥生時代後期に属するものである。



第156図 甕棺墓762 (西から)



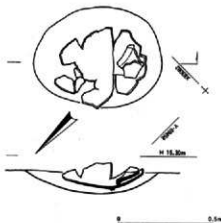
第156図 甕棺墓762

出土遺物 甕棺1044は、上下を欠く体部の一部のみが遺存する。胎土は粗砂を多く含む。器表面は黒斑が部分的に残るほかは、橙色を呈す。体部下部に刻み目を施す突帯を一条もつ。器表の調整は板状の工具によっている。

甕棺墓 764

04-65区に位置する。主軸は北45°東の方向である。削平により、極下部のみが遺存している。甕棺は略水平に埋置された、合口式の甕棺墓である。

出土遺物 甕棺1031は壺形の土器である。体部のみが

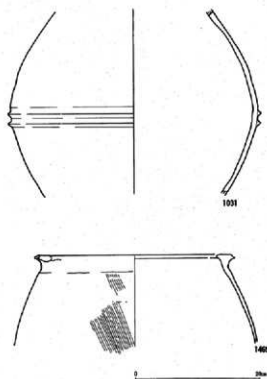


第157図 甕棺墓764実測図 (1/20)



第158図 甕棺墓764 (南から)

遺存する。胎土に粗砂を含み、外面は橙色、内面は灰黄色を呈す。最大径の部位に2条の断面三角形の突帯が巡る。外面の全体に回転を利用したような撫で調整が施される。甕棺1469は、甕を転用している。口縁部のみが遺存する。胎土に粗砂を含み、器表面は橙色を呈す。口縁部の外縁部が欠失するのは打ち欠きによるものの可能性がある。



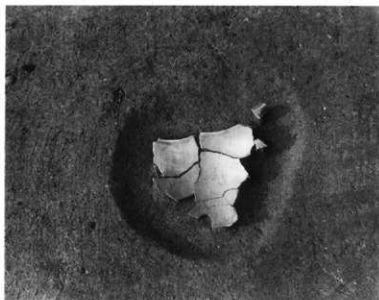
第159図 甕棺1031-1469実測図 (1/6)



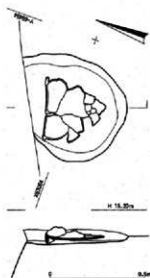
第160図 甕棺1031-1469

甕棺墓 765

04-65区に位置する。甕棺墓766と平行するような位置である。主軸は、北20°西の方向である。削平により、下底部に近いごく一部のみが遺存する。掘型は不明確である。遺存する甕棺の口縁部近くで竪穴住居に切られているが、口縁部の前に空間のあることから単棺構成の甕棺墓であるとす。

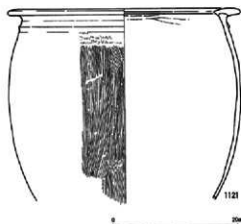


第162図 甕棺墓765 (南から)



第161図 甕棺墓765実測図 (1/20)

出土遺物 甕棺1121は、甕形土器である。胎土には砂粒を多く含み、外面には煤状の付着物が斑状に残っている。内面の全体は丁寧な撫で調整が施されている。口縁下の突帯は断面三角形である。



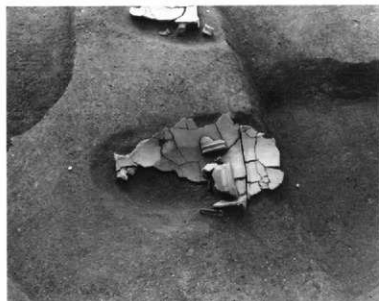
第163図 甕棺1121実測図 (1/6)



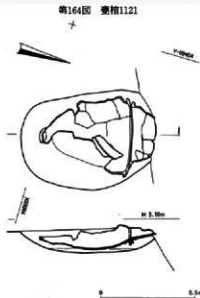
第164図 甕棺1121

甕棺墓766

04-65区に位置する。主軸は、北20°西の方向であり、甕棺墓765に一致する。また、底面の高さもほぼ同位置で、標高15m付近の位置にある。後世の削平により、下底部に近いごく一部のみとなっている上に、北側の甕棺は、竪穴住居755により掘り取られてしまっている。甕棺は南方方向に向かい僅かに傾斜をもって埋置されているように見受けられる。墓塚型は皿状に残っている。



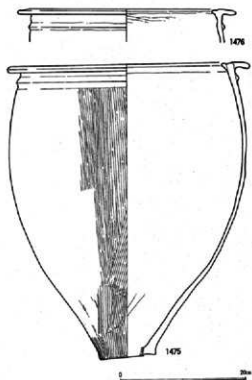
第166図 甕棺墓766 (西から)



第165図 甕棺墓766実測図 (1/20)

出土遺物 甕棺766は、甕の転用である。胎土に粗砂を含むほかに暗褐色の焼土粒のような粒を含んでいる。鑷先状の口縁部と付近の内外面は回転を利用したような撫で調整が施されるが、口縁直下の内面には粗い刷毛目調整痕が残る。以下の体部内面には丁寧な撫で調整が施される。

甕棺1445も、甕の転用である。胎土に粗砂を多く含み、器表面にはぶい橙色を呈す。口縁部は内方にも突出した鑷先状を呈する。口縁直下に断面三角形の突帯が1条廻り、それより上方は、回転を利用したような撫で調整を施す。下位は縦方向に平行する粗い撫で調整をおこなっている。内面には、全体に丁寧な撫で調整が施されている。底部から13cmの位置より上方、鑷先状の口縁部の端部までの間の外面には煤状の付着物が斑状に残っており、本来の用途を示唆している。また、内面にはこれに対応するように体部下半部の一部に煤状の付着物が斑状に残っている。



第167図 甕棺1475-1476実測図 (1/6)

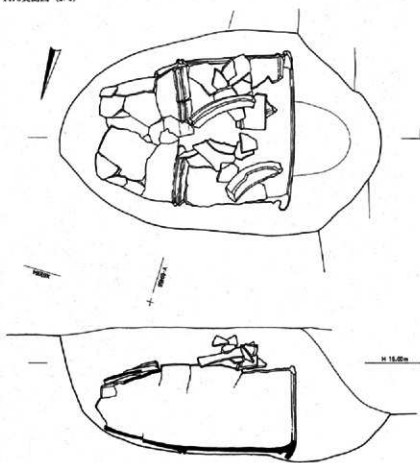


第168図 甕棺1475-1476

甕棺墓773

04-65区に位置する。

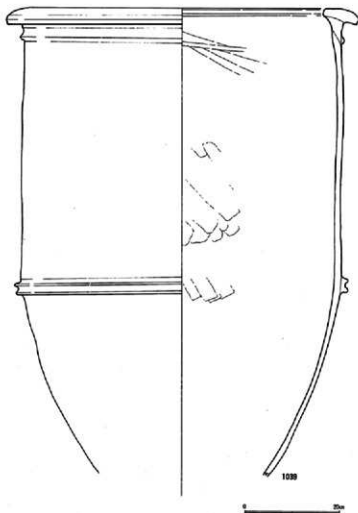
主軸は、北 106° 西の方向である。今回調査区で唯一、成人用とされる甕棺が使用されている。後世の、恐らく耕作によるものと思われるが、上部が掻き上げられた様な状態で破壊され、破片が散らばっている。これとは別に底部を含む下半部を失っている。埋置の時点で打ち欠いた可能性がある。土砂がこの開口部から流入している様子が見て取れる。上部を破壊された時点で崩落していないことから、甕棺内はすでに土砂で埋まっていたものとみえる。甕棺は



第169図 甕棺墓773実測図 (1/20)

水平に埋置され、単棺の形式をとる。掘型は、甕棺開口部側の一部が工事により破壊されているが、現状で平面形が楕円形状を呈し、長さ3.4m、幅2.1m程の規模をもつ。

出土遺物 甕棺1039は上述のとおり、底部を含めた一部を欠く他は、接合により全体を復元できる資料である。胎土には粗砂を含み器表は橙色を呈す。口縁部は厚い勳先状を呈し、内側へ緩く張り出す。口縁部直下に断面三角形の突帯1条が廻るほかに、体部の下半部に粘土帯を貼り付け2条の突帯としている。口縁部とその近くは、回転を利用したような撫で調整が施すが、それ以外の外面には斜め方向の丁寧な撫で調整が施される。口縁部近くの内面には、斜め方向に工具による条線が残る。体部中位よりやや上方の内面には工具により粘土が斜め下方に向かいはみ出している部分が残っている。下位の突帯部の内面には篋状の工具の圧痕が残る。



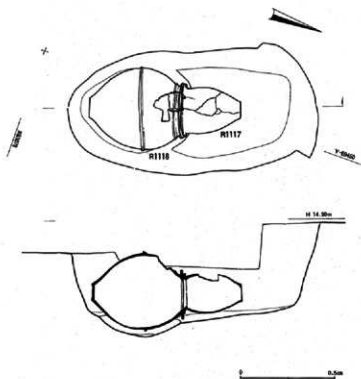
第170図 甕棺1039実測図 (1/8)



第171図 甕棺773 (北から)



第172図 甕棺1039



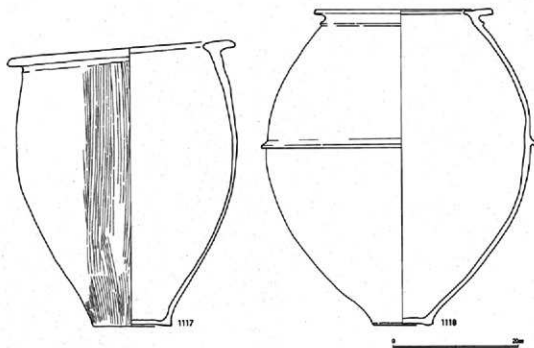
第173図 甕棺墓809実測図 (1/20)



第174図 甕棺1117-1118

甕棺墓 809

04-64区に位置する。主軸は、北20°西の方向である。合口式の甕棺を水平に埋置している。墓坑底は甕棺の形状にあわせて、南側部分が一段深く掘り下げられている。墓坑は平面が楕円形状を呈し、長さ1.3m、幅1.3m程の規模をもつ。トレンチにより一部掘り下げているが深さは0.5m以上遺存して

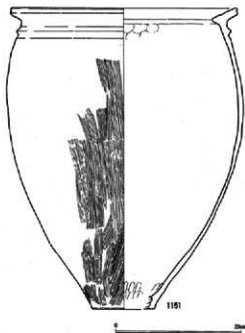


第175図 甕棺1117-1118 実測図 (1/6)



第176図 壺棺墓809(西から)

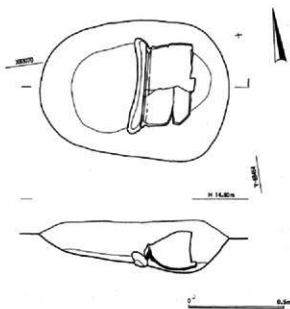
頸部は強く窄まる。口縁部は鋤先状を成し、内側へも強く突出する。口縁部直下に断面三角形の突帯が巡る。胴部径の最大となる位置に1条の突帯が巡る。断面では、先端が狭まみ下げられているような形状を呈す。底部は僅かに上げ底状を呈す。胎土には粗砂を含むが土は極細かい。器表には黒斑があり、にぶい橙色を呈す。



第178図 壺棺1151実測図(1/6)

いたことがわかる。墓墳の底は平坦面となり、北側に空間が設けられている。

出土遺物 壺棺のうち北側の1118を上堯とする。体部の一部を欠く堯である。口縁部は鋤先状を呈し、内側へも突出する。口縁部直下に低い断面三角形の突帯が巡る。外面は、縦方向に方向を揃えた粗い刷毛目調整が施され、内面は丁寧な撫で調整が行なわれている。底部内面には指押さえ痕が残る。底部の器壁は薄く、やや上げ底状を呈す。下堯とする壺棺1118は、壺形土器である。無頸の土器で、口



第177図 壺棺墓815実測図(1/20)

壺棺墓 815

04-65区に位置する。主軸は北 82° 西の方向である。単棺の壺棺を埋置する。後世、同じ位置に堅穴住居919を掘り込まれて、その竈814が、壺棺直上に載っている。検出時は壺棺上部も遺存しており、図示するのは竈の除去時に誤って下位の壺棺も取り除いてしまった結果である。掘型は不明確である。

出土遺物 壺棺1151の口縁部は鋤先状を呈し、上面

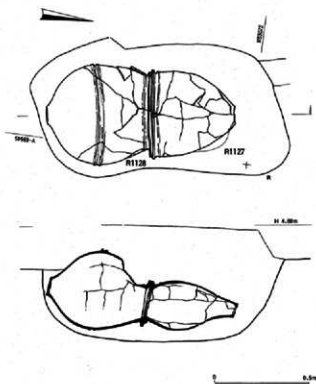


第179図 甕棺墓815 (西から)



第180図 甕棺1151

が内側へ傾斜する。全体の器形もこの位置で内側へ括れる。口縁下に断面三角形の突帯が廻る。外面は、2段に分けて縦方向方向をそろえた刷毛目調整を施す。底部近くでは、不整な方向をとる。内面は、口縁部直下指押さえ痕が残るほかは、全体に丁寧な撫で調整を施す。



第181図 甕棺墓817実測図 (1/20)



第182図 甕棺墓1127-1128

甕棺墓 817

04-75区に位置する。甕棺墓767に近接して、それより深い位置にある。主軸は北172° 東の方向である。合口の甕棺を埋置する。墓壙は平面形が不整な楕円形状を呈し、長さ2.8m、幅1.5m程の規模である。深さは、一部をトレン

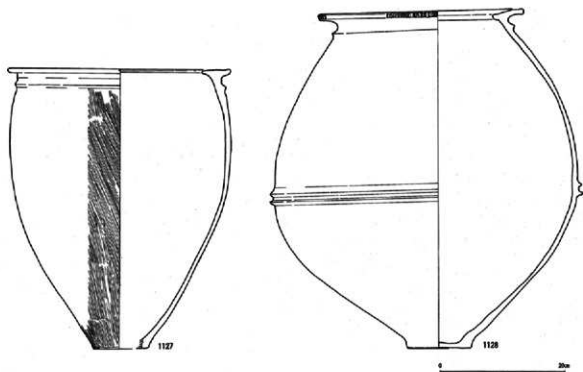


第183図 壺棺1127-1128

チにより掘り下げてしまっているが、1.2m程を測ることができる。壺棺1127側に空間が設けられている。

出土遺物 壺棺1127を上壺とすると、上壺は、壺形土器である。底部以外は接合復原できる資料である。口縁部は鋤先状を呈して内方に大きく突出、かつ器形全体もここで窄まる。口縁部の上端面は水平である。口縁下に断面三角形の突帯がめぐる。突帯以下の外面には斜め右下がり方向の刷毛目調整が施される。内面には漚で調整が施される。底部は欠失して不明で

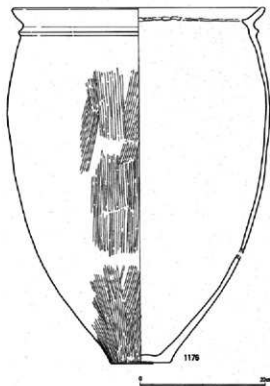
ある。下壺は壺棺1128である。接合して全形を復原できる無頸広口の壺形土器である。口縁部は鋤先状を呈し内方に突出する、口縁上端面はやや内傾する。口縁部の外側端面には刻み目が施される。口縁部直下に断面三角形の突帯がめぐる。器形は口頸部で大きくくびれ、全体として球状を呈することになる。内外面とも焼成前に上掛けがおこなわれるものか器表の調整痕跡は不明である。胎土は精良で、やや粒の小さい砂粒が混じる。器表の色調は変化が激しいが、全体としてはにぶい橙色を呈す。



第184図 壺棺1127-1128実測図 (1/6)

甕棺墓 828

04-75区に位置する。西半調査区の調査終了後埋め戻しの折、確認のため機力により深掘りをおこない検出したものである。単棺の甕棺を埋置する遺構と考えられるが、甕棺の前部を掘削時に削り取っている。現状からして主軸は北73°東の方向である。上部の破片が内側に落ち込んでい

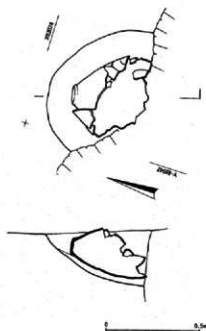


第186図 甕棺1176実測図 (1/6)

外面には粗い刷毛目調整が施され、内面にはあて具か、浅い窪みが全面に分布して一部では縦方向の条線として残っている。胎土には砂粒を含む。



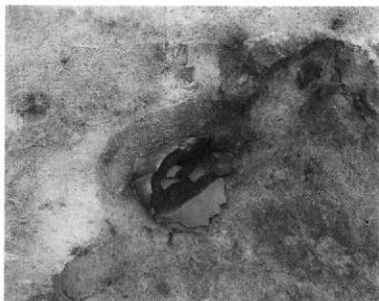
第188図 甕棺1176



第185図 甕棺墓828実測図

るのが観察され、既に圧潰していたものと思われる。甕棺は破片を収集し、全形を復原実測できる資料となった。

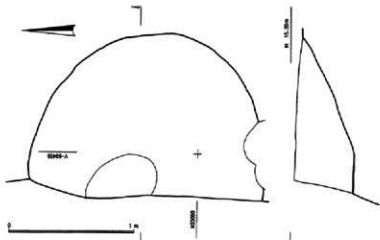
出土遺物 甕棺1176の口縁部は内湾しながら外方に屈曲する。屈曲部の内面に突帯が巡り、全体として鐮先状を呈している。この突帯の端部は欠失しており、人為的な打ち欠きの可能性がある。口縁直下に断面三角形の突帯がめぐる。



第187図 甕棺墓828 (南から)

土壇 760

04-65区に位置する。一部を欠くが、平面形が不整な円形状の土壇である。その径は1.9m程である。断面では楕円状を呈し、深さは0.5mを測る。覆土は他遺構と同様粗砂混りの黒褐色土である。全体に一律で、堆積の変化等は認められない。隣接して南側に同様の形状の遺構780がある。



第188図 土壇760実測図 (1/30)



第190図 土壇760 (南から)

出土遺物 覆土中から極少量が散漫に出土している。細片～小破片の土器資料である。縄文土器は粗製の深鉢細片である。弥生土器では中期の甕口縁部、底部の資料が含まれる。のこの中に1点ではあるが、糸切底土器の細片資料が出土している。

土壇 788

04-74区に位置する。平面形は楕円形状を呈し、長さ1.7m、幅0.9m程を測る。断面形は逆台形状を呈し、0.1m余りほどの規模

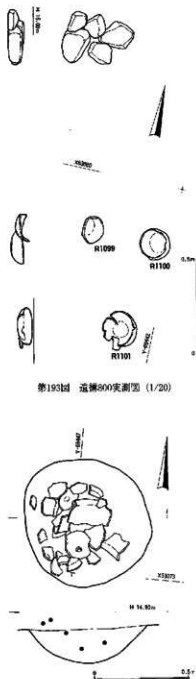
である。土壇底部は平坦でそれを長軸方向に区切るように至円礫が3列配置されている。礫の上端の高さはそれぞれ大きな差がない。西から東の列に向かって僅かではあるが次第に高くなっている。何かを支えるための支持台かとも思われるが、具体的に示す資料は得ることができなかった。遺物は覆土中から散漫に極少量が出土した。何れも細片の土器資料で、弥生土器である。後期とできる高坏のほかは壺体部の資料である。



第191図 遺構788 (西から)

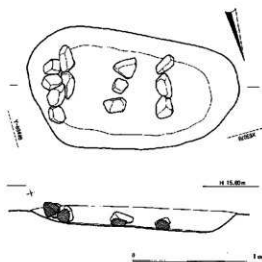
遺構 800

04-74区に位置する。地山上の黒褐色土の掘り下げ中に検出した。掘り込み等は確認できなかった。亜円礫が土層788と同様に並ぶ部分と、完形あるいはそれに近い土器が近接して出土する部分とでなっている。これらは何れも同一床面に置かれたように同じ高さ(標高14.9m前後)で出土している。礫には被熱等の特別な痕跡は観察できなかった。



第193図 遺構800実測図 (1/20)

第195図 遺構807実測図 (1/20)

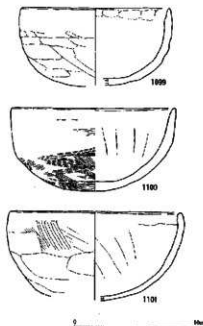


第192図 遺構788実測図 (1/30)

出土遺物 遺物は、上述のようなまとまりをもって出土したほかに周辺の黒褐色土から少量の細片の土器資料が散漫に出土した。

以下、一括出土した土器について報告する。

一括出土したのは何れも土師器碗である。碗1101は、底部を欠く資料である。口縁部の内外面には口縁に双方向の撫で調整を施す。それ以下の外面には粗い刷毛目調整を行なう。体部下半では更に横方向の斲削り調整を加えている。内面には放射状に工具の痕跡が残されている。胎土には小礫までを含み、器表は橙色を呈す。碗1100は、1/3を欠く資料である。上半部の外面は撫で調整と見えるが、板状の工具によるものかもしれない。下半部は、不規則に繰り返される撫で調整が行なわれて丸底の底部を形成している。内面には1101と同様放射状の工具痕が残っている。胎土に粗砂を含み、やや脆い。器表面は灰黄褐色を呈す。碗1099は、全体の1/3の資料である。外向下半部に横方向に斲削り調整を加える。口縁部以下の内面には指押さえ痕が残される。



第194図 遺構800出土遺物実測図 (1/3)

遺構 807

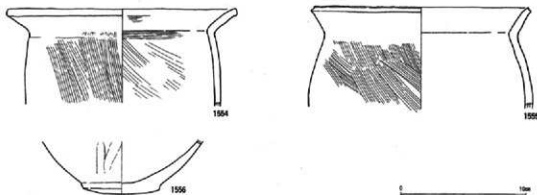
04-74区に位置する。土器破片を投棄する円形の遺構である。平面形は円形状で、径は0.6mを測る。断面形は深い皿状を呈し、深さ0.2mを測る。土器は遺構壁に沿うように摺鉢状に落ち込んでいる。遺物の出土位置から、調査面より高い位置、黒褐色土を掘り込んでいたことがわかる。

出土遺物 遺物はコンテナ1/3程の分量が出土した。細片～小破片の土器資料が殆どである。弥生時代後期の壺がもっとも多い。

壺1554は、口縁部1/4の資料で



第196図 遺構807 (北から)

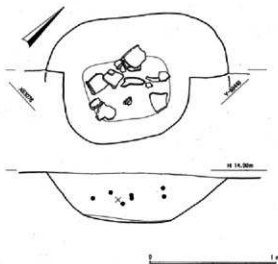


第197図 遺構807出土遺物実測図 (1/3)

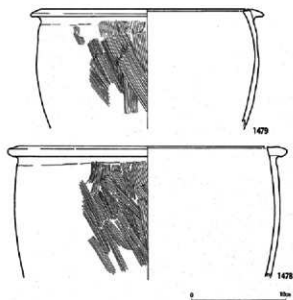
ある。口縁部以下の内外面に刷毛目調整を施している。胎土には砂粒を多量に含み、器表面はにぶい黄褐色を呈す。壺1555は口縁部の破片資料である。口縁部直下まで鋭削り調整が及んでいる。胎土には粗砂をわずかに含み、器表面は明赤褐色を呈す。壺1556は、底部の破片資料である。内外面とも撫で調整を施している。外面のそれは鋭削り調整状を呈す。胎土には砂を多く含み、器表はにぶい黄褐色を呈す。

土壌 808

04-74区に位置する。半ばをトレンチにより掘り下げてしまったが、原状は平面形が隅丸長方形形状を呈するの土壌である。



第198図 土壌808実測図 (1/30)



第199図 土壌808出土遺物実測図 (1/3)

縁部直下から斜め方向の刷毛目調整が施されている。外面には煤状の付着物が残る。壺1478も上半部の資料である。一部を欠く他は全周が遺存する。口縁部は輪状の粘土を張りつけて成形しているように観察される。内面の口縁部やや下った位置から下の器表は擦れて、胎土の砂粒が浮きでている。外面では、口縁直下から刷毛目調整が施されるが、口縁部直下の刷毛目調整を最後に行なっているように観察される。胎土には砂粒・小礫を顕著に含み、器表面は橙色を呈す。資料下半部は、被熱によるものか赤化している。



第200図 土壌808出土遺物実測図 (1/3)



第201図 溝791実測図 (1/20)

土壌は、長さ1.5mを測り、幅は1.1m程を推定できる。断面形は広く開いた壺形状を呈し、深さは0.4mを測る。覆土の中心から比較的大きな破片の土器資料が出土した。

出土遺物 遺物は総量でコンテナ1/3程が出土した。以下に報告するように弥生時代中期の壺の上半部を復元できる資料のほかに、蓋かと思われる細片資料、外反した口縁端部に刻み目の付される資料が含まれる。それ以外は壺の体部、口縁部といった部位の細片資料である。

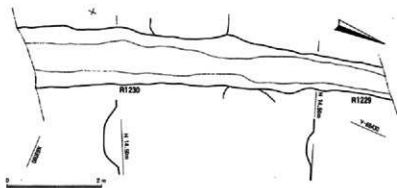
壺1479は、体部上半部で全周の1/2程の資料である。口縁部は、外面に粘土を張りつけて成形している。内面は口縁部直下指押さえ痕が見られるほかは器表が荒れている。外面には、口

溝 791

04-83区に位置する。調査区内で「く」の字状に屈曲している。断面形は浅い皿状を呈すため、平面形状は不明瞭で、不整形形状を呈している。幅は、概ね1.0mを前後し、深さは深い部分で0.2m程の規模の溝である。覆土は粗砂混りの黒褐色土である。

出土遺物 遺物は覆土中から

少量が散漫に出土した。図示できる資料はない。細片の土器を主として刺片類も混じっている。土器は弥生時代中期から後期にかけての資料があるほかに、球状の体部をもった土師器甕、格子目敲き痕を残す須恵器甕体部甕の体部破片も混じって出土している。



第202図 溝870実測図 (1/80)



第203図 遺溝870 (北から)

溝 870

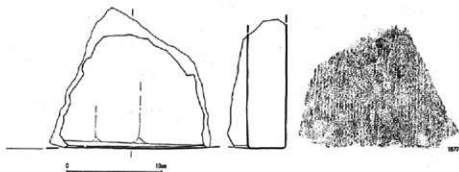
04-92-93区に位置する。調査区内でやや弧状に南方向へ走る溝である。比較的整った平面形を示す。遺存状態の良い南側では断面形が大きく広がる逆台形状を呈し、幅が、1.2m、深さは0.3m程を測る。底面は凹凸がある。

出土遺物 遺物は覆土中から総量でコンテナ1/3程の分量が出土した。殆どが細片の土器資料である。その大半は弥生土器である。後期の資料が顕著である。土師器の存在は不明確である。夜白式土器壺の小破片が出土したほかに刺片等

も混じって出土している。さらに、白磁碗又は皿の体部細片の出土もある。

飯氏6次3地点採集遺物

以上各遺構、遺構出土遺物について報告した。この他に、表土除去中などに多量の遺物を採集した。下に掲げる瓦1557もその一例である。平瓦の破片資料である。両側、後半部を欠いている。厚さは、5.1cm程で、全体に器表の荒れが著しい。上面には板状の圧痕、下面には縄目の敲き調整の痕跡が残されている。胎土には砂粒を多く含み、器表は橙色を呈す。



第204図 飯氏遺跡第6次第3地点採集遺物実測図 (1/4)

5. 飯氏遺跡第6次調査第4地点

1) 飯氏6次第4地点の調査概要

調査区の位置と地形 第4地点は、第3地点の東に接して設けた。第2地点と同様、飯氏遺跡が立地する砂礫台地と、飯氏遺跡と飯氏蓮町遺跡との間を西す谷部を含んだ地形に設定した調査区である。現在の流路は、東の飯氏蓮町遺跡が立地する一段高い段丘の崖線裾を流れている。第3地点から谷へ向かっては、開田に伴う結果なのかもしれないが、緩い傾斜で下りてゆく。

確認調査 調査区の設定に先立ち、確認調査を行った。調査は用地のほぼ中央の線に沿って中央部と、東西の端とに一列のトレンチを設定し、機力により行なった。

結果、中央と東のトレンチでは谷の堆積を確認した。西のトレンチでは、台地端部を確認した。谷底は、現地表面から1.8m程の深さの平坦面で、礫層を基盤としている。この上に黒褐色粘土、赤褐色粘土・暗褐色粘土、人為的な盛上の可能性がある褐色粘質土の順で堆積している。東側2箇所トレンチからは遺物の出土はなかった。

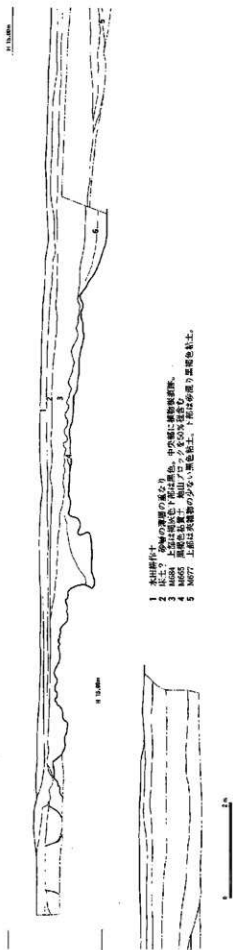
以上の結果を受けて、調査区は西半部に限定して設定した。

調査の概要 以上のような条件となったので、廃土処理の空間を確保することが可能となり、調査区全体の表土を除去し調査に着手した。

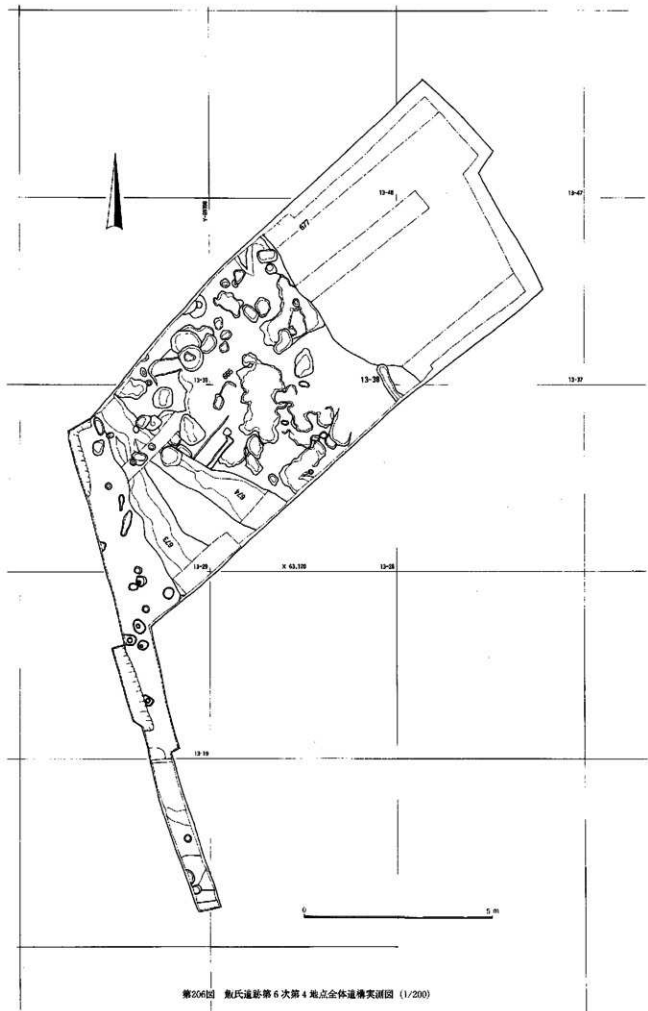
調査地は、全体として1m以上の表土層があったが調査区の中央部で、遺構665を検出調査した。東側1/3の段落ちして谷となる部分では第3次調査地点に続く位置で、その落ち際から多量の土器が出土し、遺構677として調査を行なった。西側1/3の部分は、溝673・674を境に東側とは画されて、小穴、柱穴が分布している。ここでは掘立柱建物の可能性を考えて検討したが、調査区の幅の問題などがあってそれと判断できる遺構は確認できなかった。柱穴とするものも底部近くが残っているのみである。

2) 飯氏6次第4地点の調査成果

以下、各遺構について述べる。



第205図 飯氏遺跡第6次第4地点調査区北壁土層実測図 (1/80)



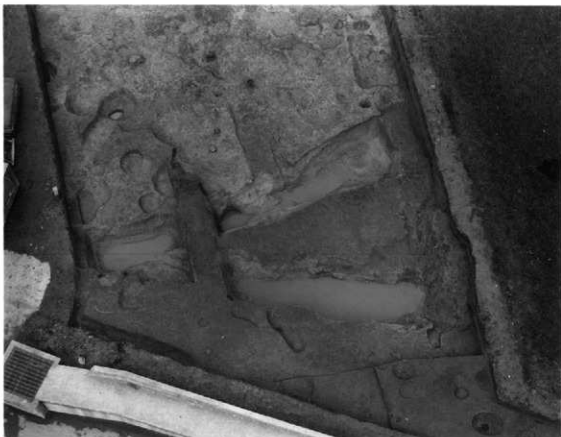
第206図 敷氏遺跡第6次第4地点全体遺構実測図 (1/200)



第207図 飯氏遺跡第6次第4地点全景（西から）



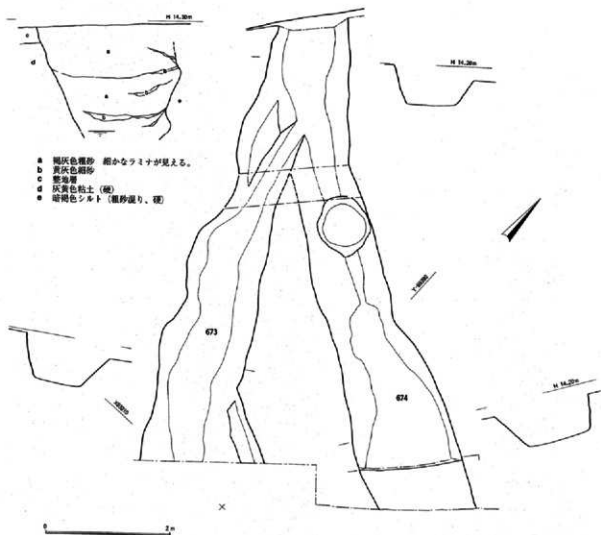
第208図 飯氏遺跡第6次第4地点南端部（北から）



第209回 遺構673-674 (西から)



第210回 遺構665 (西から)



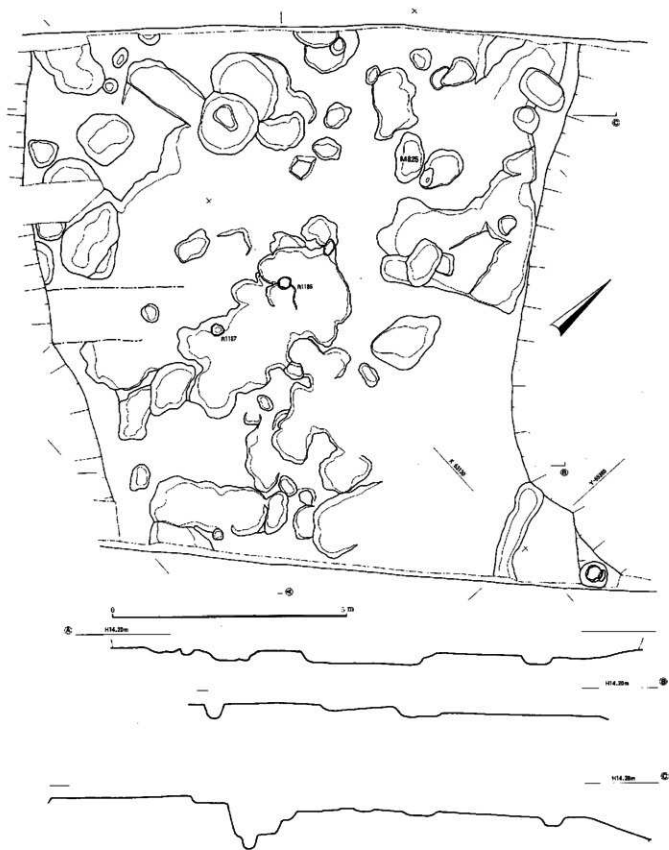
第211図 溝673-674実測図 (1/80)

溝 673・674

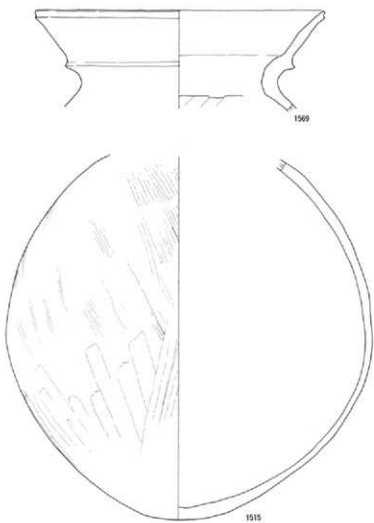
調査区内で交わり、北流する溝である。形状、堆積の状態は、良く似ている。水流により岸が抉れたために不整形な形状を呈す。幅は1.2~2.0m。断面形は逆台形状を呈し深さ0.7~0.8m程である。ともに、粗砂で埋没している。溝674から少量の遺物が出土している。各溝の方向を考えると、隣接する3次調査地点の溝5に溝673が、溝3に溝674がそれぞれ繋がる可能性がある。



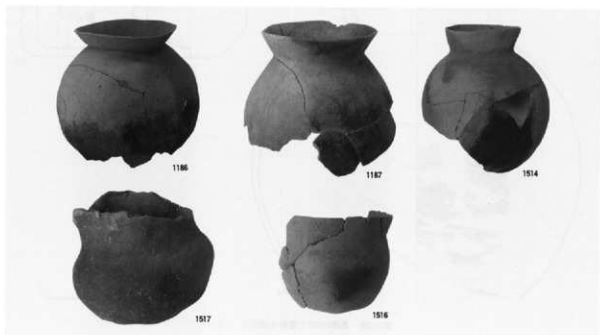
第212図 溝674土層断面 (北から)



第213圖 遺構665米測圖 (1/80)



第215図 遺構665出土遺物実測図2 (1/3)



第216図 遺構665出土遺物

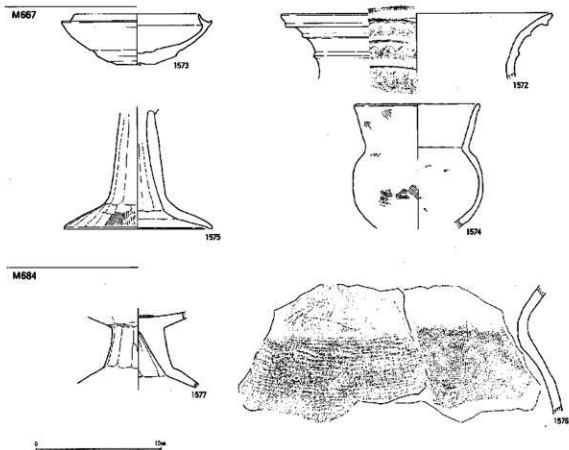


図217 遺構667-684出土遺物実測図 (1/3)

遺構 665

調査区の中央部、13-73・83区に位置する。完掘後の平面形は、不整な小穴、土塊が密集複合したような状態を呈すが、調査中の観察では、少数例を除いて、個別遺構の重複関係という形では捉えにくい状態にある。断面での観察では、掻きあげられた地山土ブロックの間を黒褐色粘質土が埋めているというような状態にある。その中に完形に近い資料も含めて多量の土器が混じっている様な遺物の出土状態を示す。

出土遺物 総量でコンテナ10程の分量が出土した。大破片、完形に近いような資料等も含まれている。土師器資料を主として弥生土器資料が混じっている。須恵器は、混り込みかと思われる細片資料のほかには出土していない。

遺存状態の良好な資料を図示する。

壺(1186・1187・1514)は、いずれも底部を欠く資料である。1186は、内湾気味に開く薄い口縁と、球形の体部をもつ。内面には幅広い篋削り調整が施され口縁部近くにまで及ぶ。外面は全面に刷毛目調整が施される。胎土に砂礫の他に赤褐色の焼土様の粒子を含む。1187は、口頸部が細く括れ、口縁部は反らずに開く。内面の篋削り調整は口縁の屈曲部の位置にまで及ぶ。1514は、球形の体部と細くくびれた口頸部をもつ。内面の篋削り調整は口縁直下に及び、体部下半分の外面には刷毛目調整が残されている。胎土に砂礫を含み器表面は褐色を呈す。高坏1568は、坏部だけの資料である。胎土に砂礫を含み、被熱したものか器表の荒れが著しい。

丸底壺は完形で出土した。大形である。胎土に粗砂を含み、灰黄色を呈す。広口壺1516は、底部

を欠く資料である胎土に粗砂を含み、器表面は灰黄色を呈す。小形の丸底壺1517は、外面の全体に指押さえ痕が残る。器表面は灰黄色を呈す。小形の手捏ね土器1570は壺、1571は甕であろうか。1570は器表面がにぶい橙褐色を呈す。1571は橙褐色を呈す。壺とする資料のうち、1569は、二重口縁の口縁部、1513は頸部以上を欠く下半部資料である。1569は、胎土に粗砂を含み器表はやや灰色味をもつ。1514は胎土には砂礫を含み、器表面が橙褐色を呈す。

遺構 677

14-38区に位置する。谷部への段落ち際に堆積した黒褐色粘土中から遺物が集中出土する。段落ち際の谷底から出土した遺物は弥生土器がまとまった状態での出土であったので、6次2地点の遺構400と同様の上出状態の可能性と、隣接する3次A区の「包含層」の延長上にあるという位置関係からしてその一部である可能性とが考えられた。出土遺物から検討してみると、出土総量はコンテナ8程の分量があるなかで、大半の弥生土器資料に混り、量にして1割程の土師器、須恵器の破片資料が出土している。但し、先行して調査を進めた調査区北壁のトレンチ672からの集中出土資料には土師器等の混入はなく、段落ち部に沿う部分と広く谷の中央部に向かい広がる部分とでは、間を不整合面をもって分離できる可能性も残る。

出土遺物 上述のような出土状態であるなかで、弥生土器は中期前葉から、中期を主とし後期までの資料が出土している。甕の破片資料が大半を占める。6次2地点遺構400出土資料と比べると全体として破片が小さい。土師器は、6世紀代の資料までを含んでいる。須恵器は、甕・壺の体部細片資料である。出土遺物のうち新しい要素を示す遺物を図示する。高坏1577は上下端部を欠く資料である。坏部内底面には放射状の磨き調整がおこなわれ、脚部は内外面を鋭削り調整によっている。甕1576は土師質の土器で、上半部の細片資料である。口縁端部を欠いている。口縁部の内外面に口縁に沿う撫で調整を施すほかは、体部には叩き調整を行なっている。外面に格子目状の工具痕、内面には平行する条線状のあて具痕が残る。胎土に砂礫を含み、器表面は黄褐色を呈す。

遺構 684

遺構677を覆い、谷部の窪みを埋め立てるように谷部に分布する上層の広がりである。谷の中央部で厚さ0.8m程となる。褐灰色を呈す粗砂混りの粘土質シルトである。谷の中央部に近い側では、下位に粘土と砂の互層があり、これに載っている。

出土遺物 表土剥ぎ時と、調査区の壁面清掃中に白磁碗の破片が出土している。ほかに図示するような遺物が出土している。須恵坏1573、甕(1572)、土師器高坏(暗灰黄色1575)、小形丸底の壺(灰色、1574)がある。

III. 飯氏引地遺跡第1次調査

遺跡調査番号	9536	遺跡略号	IJH-1		
調査地地籍	福岡市西区大字飯氏地内	分布地図番号	120		
開発面積	865m ²	調査対象面積	520m ²	調査面積	376m ²
調査期間	1995年11月1日～1996年3月28日				

6. 飯氏遺跡第6次調査第5地点

1) 調査の概要

現状は壇状に造成された畑地となっている。元は山麓の緩い斜面であったことが考えられる。発掘調査は試掘により遺構らしいものを確認した1面の畑地についておこなった。造成による盛土は1m程の厚さがあり、これを除去すると、花崗岩の風化土となる。この面に複雑に削り込まれた不整形な形状をしめす流路を検出した。この形状はすべて、谷川の自然の流下により形成されたものと見える。遺物が、覆土中からさほどの分量ではないが、出土している。この部分を谷688とする。このほかに、別方向へ向かう谷の谷頭分がある。また、西に向いては、耕地の造成時と思われる段落ちがあり、その覆土中からも遺物を出土した。段落ち687とする。

2) 調査の成果

以下、個別に説明する。

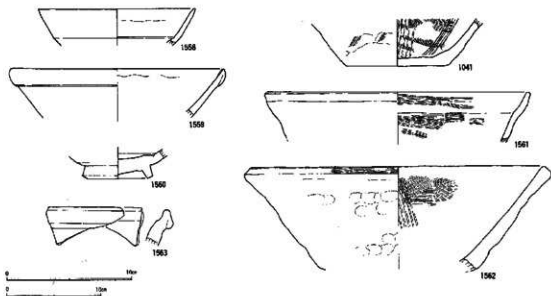
谷 688

上述のことに加え、覆土は、地山の崩落土で全体としては均一である。谷688は、西に向き段落ち687部で広く開く。開口部近くの覆土中位から貝ブロックを検出した。ハイガイの径0.3m程の集積である。

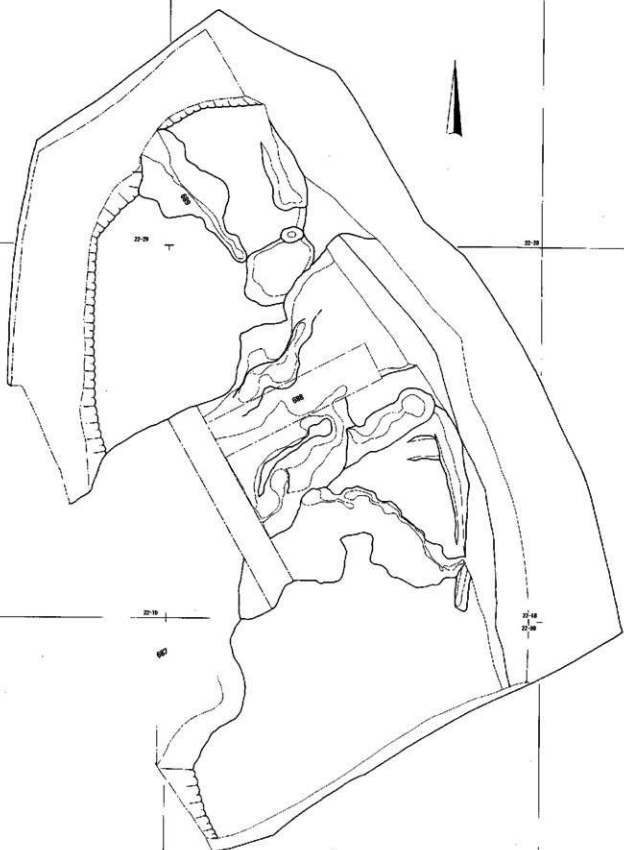
出土遺物 遺物は、覆土中から、疎密をもって出土した。水流による挟れ部分などに比較的集中する傾向も見て取れる。出土遺物の総量は、コンテナ2/3程の分量となる。殆どが、土器の細片ないし小破片の資料である。全体の3/4程は、土師器坏皿の細片資料である。以下に主な出土遺物を掲げる。

1558~560は陶磁器の破片資料である。1558は、白磁皿の小破片である。1559は、玉縁をもつ白磁碗小破片である。1560は同じく、高台付の底部資料である。

1563は、須恵質の甕口縁部細片である。口唇部は外面で折り返している。土製の大型の鉢類は比較的顕著に出土した。1041は播鉢底部、1562は、おなじく底部のを欠いている資料である。ともに、内面の掻き目の間隔が大きい。1561は土製鍋である。口縁部外面に煤が厚く付着する。



第218図 飯氏引地遺跡第1次第1地点出土遺物実測図 (1/3, 1/4)



第219图 板氏引地遗址第1次第1地点全体遺構実測图 (1/200)



第220図 飯氏引地道跡第1次第1地点全景（東から）



第221図 飯氏引地道跡第1次第1地点全景（北から）

7. 飯氏遺跡第6次第6地点

1) 調査の概要

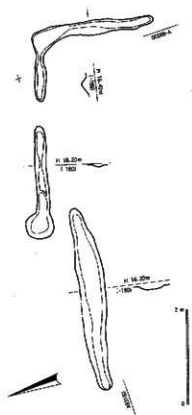
調査に先立ち、道方向に沿ったトレンチにより、確認調査をおこなった。結果として、現地表下約1mの1で、小穴等の遺構、包含層を検出し、崖線沿いの部分を調査区として設定した。広さ159平米程の調査となった。調査面は平坦で、北東部分には包含層が残っている。この層の下には遺構等は確認できなかった。以下に個別を報告する。

2) 調査の成果

溝737・754

調査区中央を、南西から北西方向に長駆線状に走る。断面は浅い皿状を呈し、754の屈曲して南側の覆土には焼土が含まれており、何らかの設備に伴うものとみられるが、詳細は踏面である。飯氏遺跡第3次調査で各様の溝が検出調査されているが、それと同様なものかもしれない。

出土遺物 共に極少量が覆土中から出土している。弥生土器細片資料のほか、溝754からは、須恵器が出土している。

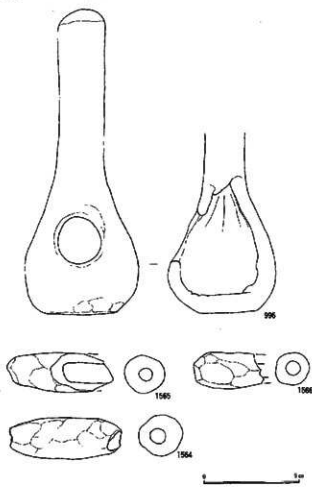


第222回 遺構754・737遺構実測図 (1/60)

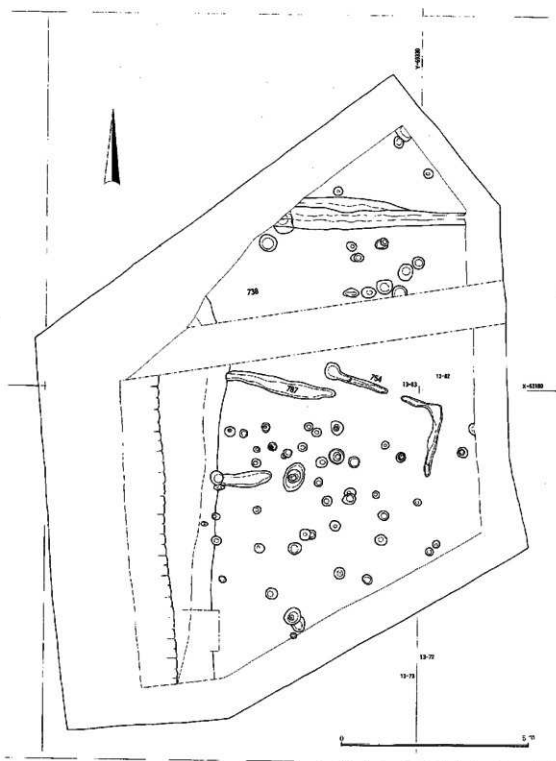
包含層 738

調査区北西部に広がる。段丘末端に向かい堆積しているもののように見える。黒褐色で、強い粘土質を呈する。

出土遺物 遺物はコンテナ1/4程が出土した。弥生土器が殆どであるが、土師器坏皿、青磁の細片なども出土した。996は、フラスコ状の土器で、体部の一側面に開口している。底面は平底状を呈す。1565、1566、1564は何れも土錘出ある。手捏ねによっている。



第223回 飯氏引地遺跡第1次第2地点出土遺物実測図 (1/3, 1/2)



第24图 瓶氏引地遺跡第1次第2地点全体遺構実測図 (1/200)



第225図 熊氏引地道跡第1次第2地点全景（東から）



第226図 熊氏引地道跡第1次第2地点全景（北から）

IV. 徳永A遺跡第4次調査

遺跡調査番号	9552			遺跡略号	TKA4
調査地地籍	福岡市西区大字徳永宇松尾678-1、-2			分布地図番号	周船寺120
開発面積	300m ²	調査対象面積	300m ²	調査面積	300m ²
調査期間	1996年2月5日～1996年3月28日				

1 遺跡の立地と環境

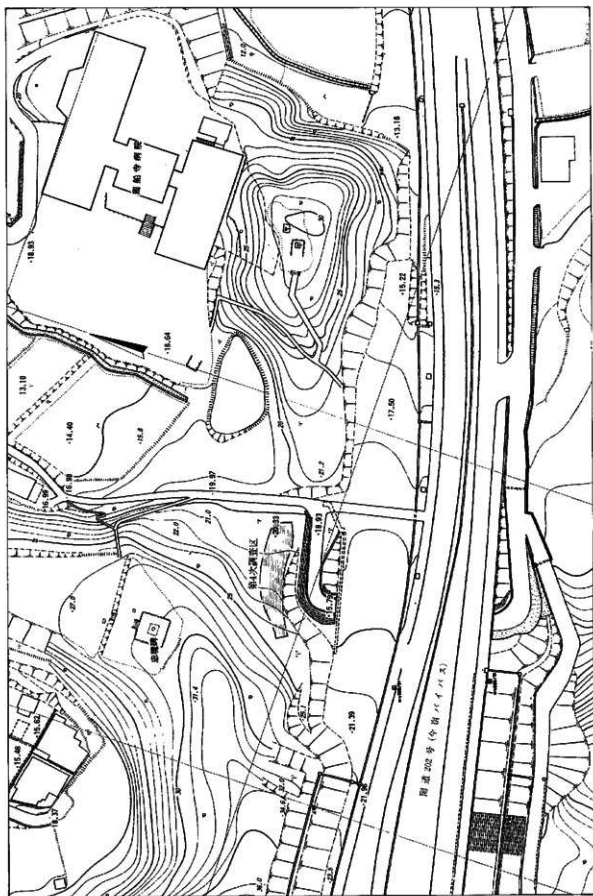
徳永A遺跡が存在する今宿平野は、早良平野と糸島平野に挟まれた小平野で、弥生時代以降の遺跡が多く分布している。弥生時代の遺跡としては石斧を製作し北部九州全体に流通させた今山遺跡、平成9年の調査で前期の甕棺が出土した鯉川河口の砂丘上に位置する今宿遺跡、小銅鐸等の青銅製品や中部瀬戸内系の土器が出土した今宿五郎江遺跡がある。また、遺構は確認されていないものの、青木遺跡周辺では弥生前期の土器が分布しており、前期の水田や集落の存在が予想される。古墳時代には丘陵の先端に12基の前方後円墳が築造され、後期には山裾に300基を越える群集墳が造られている。平野中央の女原遺跡第3次調査では古墳時代の土坑から朝鮮半島系の陶質土器・軟質土器が多く出土し、また鶴崎古墳などの日本最古式の横穴式石室が存在するなど、大陸との繋がりが密な地域といえる。古代から中世にかけては平野の北側の今津湾に大陸からの貿易船が数多く入港し、博多津に対し今津の名を残している。平野の西側の高祖山から北に延びる丘陵には、狭い谷が数多く入り込み複雑な地形を作りだしており、尾根の先端部分には多くの遺跡が存在する。徳永遺跡は最も北に突出する丘陵の先端部分に位置し、古墳時代には湾に突き出す小さな岬状であったと考えられる。尾根上にはこの地域の首長墓である九隈山古墳や三角緑神獣鏡が出土した若八幡古墳、山の鼻1・2号墳などの前方後円墳が点在している。遺跡は丘陵先端全体に分布しているが、集落は狭い谷中に入り込んでいる。

第4次調査地点は幅40m、奥行き200mの谷の最奥に位置する。調査区の南側は一般国道202号線バイパス建設に伴い、平成元年1月16日から3月31日まで調査を行った徳永遺跡第2次調査地点に接する。(福岡市埋蔵文化財調査報告書第306集『徳永遺跡(Ⅱ)』)。

第4次調査区は標高22.8~18.0mに位置し、南側に傾斜する緩やかな斜面上に集落を形成している。竪穴式住居と掘立柱建物はほぼ同じ等高線上に並んでおり、狭い場所に多くの遺構が切り合っている。

2 これまでの調査

徳永A遺跡はこれまで3次の調査が行われている。第1次・2次調査は202号線バイパス道路の建設に伴う調査である。1次調査は当調査地点の東側に位置し、丘陵に挟まれた谷頭の調査である。遺構は確認されなかったが、古代から近世の包含層が認められた。特に古代の包含層からは越州窯青磁を中心として邢州窯系白磁碗、長沙窯系褐釉水注、緑釉陶器が出土している。報告者は初期輸入陶磁器が鴻臚館等公的的性格をもつ遺跡から出土する傾向があるため、8世紀から9世紀にかけて船舶の修理や管理にあたった役所の主船司関連施設である可能性を示唆している。2次調査はⅢ区とⅣ区の2地点に分かれている。Ⅲ区は第4次調査区の南側に隣接しており、6世紀後半から7世紀前半の集落が認められ、掘立柱3棟、住居跡7~8基、土坑が検出されている。そのうち溝からは遺物が多く出土している。遺物は須恵器の坏・甕が多いが、その中で赤焼けの甕と甔が出土している。Ⅳ区は尾根を挟む一つ西側の谷中の調査である。北側に傾斜する斜面上で古墳時代後期の遺構と8世紀代の包含層が確認された。古墳時代の祭祀土坑からは赤焼け土器群が出土している。3次調査は九州電力の送電線鉄塔の建て替えに伴う仮鉄塔の建設の事前調査である。丘陵の最先端部に現状では北側に緩やかに傾斜する。南側は直下で地山に達したが、北端は2m程低くなっており、埋土中に4面の生活面を確認した。遺構出土の遺物はほとんどない。各層から出土した遺物の時期は8~9世紀と時期幅は短い。南側が一段高くなっており、遺物はそこからの流れ込みみである可能性が高い。湾に面した丘陵周辺のテラス状の狭い平地に8~9世紀の遺構が点在するものと思われるが、まだ調査事例が少なく、全体を把握するに至らない。今後の調査が期待される。



第228图 调查区位置图(1/1,000)

3 調査の概要

調査地点は狭い谷の奥部に東に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。調査区の標高は西側で22.8m、東側で18.0mを測る。GLから遺構面までの深さは西側で120cm、東側では130cmである。調査区東端の土層では水が溜まった状況を呈していたが、それから一番低い位置の建物までの高低差は1m程である。東西に細長い調査区であったが、等高線上に並ぶ竪穴式住居と掘立柱建物群、それと西端では炉と整地層を確認した。竪穴式住居の時期は6世紀後半と思われる。住居が切り合っているため2時期以上継続しているが、それでも短期間であったと思われる。掘立柱建物は6世紀後半の遺物や青磁片が出土しているものの、主なものは2次調査との関連から7世紀前半と考えられる。

4 遺構と遺物

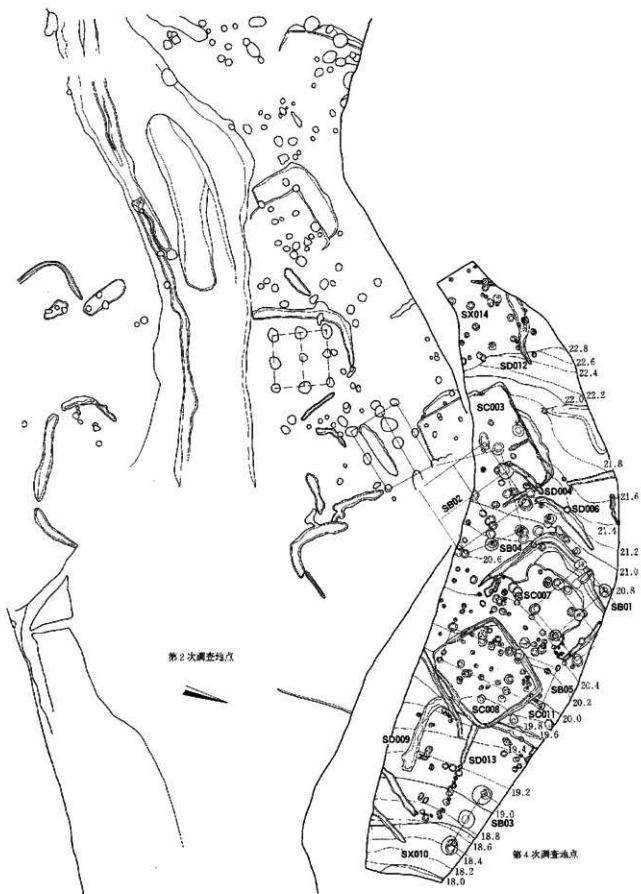
1) 竪穴式住居

調査区の中央部で4軒確認した。

SC003 (第230図) 調査区の西側に位置し、南側半分は2次調査Ⅲ区のSC01にあたる。SB02・SD004に切られる。主軸をN-40°-Eにとる。東側の角が削平をうけ消失しているが、平面形は長方形を呈し、南北長が598cm、東西が約490cmを測る。床面からの残存高は最大53cmを測る。主柱穴は明確ではないが、4本と思われ径28-34cm、深さ10cmを測る。柱痕跡はみられない。柱間隔は芯々で232cmを測る。壁に沿って幅8-16cmの溝が巡る。北西壁中央の床面上に土師器高坏の坏部が伏せ置きしてあり、周囲には焼土ブロック・炭化物・粘土塊が散乱している。竈の残骸と思われる。北西壁中央から直角に伸びる長さ123cmの溝は、竈に関連するものであろうか。底のレベルは整溝より低い。堀方は西側が14cmほど高くなっているため、東側に貼床があるものと思われたが、粘土塊や高坏が床面直上から出土しており、また土層からも貼床は確認されていない。出土遺物(第235図001-003) 001・002は土師器甕である。001は復元口径15.6cmを測る。調整は風化のため不明瞭であるが、胴部内面にヘラ削り状の痕跡がみられる。全体的に赤褐色を呈し、1mmほどの砂粒を多量に含む。焼成は不良である。002は復元口径12.7cmを測る。胴部は暗橙色で口縁は黒色を呈す。調整は口縁は両面とも横ナデを施す。胴部は指による成形のみで、ナデ等は施さない。胎土は1mmほどの白色砂を多量に含む。003は土師器の高坏で床面直上で出土した。復元口径16.8cmを測る。調整は不明である。全体に明褐色を呈す。1mmほどの砂を多量に含む。

SC007 (第231図) 調査区の中央部、SC003の北東側に隣接する。SB01に切られる。主軸はN-53°-WでSC003とほぼ同一方向である。削平により東側を欠くが、柱穴の位置からほぼ隅丸方形を呈する。南北は608cm、床面からの残存高は29cmを測る。北西壁中央を20cmほど外にふくらませ、竈を構築している。竈本体や粘土は残存していなかったが、壁から80cm離れて焼土面を確認している。火床は床面より7cm高い。火床と壁の間には楕円形の掘り込みがあり、壁が一部赤変していた。壁に沿って幅20-35cm、深さ9cmの周溝を巡らしているが、それを埋めて竈を構築している。主柱穴は4本柱で径39-53cm、深さ23-36cmを測る。柱痕跡はその中の1本にみられ径18cmを測る。柱間隔は南北で195cm、東西300cmを測る。出土遺物(第235図) 004は土師器甕である。暗褐色で白色砂を多量に含む。その他に須恵器坏片が出土している。焼成良好で、白色砂を多く含む。口縁は残存していない。

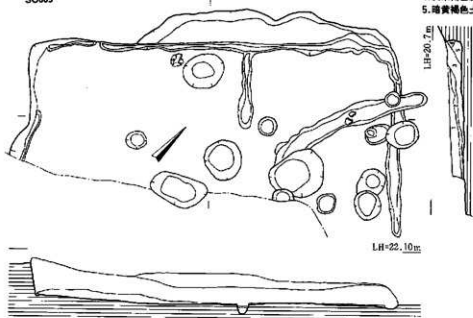
SC008 (第230図) 調査区中央部のSC007の東に位置する。SD009を切る。長軸はN-37°-Eにとり、前述した2つとほぼ同一方向である。平面はやや隅丸の長方形を呈し、東西が544cm、南北481cmを測る。床面からの残存高は最大23cmを測る。周溝は南隅を除いて全周し幅は24-39cm、深さ2-15cmを測る。



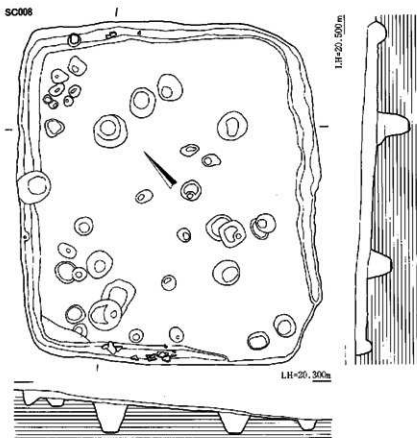
第229回 調査区全体図(1/200)

1. 暗褐色土 白色砂多く含む
2. 黒色土
3. 褐色土
4. 灰茶褐色土 炭化物・焼土ブロック含む
5. 暗黄褐色土

SC003



SC006



0 2m

第230図 SC003・SC006実測図(1/60)

北側と南西側では土器が多く出土した。また北東側と西側では焼土ブロックを多く含んでおり、竈の残骸と思われる。火床は検出できなかった。主柱穴は4本柱でいずれも円形を呈す。径は42～53cm、深さ29～48cmを測る。柱痕跡はみられない。柱間隔は長軸で220cm、短軸で204cmを測る。東隅から溝が東へ伸びており、排水用の溝と思われる。出土遺物(第235図005～008)。005から008は土師器甕である。005・006は壁溝から出土した。005は土師器甕である。外面暗赤褐色、内面黒褐色を呈す。006は復元口径9.6cmを測る。外面は暗褐色、内面は黒褐色を呈す。器壁は肉厚で頸部で9mmを測る。1mmほどの白色砂を含み、調整は磨滅のため不明である。007は壁溝から出土した。復元口径16.9cmを測る。褐色で外面胴部に黒斑がみられる。調整は外面は不明であるが内面は口縁から頸部がナデ、胴部は縦と斜め方向の削りである。008は復元口径15.9cmを測る。外面は口縁から胴部上半までは煤が付着している。口縁は緩いS字状であるが内面頸部には鋭い稜がつく。調整は磨滅のため不明である。

SC011(第231図) SC008の北側に位置し、SC008とSD009に切られる。北側は調査区外に延びる。東側は削平されており、西側一部のみの残存のため、平面形や規模は不明である。床面からの残存高は最大で20cmを測る。焼土・粘土・炭化物は確認できなかった。周溝は南側のSC008の周溝に切られていたが僅かに残存していた。出土遺物には須恵器坏蓋と土師器甕片がある。坏蓋は肉厚で復元口径13.6cmを測る。胎土は砂を含まず精良で焼成も良好である。

2) 掘立柱建物

SB01(第232図) 調査区の中央北寄りに位置し、SC007を切っている。北側が調査区外に延びるため、全容は不明であるが、現状で2間×2間の総柱建物である。主軸方向をN-28°-Eにとり、他の建物とはほぼ同一である。柱穴は円形を呈し、径60～70cm、深さ40～56cmを測る。柱痕跡は明確で、そのうち2個は木質が僅かに残存していた。梁間は全長3.6mを測る。桁行きも全長約3.6mを測りほぼ正方形を呈す。柱間は芯々で1.7～1.9mを測る。柱穴から須恵器坏片と土師器甕片が出土している。坏片は6世紀後半であるが、SC008出土分と接合できるため、同時期に埋没している。

SB02(第232図) 調査区の中央に位置し、南側半分は2次調査区に伸びる。SC003を切る。平面形は2間×2間の総柱建物で、主軸をN-33.5°-Eにとる。南東側中央の柱穴は存在しない。梁間は全長4.5mを測る。桁行きは全長3.9mで柱間は1.8～2.3mを測る。柱穴は円形もしくは隅丸方形を呈し、径40～70cm、深さ22～46cmを測る。柱穴から土師器甕片・鉄滓小片・青磁小皿片が出土した。

SB03(第232図) 調査区の北東側に位置する。北側が調査区外に延びており、全容は不明である。柱穴は円形を呈し、径1m前後、深さ39～63cmを測る。SB01-02とは掘り方、覆土が異なり、時期的に異なる可能性がある。東端柱穴の掘込みは谷の埋没後である。出土遺物に鉄滓と黒曜石片がある。

SB04(第233図) 調査区の東側に位置する。SC008に切られる。平面形は1間×3間で長軸はほぼ南北方向を向く。南北全長6.34m、東西は2.28mを測る。柱穴はほぼ円形で径32～45cm、深さ8～39cmを測る。東側にあるSD009と軸が同一で、関連があると思われる。

SB05(第233図) 南半分は調査区外に延びる。SC003を切りSB01に切られる。平面形は2間×2間の掘立柱建物で長軸はN-49°-Eにとる。梁間は全長4.8m、桁行きは3.2mを測る。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し径42～78cm、深さ18～39cmを測る。北側の柱穴には掘り拳大の根石がみられる。

3) 溝

SD004(第229図) 調査区中央に位置する。SC003を切りSB01に切られる。長さ256cm、幅32cm、深さ17cmを測る。覆土は褐色で地山ブロックを含む。断面逆台形。竈穴式住居の壁溝と思われる。

SD006(第229図) SD004の北側に位置する。SB01に切られる。南側で90度折れており全長438cm、幅55cmを測る。覆土は褐色である。004の北側の延長上にあり、同じ溝の可能性も考えられる。須恵

SB01



- SP0010
- 1 灰褐色粉质土
 - 2 暗灰色粉质土
 - 3 灰褐色土
 - 4 灰褐色土
 - 5 灰褐色土
 - 6 灰褐色土
 - 7 灰褐色土
 - 8 灰褐色土

- SP0016
- 1 灰褐色土
 - 2 暗灰色粉质土
 - 3 灰褐色土
 - 4 灰褐色粉质土



- SP0005
- 1 灰褐色土
 - 2 暗灰色粉质土
 - 3 灰褐色土
 - 4 灰褐色土
 - 5 灰褐色土
 - 6 暗灰色粉质土
 - 7 暗灰色粉质土
 - 8 暗灰色粉质土

- SP0012
- 1 灰褐色土
 - 2 暗灰色粉质土

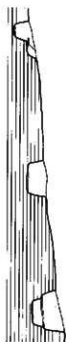


- SP0011
- 1 暗灰色粉质土
 - 2 暗灰色粉质土
 - 3 暗灰色粉质土

- SP0012
- 1 暗灰色粉质土
 - 2 暗灰色粉质土
 - 3 暗灰色粉质土

- SP0013
- 1 暗灰色粉质土
 - 2 暗灰色粉质土
 - 3 暗灰色粉质土
 - 4 暗灰色粉质土

SB02



SB03

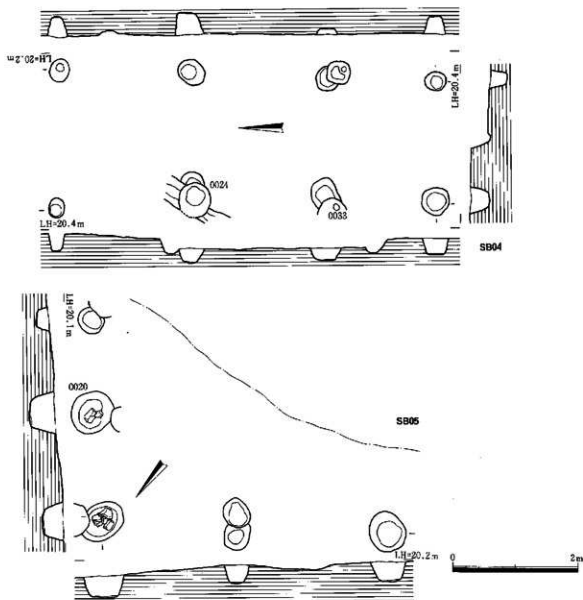


- SB03
- 1 灰褐色土
 - 2 暗灰色粉质土
 - 3 暗灰色粉质土
 - 4 暗灰色粉质土
 - 5 暗灰色粉质土
 - 6 暗灰色粉质土

- SP0013
- 1 暗灰色粉质土
 - 2 暗灰色粉质土



第232图 邵文柱建筑物史测图1 (1/60)



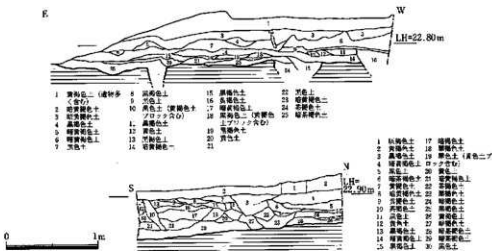
第233図 直立柱建物実測図2 (1/60)

器小片と土師器壺小片が出土している。

SD009 (第229図) 調査区の東側に位置する。SC008に切られ、SC011を切る。調査区の北側に延びており幅58cm、深さ35cmを測る。断面は半円形を呈す。SC008の南側に東に直角に曲がっており、自然の流路としては不自然であるが、幅や方向から壁溝とは考えにくい。覆土は黒色を呈す。覆土中から6世紀後半の須恵器が出土した。出土遺物(第235図)。009は土師器壺である。復元口径15.8cmを測る。胎土は1-2mmの白色砂を多量に含む。焼成不良である。器壁は全体的に肉厚である。

SD012 (第229図) 調査区の西端に位置する。調査区の西側に延びており幅56cm、深さ4-6cmを測る。覆土は黒褐色である。出土遺物には須恵器大壺片と土師器取手がある。

SD013 (第229図) 調査区の東側に位置する。SC008の壁溝と繋がっており、排水用の溝と思われる。幅38cm、深さ6cmを測る。出土遺物には土師器坏片がある。

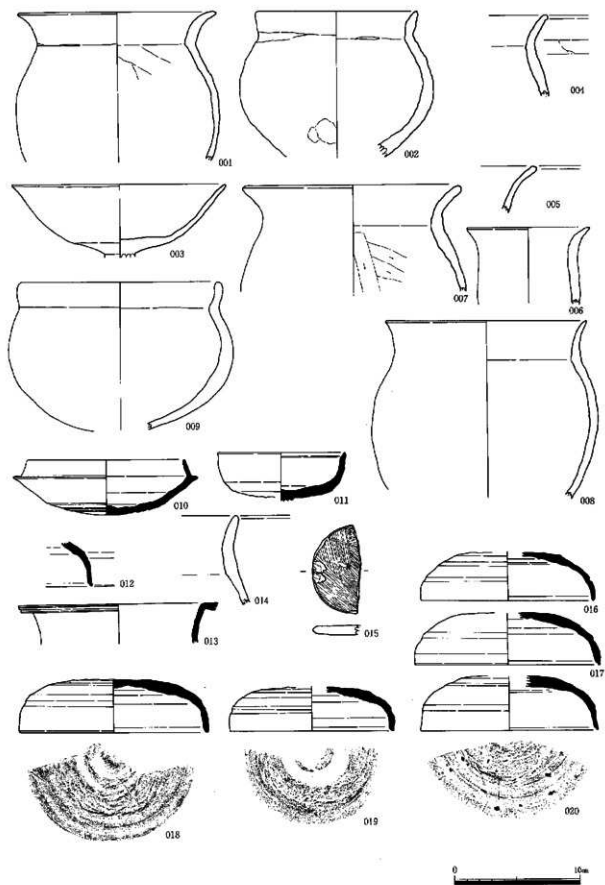


第234図 SX014上層実測区(1/40)

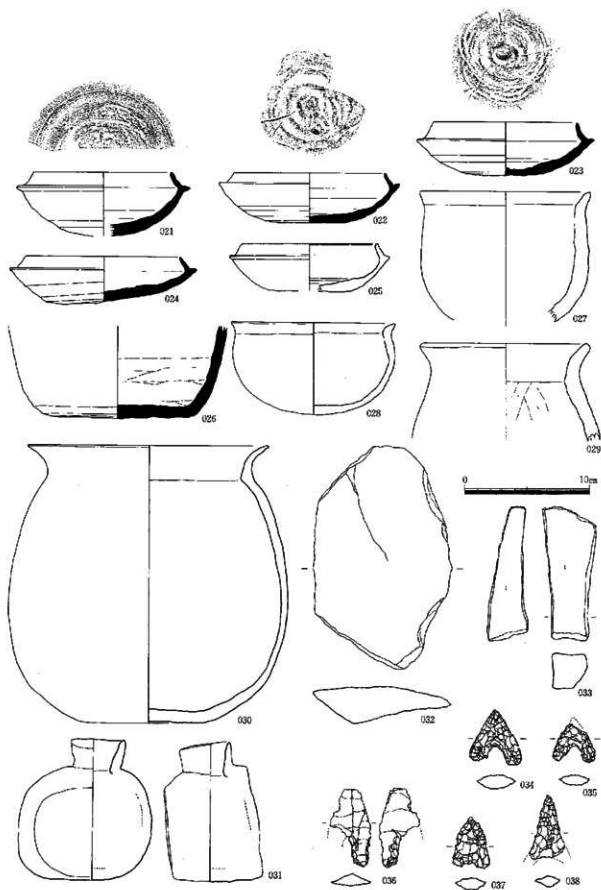
4) その他の遺構と遺物

SX010 (第229図) 調査区の東端に位置する。南北に延びる谷である。覆土は黒色の粘質土で、間に白色砂の層を一層挟んでいる。溜め池等であった可能性も考えられる。覆土中から6世紀代の土師器・須恵器が多く出土した。須恵器は調査区西端のSX014と接合できたものが多い。出土遺物(第235図010~016)。010は須恵器坏である。復元口径12.4cm、器高4.4cmを測る。外面は暗灰色である。011は須恵器無蓋高坏である。復元口径10cmを測る。外面は灰かぶりである。焼成良好。012は須恵器坏蓋である。外面暗灰色で胎土は精良、焼成は良好である。013は須恵器壺口縁、復元口径は16.1cmを測る。014は土師器甕である。橙白色で白色砂を多量に含む。口径は27cm前後である。015は滑石製の有孔円盤である。径3.5cm、厚さ3.5mmを測る。穴を2つ穿孔している。

SX014 (第234図) 調査区の西端に位置する。斜面を平らに削平し、柱穴と溝を掘り込んでいる。その後、黒色土と黄褐色粘質土を交互に積み、整地を行っている。盛土の中間でかなり堅く焼けた焼土面を検出した。祭祀関係の遺構であろうか。最上層にはかなり厚く暗黄褐色粘質土が堆積しており、最初は地山との区別がつかなかった。盛土全体、特に最上層の暗黄褐色粘質土層から土器が多く出土している。遺物は整地時に周囲の遺構の土器(祭祀土坑か)が混じったものと考えられる。出土遺物(第235・236図016~031)。016~020は須恵器坏蓋である。016は復元口径13.7cm、器高4.8cmを測る。青灰色を呈す。胎土は精良で細かな白色砂を僅かに含む。調整は外面天井はヘラ削り、その他はナデを施すがいずれも丁寧である。内面天井にタタキの当て具痕が僅かにみられる。017は復元口径14.6cm、器高約4.2cmを測る。両面とも茶褐色を呈す。胎土は0.5~2mmの白色砂を多量に含んでいる。内面天井部にタタキの当て具痕が僅かにみられる。018は復元口径14.8cm、器高4.4cmを測る。内外面ともに青灰色を呈し、1mm前後の白色砂を多量に含む。内面の天井部にタタキの当て具痕がみられる。019は復元口径12.9cm、器高3.45cmを測る。灰色を呈し、白色砂を多量に含む。調整は全体的に粗い。内面天井部にタタキの当て具痕がみられる。020は復元口径14.1cm、器高4.5cmを測る。内外面とも青灰色を呈す。胎土は精良で砂をほとんど含まない。調整もナデ・ヘラ削りともに丁寧に施されている。内面天井部にタタキの当て具痕が僅かにみられる。021~025は須恵器坏身である。021は復元口径10.8cm、器高5.0cmを測る。外面黒褐色、内面灰白色を呈す。胎土は粗めで白色砂を多く含む。調整は内面のナデは丁寧であるが外面は雑である。内面底部にタタキの痕跡がみられる。タタキの上面か



第235图 遗物実測图1 (1/3、015(4:1/1))



第236区 遺物実測図2 (1/3、032・033122/3、034-03814:1)

ら軽くナデを施す。022は復元口径12.0cm、器高3.9cmを測る。外面は暗灰褐色、内面は青灰色を呈す。023は口径11.6cm、器高4.2cmを測る。白色砂を僅かに含むものの、胎土は細かい。調整は内面底部に当て具痕が残る他は丁寧にナデを施している。024は復元口径12.1cm、器高約3.8cmを測る。外面胴部はやや灰を被った黒褐色、外面口縁と内面は青灰色で、蓋をして逆さまの状態で作成されている。底に別の土器を乗せて焼成しており、他の土器片が付着しており、その重みで器形が変形している。胎土は粗めで1～3mmの白色砂を多量に含む。焼成は不良。口縁は短く内傾している。内面底部にタタキの当て具痕が僅かにみられる。025は土師器の坏である。復元口径10.8cm、器高3.8cmを測る。胎土は白色砂を多量に含む、焼成は不良である。026は須恵質の壺である。底径10.6cmを測る。外底部を指オサエ、底部と胴の境目に回転ヘラ削りを施している以外はナデ調整である。027は土師器甕である。復元口径13.6cmを測る。橙色で胎土に白色砂を多く含む。028は土師器鉢である。復元口径13.1cm、器高7.3cmを測る。両面とも底部を除いて煤が付着している。029・030は土師器甕である。029は復元口径13.2cmを測る。内面胴部に縦方向のケズリを施している。030は復元口径19.0cm、器高22cmを測る。焼成は弱い。内面に縦方向のケズリが見られる。031は土師器提瓶である。口縁が僅かに欠けている他は完形品である。焼成、調整ともに不良である。口径4.2cm、器高11.1cm。最大幅10.6cmを測る。

石器（第236図） 032は打製石斧である。安山岩製で幅10.8cm、長さ17.6cm、重さ773.2gを測る。片側に稜を持ち先端に粗い加工を行っている。033は砥石である。蛇文岩製で長さ10.6cm、幅3.7cm、厚さ3.0cmを測る。034～038は黒曜石製の石鏃である。調査区内では縄文時代の遺構はみつからない。これらの遺物は古墳時代の住居や溝から出土している。034は先端を僅かに欠く。長さ2.2cm、幅2.1cm、重さ1.38gを測る。035は先端を欠く。推定長1.8cm、幅1.75cm、重さ0.62gを測る。036は切片鏃で基部にのみ加工を施している。037は五角形で調整は粗い。気泡を多く含む、白濁している。長さ2.05cm、幅1.45cm、重さ1.1gを測る。038は基部を欠く。現状で長さ2.5cmを測る。

5 小結

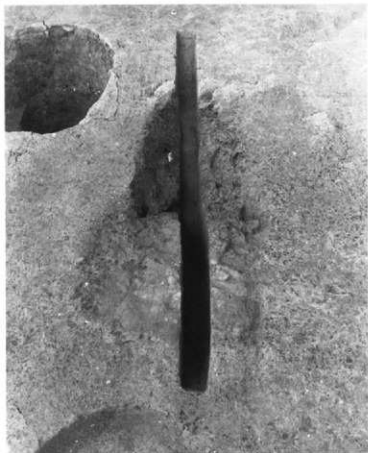
竪穴式住居4軒と住居の厨溝の可能性を持つもの2条、掘立柱建物5棟、溝数条を確認した。古墳時代から古代の集落である。西側の整地層は6世紀代の遺物を多く含むものの、整地時に祭祀土坑の遺物が混じった可能性が強く、年代は降る可能性が高い。竪穴式住居と掘立柱建物は掘立柱建物が竪穴式住居を切っているが、SB01とSC008は出土遺物が接合でき、ほぼ同時期に埋没したと思われる。またSB02からは12世紀以降の青磁片が出土しており、混じり込みでなければ中世に一時集落が営まれた可能性も考えられる。



第237図

1 調査区全体図 (南東から)

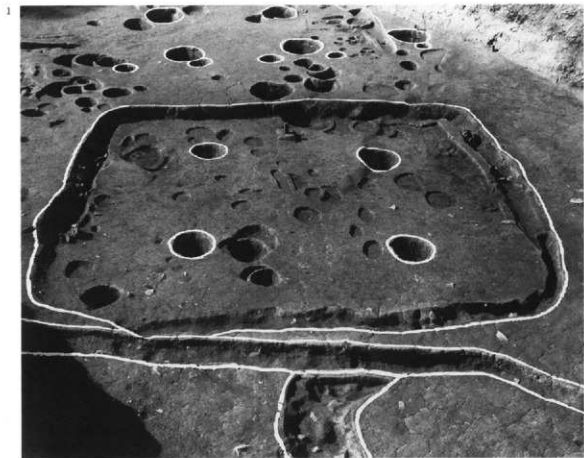
2 SC003 (北東から)



第238回

1 SC007 (東から)

2 SC007竪 (南東から)



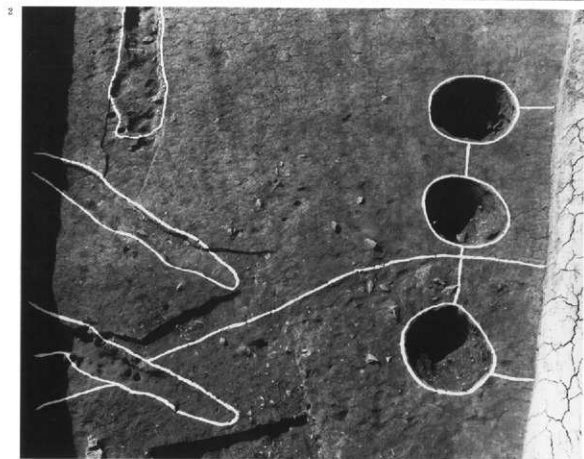
第236回

1 SC008 (南東から)
2 SC011 (東から)



第240回

- 1 SB61 (東中6)
- 2 SB61 (東中6)



第241図

1 SH02 (北東から)

2 SH03 (東から)



第242図

1 SX014土層 (北から)

2 SX014土層 (東から)

V. 青木遺跡第3次調査

遺跡調査番号	9642	遺跡略号	AOK3		
調査地地籍	福岡市西区今宿青木136-6、-13、-14	分布地図番号	今宿112		
開発面積	515m ²	調査対象面積	515m ²	調査面積	293m ²
調査期間	1996年9月26日～1996年10月25日				

1 調査の組織

調査組織 建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

調査主体 福岡市教育委員会

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

埋蔵文化財課第1係長 横山邦嗣(前) 二宮忠司(現)

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 小森彰

試掘担当 埋蔵文化財課第1係 杉山富雄

調査担当 埋蔵文化財課第1係 屋山洋

作業員 柴藤裕志 鶴田善治 楢崎耕助 有吉貞江 大童陽子 黄金丸ミネ子 坂口和子

坂口加代子 柴田シヅノ 柴田勝子 末松タツエ 末松美佐子 楢宏子 土斐崎初栄 鯨早津紀

薫ツギノ 徳重コマキ 徳永千鶴子 西田マキエ 友池富美恵 原幸子 平井和子 深見住子

堀田昭 真鍋キミエ 宮原邦江

2 遺跡の立地と環境

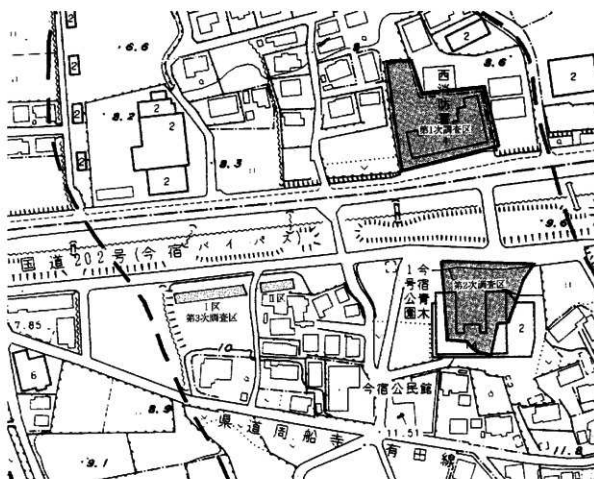
青木遺跡は今宿平野の東側を流れる七寺川の左岸中流に位置する。今宿平野は古くは今山から長垂山に延びる砂丘の後背湿地が広がっていたと思われる、耕作可耕地は僅かであったと思われる。しかしこの平野に突き出る丘陵の先端には12基の前方後円墳が分布しており、その中には鶴崎古墳や丸隼山古墳のように日本最古式の横穴式石室を持つ首長墓が存在する。また丘陵部の尾根上には多くの群集墳が分布している。丘陵と平野の境目には堀ノ内遺跡などの古墳時代や中世の集落が点在する。また新開には初期須恵器の窯が報告されている。平野中央部の低台地上には弥生と中世の集落が存在する。特に今宿五郎江遺跡は小銅鐸等の銅製品や多くの木製品が出土しており、弥生時代の拠点集落の一つであると考えられる。今回調査した青木遺跡は東西約40m、南北100mの低台地上に分布している。調査は台地の北端部で2次にわたる調査が行われており、弥生時代中期～後期の集落と13世紀前後の掘立柱建物群を確認している。台地は南側が幅広く、北に向かって狭くなるため集落は南側が中心であると思われるが古い集落で低層住宅が建ち込んでいるため、調査例はない。

3 調査の概要

今回の3次調査は青木遺跡の台地の北西端に位置する。元々は北に緩やかに傾斜していたのが、耕地の造成によって削平されており、遺構の遺存状況は悪い。今回の調査は国道202号線の拡幅工事に伴うものであり、試掘調査を行い遺構を確認した東西64mの範囲で本調査を行った。調査区の中央を南北の道が通っており、それから西をⅠ区、東側をⅡ区とした。Ⅰ区は西側に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。遺構は暗褐色粘質土の上面で検出したが、GLからの深さは西端で45cm、東側で30cmを測る。東半分は削平が著しく遺構は殆ど見られなかったが、西側の台地の落ち際で掘立柱建物を3棟、土坑2基、調査区の南側に沿う溝を3条検出した。時期はいずれも中世と思われる。建物は3棟とも溝と方位を同じくしており、同一の時期と思われる。東側のⅡ区はⅠ区とは2mほどの距離にも関わらず、暗褐色粘質土上面が1mほど低い。削平をうけ、遺構が消滅している。試掘調査の結果では2次調査区との間に狭い谷が確認されている。



0625 大塚遺跡
0627 谷遺跡
0628 青木遺跡
0630 新開古墳群F
0871 今宿大塚



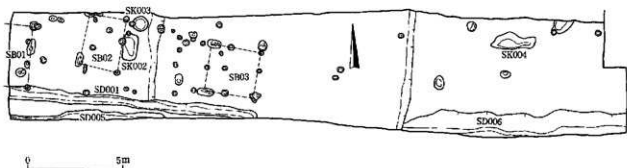
第243図 調査区周辺位置図 (1/2000・1/8000)

4 遺構と遺物

1) 掘立柱建物 調査区西側で3棟検出した。

SB01 (第245図) 調査区の西端に位置する。長軸をN-6°-Eにとる。西側は調査区外にのびる。1間×2間もしくは3間と思われる。梁間は330cmを測る。柱穴は円形もしくは楕円形で、径35~94cm、深さ19~45cmを測る。遺物は出土していない。

SB02 (第245図) SB01の東側に位置する。長軸をN-9°-Eにとる。1間×2間で梁間288cm、桁



第244図 調査区全体図(1/200)

行き210cmを測る。柱穴は円形と楕円形で径31~78cm、深さ9~35cmを測る。遺物なし。

SB03 (第245図) SB02の東側に位置する。平面形は2間×2間の総柱建物で、長軸をN-12-Eにとる。梁間は270cm、桁行きは260cmを測る。柱穴は西側の両角が楕円形でその他は円形を呈し、径32~64cm、深さ10~41cmを測る。北西隅の柱穴から土師坯の小片が出土した。黒褐色を呈し、胎土中に白色砂と雲母片を僅かに含んでいる。底部は糸切りと思われるが明確ではない。

2) 土坑

SK002 (第245図) 調査区の西側に位置し、SB02に切られる。長軸をN-8°-Eにとる。平面は隅丸の長方形を呈し、長軸147cm、短軸75cm、深さ20cmを測る。断面は浅皿状である。覆土は下半が灰茶褐色土、上半が茶褐色土である。床面から5cmほど浮いて人頭大の礫を含む。覆土中から中世と思われる土師質土器片と自然面を残す黒燧石の小片が出土した。

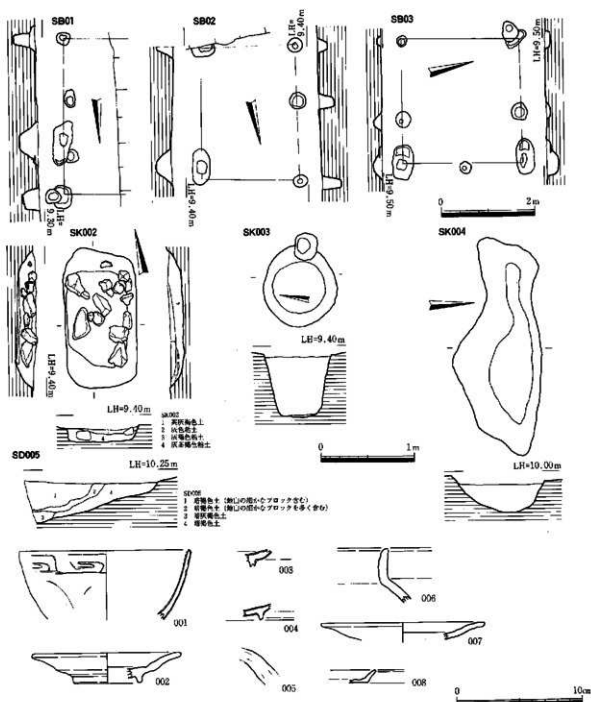
SK003 (第245図) SK002の北側に位置する。平面は円形を呈す。直径81cm、深さ72cmを測る。断面は逆台形を呈す。覆土は暗褐色粘質土で全体に炭化物片を含む。橙色粘質土の下の礫混じり土まで掘り抜いており、井戸の可能性はある。遺物は出土していない。

SK004 (第245図) I区の東側に位置する。長軸をN-88°-Wにとる。平面形は不整形で人為的な遺構であるか不明である。長径224cm、短径93cm、深さ62cmを測る。覆土は黄色味を帯びた褐色土である。遺物は出土していない。

3) 溝 3条検出した。

SD001・005 (第244図) 調査区の西側に位置し、東西方向に流れる。2条並行しており、幅は001で84cm、深さは両方とも14cmを測る。001は東端が南側に向きを変えている。覆土は暗茶褐色粘質土である。005から青磁碗、白磁片、高台付き土師皿等が出土している。出土遺物(第245図)001は青磁碗である。復元口径13.5cmを測る。外面口縁に當文帯を施す。軸は深緑を呈す。胎土は白色で粗めである。002は青磁高台付き皿である。軸は薄く黄色味を帯びる。胎土は灰色で粗い。壘付きと高台内は無軸である。口径11.7cm、器高2.4cmを測る。003は青磁碗片である。軸はやや厚めで緑かかった青色を呈す。貫入は細かい。内面の底部と体部の境に段が1条みられる。胎土は白色。004は白磁碗片である。軸は薄く半透明で胎土はやや灰色かかる。高台部分は軸を削り落としている。005は白磁水注の注ぎ口片である。軸は薄くやや灰色かかる。胎土白色。006は土師器壺である。外面黒色、内面白色を呈し、胎土は粗く白色砂を多量に含んでいる。007は土師器皿である。復元口径12.9cmを測る。暗茶褐色を呈し白色砂を多量に含む。008は土師皿である。橙色を呈し、底面は糸切りである。

SD006 (第244図) 調査区の東側に位置する。SD001・005の延長に位置し、同じ溝である可能

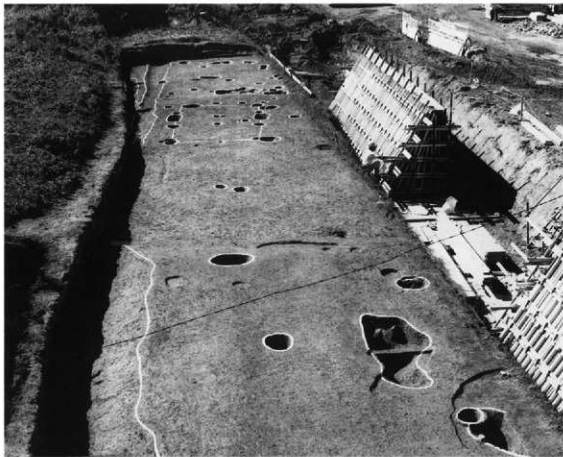


第245図 遺構・遺物実測図(SB01-03は1/80・SK002-004は1/40・SD005は1/20・遺物1/3)

性がある。覆土は同じ暗茶褐色粘質土である。出土遺物なし。

5 小結

今回の調査では中世の溝3条、土坑2基、掘立柱建物3棟と時期不明の土坑を1基検出した。掘立柱建物の柱穴は1・2次調査と同様長軸方向に長いという特徴をもつが、建物のプランが明確ではなく、規模も小さい。溝は丘陵の先端にある当調査区を区画する溝であろうか。中央の切れ目は、削平や陸橋などの可能性がある。南側に集落の中心がくるものと思われ、今後の調査に期待したい。



第246回

1 I区全体図 (東から)

2 II区全体図 (西から)

1



2

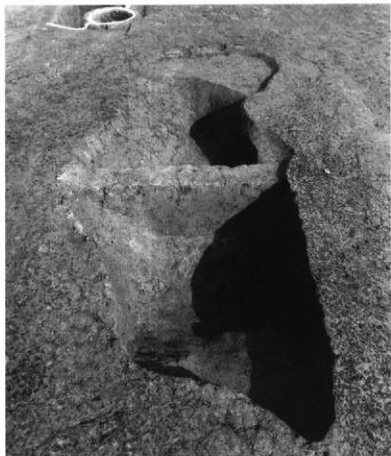


第247図

1 SK002土層 (西から)

2 SK002 (南から)

1



2



第248回

1 SK004 (西から)
2 SD005.L層 (東から)

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ

福岡市埋蔵文化財調査報告書第583集

1998年(平成10年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 慶和印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目15番1号

福岡市埋蔵文化財調査報告書第583集

国道202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ

付図1 飯氏遺跡第6次第1地点全体遺構実測図(1/200)

付図2 飯氏遺跡第6次第1地点中央部遺構実測図(1/100)

